ウソンと ジソン
おはなしの にわ



あいは、また かえって くるもの

あいは、

また かえって くるもの。

もくじ

ひとつめの にわ ・ きみどりの おうちの まいにち 11

きみを まっている せき 13

まどは さんかい たたくんだよ 23

ニョッキの したの かい 33

モリの きれた ひも 43

いちごは ひとつなのに 53

ひとつずつ おおい 日 63

ヌルが さきに ついた 日 73

この いしは とりかえっこ しない 83

ふたつめの にわ ・ あめの 日と あいた せき 93

モリの おうちに あめが ふる 95

ぼくの かごも あるよ 105

ぼくの ズボン、だれが なおしたの？ 115

きょうは いしも おやすみ 125

ちずは あってるのに みちが ない 135

ゆうがたの かねは にかい なった 145

クマタが いない あさ 155
きょう、森は こんなふうに すごしました 165
みっつめの にわ ・ お月さまが てらす よる 175
いすを かたづけなかった よる 177
お月さまが また みちを てらした よる 187
お月さまが にもつを つつんで くれた 日 197
よっつめの にわ ・ とおくから きた ともだち 207
アルの ふね 209
ぼく、わざと おそく はいったんだ 217
かねだってば、おなべだってば 227
スープが エプロンを きたんだって 237
いつつめの にわ ・ かえりみち 247
たからばこの しつもん 249
ラッコの ほどけた かご 259
ジソンが さきに はしった みち 269
さきに ゆずる せき 279
よかった、だれも ひとりぼっちじゃなくて 289

森に すむ ともだち



ウソン

よんさいの おにいちゃん。あそびたい ことが できると、もう くつを はいて います。「ぼく、しってる。」



ジソン

さんさいの おとうと。みんなが とおりすぎた じめんで、たからものを みつけます。「おにいちゃん、これ まだ みてないよ。」



ラッコ

うみに すんで、まいにち かわを のぼって 森へ きます。いしに なまえを つけて、かごに いれて つれて あるきます。



ニョッキ

くびの ながい きみどりの きょうりゅう。ちいさな ものを ながく みつめると、くびが こって しまいます。



モリ

フードを かぶった ものしりの ともだち。「ひとつめ、ふたつめ……」と じゅんばんに せつめいします。「あ、きみの はなしは まだ きいて なかったね。」



ボリ

あおい オーバーオールの オレンジいろの こぐま。「いるかも、いるかも、もう ひとつ いれよう。」



ドゥドゥ

オーバーオールの ピンクの ぶた。しょうたいじょうを もって、きいて、きいて、まだ ききます。「どこで？ いつ？ だれと？」



ピオ

ちいさくて こえの おおきい とり。たかくは とべません。さきに さけんで、ぱたぱた いって しまいます。「きいた？」



コンイ

つちの なかの ちずを かく モグラ。ちずを ひろげると、ともだちが ちずの うしろに かくれて しまいます。



ヌル

カタツムリ。あるくのが ゆっくりだから、でかけるのが はやいのです。「あさから むかって いたよ。」

それから、あおい ビーズクッションで ねころぶのが すきな ながい ちゃいろの くま クマタと、そらで いつも いっしょに いる お日さまと お月さま。

よんで あげる ときに

どの話にも、まん中あたりにひと休みの区切りがありますので、そこで分けてふた晩で読んでもかまいません。

ラッコの「はいって はいって」、ボリの「いるかも、いるかも」、ドゥドゥの「どこで？ いつ？ だれと？」は、二回目に出てきたときから子どもといっしょに歌ってみてください。

きりかぶテーブルにいつもひとつ余る席とコップがだれのものか子どもにたずねられたら、まずどう感じたのかを聞いてあげて、本の最後の「おとなの かたへ わたす いちまい」をいっしょに読んでみてください。

ひとつめの にわ

きみどりの おうちの まいにち

きみを まっている せき



まだ だれも いなかった ころの ことでした。

そらも からっぽで、じめんも からっぽでした。かぜが ふいても かみの けを なびかせる こどもは いなくて、あさが きても めを こすりながら おきる かおも ありませんでした。

そらの うえで、だれかが おもわれました。

「ああ、あいしたい。」

はなして あげたい おはなしは たくさん ありました。でも「それで どう なったの？」と きいて くれる だれかは、どこにも いませんでした。

「だれかと いっしょに わらって、いっしょに ながめて、ずっと ずっと いっしょに くらしたい。」

まだ あった ことの ない だれかの ことを おもうと、してあげたい ことが つぎから つぎへと うかんで きました。そのだれかは、はしりまわって のどが かわくでしょう。ながく あるけば あしが いたく なるでしょう。ある 日は、なんとなく ひとりぼっちの きが する ことも あるでしょう。

それで、せかいを ひとつずつ つくりはじめられました。

のどが かわいたら のめるように、みずを おかれました。つかれたら ねころべるように、くさはらを ひろげられました。ねころぶと せなかが ちょっぴり くすぐったい くさです。

あつい 日には、ひとやすみ できる こかげも つくられました。おおきな きの したには おおきな こかげを、ちいさな きの したには ちいさな こかげを。

ちいさな あしたちが おたがいを たずねて いける みちも ひらかれました。まっすぐすぎると あるく たのしみが ないかもしれないと、みちは わざと くねくね まげて おかれたそうです。

そして、ひるは お日さまと なって、よるは お月さまと なって、せかいを てらす ことに されました。どこを あるいても、ひとりぼっちだと かんじないように。

森の はずれには、おおきな きりかぶが ひとつ ありました。ずっと ずっと むかしから。

そうして 森に、はじめての あさが きました。

・

それから あさが なんども なんども すぎた ある はるの 日、そらは いつもより ずっと あおく すんで いました。

「ジソン、きょうは そとで たべよう！」

ウソンが きみどりの おうちの かいだんを にだんずつ かけおりながら さけびました。ジソンは てすりに つかまって、いちだんずつ りょうあしを そろえて おりて きました。

「そとで？ カフェみたいに？」

「うん。コップも ならべて、いすも ならべて。」

ジソンは それが どんな ものか よく わかりませんでした。でも コップが でて くると きいて、もう うれしく なりました。

ふたりは ともだちを よびに いきました。オレンジいろの ちいさな クマの ボリは、あおい オーバーオールの うえに エプロンを つけて、パンの かごを もって でて きました。まんまるの ラッコは、かわべの ひらたい いしの うえで ちょうどいきを ととのえて いる ところでした。

ラッコの おうちは うみです。まいあさ かわを さかのぼって、森まで およいで きます。だから あさの ラッコからは、いつも しょっぱい うみの においが します。

くびが とっても とっても ながい ニョッキは、よばなくても きました。きの うえに にゅっと つきでた あたまが、にわの どこからでも みえるからです。

（かくれんぼの とき、ニョッキが かくれられる ところは たった ひとつ、くもの なかだけです。それも、くもが ひくくうかんで いる 日だけ。）

ウソンは コップの おぼんを、ジソンは スプーンを ひとつかみ もちました。にわの はしの きりかぶテーブルまでは なんぽも ないのに、その あいだに スプーンが ふたつも くさのうえに おちました。

ところが テーブルの まえで、みんな ぴたっと たちどまりました。

テーブルが もう ととのえて あったのです。

きりかぶの うえに、コップが ぐるりと ならんで いました。おおきな コップ、ちいさな コップ、もちてが ぜんぜん ない コップ。その まわりには、かたちが みんな ちがう いすが ありました。

「ぼくたちが よういしようと おもったのに。」

ウソンが おぼんを もった まま、くちを とがらせました。

「これ だれの？ だれが よういしたの？」

「しらない。」みんな くびを よこに ふりました。

ジソンが ゆびで コップを ひとつずつ さしました。

「ひとつ、ふたつ、みっつ…… いっぱい。」

ジソンには、みっつの つぎは 「いっぱい」です。だから ウソンが かぞえなおしました。

「ぼく、ジソン、ボリ、ラッコ、ニョッキ。」

ゆびが ごほん ぜんぶ ひらいたのに、コップが ひとつ あまりました。いすも ひとつ。

「ひとつ おおい。」

ラッコが おなかの うえで、ひらたい いしを ひとつ もちあげて みせました。

「もこりんも かぞえなきゃ。あさごはんの とき、そばに いて くれる いしなんだ。」

「いしも ごはん たべるの？」

「ううん。みてる だけ。」

もこりんまで かぞえたら、ぴったりに なりました。みんなわあっと てを たたきました。ところが ラッコが くびを かしげました。

「あ、もこりんは みず のまないや。」

それなら、また ひとつ あまって しまいました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ニョッキが コップを かぞえようと、あたまを さげました。ながい ながい くびが おりて きて、また おりて きて、まるい かおが ジソンの はなの さきで とまりました。ふたりの はなの さきが むずむず。

「はっくしょん！」

だれが くしゃみを したのかは、けっきょく だれにも わかりません。ジソンは スプーンを ぜんぶ おとして しまいました。

「クマタのじゃ ない？」

ボリが にわの ほうを ゆびさしました。

あおい ビーズクッションの うえに、ひょろりと ながい ちゃいろの クマ、クマタが ねそべって いました。ビーズクッションの よこの くさの うえには、ビーズクッションみたいに あおくて とても おおきな クマタの コップが、べつに おいて ありました。

「クマタ、これ、きみが よういしたの？」

クマタは めを はんぶん あけると、くびを ふるふる よこに ふりました。ビーズクッションが しゃかしゃかと いっしょに なりました。

「じゃあ、あの いすは クマタの いす？」

クマタは また ふるふる。クマタには ビーズクッションが いすだからです。それから また めを つむって しまいました。

「わからないなら、ぼくが すわっちゃう！」

ウソンが あまった いすに どすんと すわりました。そして おしりを ぴくっと うかせました。

「あっ、あったかい。」

その いすには、ひの ひかりが たまって いました。はっぱの あいだから おりて きた ひかりは、ほかの せきからは すぐに どいて いくのに、その せきからだけは はなれようと しませんでした。

ラッコが その まえの コップを ひょいと もちあげました。

「ウソンの ひじに ぶつかっちゃう。コップは したに いてね。」

ラッコは コップを くさの うえに そうっと おろしました。みずが ちゃぷんと あふれて、ラッコの まえあしに かかりました。

「あれ、ぬるい。」

ジソンが とことこ かけて いきました。コップを りょうてで つつみこむと、テーブルの うえの、もとの ばしょに もどしました。もちても いすの ほうへ むけて。

「これは ここ。」

「どうして？」ラッコが ききました。

「ここに いたよ。」

ジソンは それだけ いうと、コップから てを はなしませんでした。

ウソンは なんだか おしりが むずむず しました。まるで ひとの せきに すわって いるみたいでした。

「この せきは、どうして あるんだろう？」

その とき、かぜが コップの あいだを ふきぬけて、ウソンの まえがみを ふわっと もちあげました。かぜの なかから、とても しずかな こえが きこえました。

「きみと いっしょに すわりたかったんだよ。」

ジソンは めを ぱちぱち させました。ぱち、ぱち。

「きこえた？」

ウソンは くちを あけた ままでした。

「きこえた。」

ラッコは もこりんを ぎゅっと にぎりました。ボリは パンの かごを だきしめ、ニョッキは そらの ほうへ くびを ぐうっと のばしてから、そっと おろしました。

だれか きて いるのか、たしかめなくては いけません。ウソンは いすの したを、ジソンは きりかぶの うしろを のぞきこみました。いすの したには アリが いっぴき。きりかぶの うしろには どんぐりの ぼうしが ひとつ。

「おにいちゃん、これ みて。まだ みた ことない やつだよ。」

ふたりが どんぐりの ぼうしを のぞきこんで いる あいだに、ボリが かごから パンを とりだしました。こうばしい にお

いが テーブルの うえに ひろがりました。ウソンの おなかが ぐう。ジソンの おなかも ぐう。

　すると みんな、だれが よういしたのか わすれて しまいました。ほんとうに きれいさっぱり。

「ここに すわろう。」

　ウソンが あったかい いすから すとんと おりて、ジソンのとなりの、じぶんの いすに うつりました。

　ジソンの いすは たかすぎて、あしが ぶらぶら しました。

「おにいちゃん、これ、やま だよ。」

「いすだよ。」

「やまみたいな いす。」

　ボリが パンを わけて、ラッコが かいを もこりんで こつんと わりました。ニョッキの はないきで、コップの みずが さざなみを たてました。

　ジソンは ポケットから どんぐりの ぼうしを だして、あいた いすの まえの コップの よこに おきました。

「ここに すわって いいよ。」

　その ひかりは、ひが むこうの きの うしろに しずむまで、その せきを はなれませんでした。

　その せきが どんなに むかしからの おもいなのか、こどもたちは まだ しりませんでした。

まどは さんかい たたくんだよ



その 日の あさ、ウソンは ひとりで きみどりの おうちを でました。ジソンが くつの かたほうを さがして いる あいだに、さきに にわを わたって しまったのです。ボリの おうちで あう ことに なって いたから、そこで まって いれば いいや、と おもって。パンの においが、もう 森の みちまで ただよって きて いました。

ボリの おうちの だいどころの まどは、ウソンの せより すこし たかいです。ウソンは つまさきだちを して、まどを たたきました。いっかい、にかい。

パンの きじを こねて いた ボリが、まどから かおを だしました。はなの さきにも、あおい オーバーオールにも、しろい こむぎこが いっぱい ついて いました。

「ぼくだよ。ジソン きた？」

「くる はずなんだけど。」

ボリは きじが べったり くっついた てを みおろしました。この てでは、ドアの とってを つかめませんでした。

「ちょっと まってて。うちの ドアは ねぼすけだから、にかい おさないと おきないんだ。」

ウソンは まちませんでした。まどわくに つかまって よいしょと よじのぼり、だいどころの なかに すぽんと はいって しまいました。ゆかに おりた とき、こむぎこが ぼふっ。

「にかいだってば。」ボリが ためいきみたいに わらいました。

「こっちの ほうが はやいもん。」

だいどころの どこにも、ジソンは いませんでした。テーブルの したにも、こむぎこの ふくろの うしろにも。

ドアが どん、どんと にかい なると、ぱっと ひらきました。ほこりを かぶった ピンクいろの ドゥドゥが かけこんで きました。まるくて ひらたい はなが、パンの においに ひくひ

く。くさいろの オーバーオールの ポケットからは、えんぴつが ちょこんと のぞいて いました。

「ぼく、ジソンに いったよ。パンを やく おうちで あおうって。」

「ここだよ。」

「そう。でも、あったかい ところって いったっけ？ まどって いったっけ？ てを あらって きてって いったっけ？ なんじって いったっけ？」

ドゥドゥは ゆびを ひとつずつ おりながら、じぶんに ききました。おる ゆびが たりなく なりました。

ボリが オーブンを あけました。こうばしい においが だいどころ いっぱいに ひろがりました。ウソンは でて いこうと、ドアの ほうへ からだを むけました。でも あしは ドアの ほうなのに、かおは どうしても オーブンの ほうへ むいて しまいました。

「さがしながら たべて。」

ボリは ゆびを ふうふう ふきながら、やきたての パンを ふたきれ かみぶくろに いれて くれました。まるくて かたちの いい パン。

ウソンは パンを うけとると、また てを さしだしました。

「もう ひとつ。」

「そんなに おなか すいてるの？」

「ジソンの ぶん。」

ボリは オーブンから かたちの いい パンを もう ひとつ だして、のせて くれました。ウソンは パンの ふくろを むねに ぎゅっと だきしめました。ふくろが ほかほかで、おなかまで あったかく なりました。

ウソンと ドゥドゥは、ひの あたる かわべの いしの うえに いって みる ことに しました。あったかい ところなら、あそこが いちばんだからです。

「ぼくが さきに いくよ。ぼく、しってるもん。」

ウソンが ずんずん あるいて いって、しげみの まえで ぴたっと とまりました。

「ちょっと まって、こっちだったっけ？」

「あっちじゃ ない？」ドゥドゥが はんたいがわを ゆびさしました。

しばらく まよって、やっと かわらに つきました。いしの うえには、ジソンの かわりに ラッコの いしたちが ならんで ねて いました。ラッコが おひるねさせて いった ようです。

ところが いちばん まるい いしの うえに、きいろい けだまが ひとつ うつぶせて いました。ふわふわの はねに、ちいさな かばんを しょった ことり、ピオです。

「ジソン いないね。あったかい ところで まってて って いったのに。」

ドゥドゥの ことばに、ピオが ぱっと かおを あげました。

「あったかい ところ！ きいた？ ぼく、ここに いるよ！」

「きみに いったんじゃ ないよ。」

でも パンの ふくろの かさかさいう おとに、ピオは めを ぱっちり。

「ぼくも ひとつ！」

「これは ジソンの。」ウソンが ふくろを せなかの うしろに かくしました。「ぼくのを ちぎって あげる。」

ウソンが じぶんの パンの はしっこを ちぎって あげると、ピオは ひとくちで ごっくん。それから ものたりないのか、ウソンの ゆびまで つんと つつきました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ドゥドゥが ポケットから メモを だしました。ジソンに わたした しょうたいじょうと おなじように かいて おいた いちまいです。ドゥドゥは いつも、もう いちまい かいて もちあるいて います。じぶんが なにを いったか、わすれちゃわないように。

『パンが あったかい うちに。』

その したに、あとから かきたした ことばが ありました。じが だんだん ちいさく なって、かみの はしっこで くにゃり。

『まどで まってて。』

「どの まど？」ウソンが ききました。

ドゥドゥは くちを あけてから、ぎゅっと とじました。ボリの おうちには まどが ふたつ あります。パンを やく まどと、うらにわを みる まど。

「まどって ふたつ だったっけ？」

「まど ふたつ！ まど ふたつ！」

ピオは もう ひくく ぱたぱたと とんで いって しまいました。どの まどかは ききも しないで。ウソンも パンの ふくろを かかえて はしりだしました。ふくろの なかで パンが みっつ、ぽん ぽん、ぽん ぽん。

ジソンは うらの まどの したに すわって いました。

かべに せなかを ぴったり つけて、りょうあしを まっすぐ のばした ままでした。ひざの うえには、ことりの からっぽの ごはんの おわんが ひとつ のって いました。くつは ちぐはぐでした。かたほうは じぶんの、かたほうは くつばこの すみに あった おにいちゃんの ふるい くつ。

「ピオが おなか すいてると おもって。」

ピオは おわんを みるなり、はねを ばたばた させました。

「ぼくの おわん！」

ピオが すの そばに おいて つかって いたのに、なくして しまった おわんでした。

「みちで ひろったの。」ジソンが おわんを りょうてで さしだしました。「おにいちゃん、これは まだ みて ないでしょ？」

ウソンは ジソンの まえに しゃがみこみました。いきが きれて、すぐには ことばが でませんでした。

「ドゥドゥが、パンを やく おうちって いったよ。あったかい ところって いったよ。まどって いったよ。」

ジソンは ゆびを ひとつずつ おりながら いいました。ドゥドゥが いつも する のと そっくり おなじに。

「ここが いちばん あったかいの。ひが ここに くるんだもん。」

「どうして よばなかったの？」

「たたいたもん。」

ジソンは たちあがって、まどを とん、とんと たたいて みせました。とても ちいさくて、おとなしい おと。

まどの うちがわでは、きじを たたく おとが して いました。ぱん、ぱん。ぱん、ぱん。ジソンの とん、とんは、ボリの ぱん、ぱんの なかに すっぽり かくれて しまいました。

ウソンは まどの まえに たちました。にかいじゃ だめそうだ、と おもいました。

「まどは さんかい たたくんだよ。」

とん、とん、とん。

きじの おとが ぴたっと やみました。ボリが うらの まどを がたんと あけました。

「ここに いたんだね。パンが さめちゃう！」

それから ウソンを みおろして、めを ほそく しました。

「さっきは にかい たたいたじゃない。」

「さっきは さっき。」

みんな まどの したに すわりました。ボリも ドアの ほうは みむきも しないで、まどわくを こえて でて きました。まるい おしりが まどわくに ちょっと ひっかかって、すぽっと ぬけました。

ウソンは ドゥドゥに パンを ひときれ わたして、ジソンの ぶんも だしました。パンは まだ ほかほかでした。ジソンは パンを ちぎって、ピオの おわんに いれました。

「たべて。」

ピオが パンくずを つんつん つつきました。

ウソンは そこで やっと、ジソンの あしを みました。

「それ、ぼくの むかしの くつだよ。」

「ぼくのだよ。」

「おにいちゃんのでしょ。ほら、おおきいじゃない。」

「いまは ぼくの。」

ジソンは あしを にゅっと だして ふりました。ぶかぶかの くつが つまさきで ぶらぶら。そして ぽとんと ぬげて、ウソンの ひざの まえに おちました。

「……でも あったかいもん。」

ジソンが くつを また ひろって はきながら、いいはりました。ウソンは なにか いおうと して、やめて、じぶんの パンを ひとくち たべました。

ドゥドゥは メモを うらがえして、えんぴつで まどを かきました。しかくを ひとつに、じゅうじを ひとつ。その よこに ジソンも かきました。まるい かお、まっすぐ のばした りょうあし、ひざの うえの ちいさな おわんまで。

ドゥドゥは メモを ポケットに すぽんと いれて、すぐに また だしました。

「こんどは どこで あう？」

ドゥドゥは えんぴつを ふりながら、うたうように さけびました。

「どこで？ いつ？ だれと？ それと、その まえに もう ひとつ！」

「もう ひとつって なに？」ウソンが ききました。

ドゥドゥは えんぴつの さきを かんで、そらを みあげました。

「それは…… あした おしえて あげる。」

さんばんめの おはなし

ニョッキの したの かい



あそびばの すべりだいの まえで、ウソンと ジソンは ニョッキを まって いました。ニョッキが すべりだいの てっぺんの よこに くびを つけて くれる やくそくを したからです。そのくびを つたって、もう いちど すべりおりるのです。せかいで いちばん ながい すべりだいに なるんだと、ウソンは もう ごかいは いって いました。

ところが ニョッキが きませんでした。すべりだいを じゅっかい すべって、くつの なかの すなまで ぜんぶ だしても。

「さがしに いこう。」

森では、テントウムシに のって いどうします。ちかい みちは、あかい テントウムシと きいろい テントウムシが せなかに のせて くれます。とおい とおい みちを とんで いく おおきな はねの テントウムシも います。いつも どこかで ねているので、まだ だれも のった ことが ありません。ウソンは あかい テントウムシに、ジソンは きいろい テントウムシに のりました。

ニョッキは みちの まんなかに いました。おおきな からだは みちの うえに あるのに、ながい くびは みちばたの くさむらの おくに はいりこんで いました。あたまは ちっとも みえませんでした。

ウソンが ニョッキの きみどりいろの せなかを ぽんぽん たたきました。

「ニョッキ、おきて。あそぼう。」

へんじの かわりに、しっぽが ぴくっと うごきました。ひだりへ いっかい。それだけでした。

ジソンが ぺたんと はらばいに なって、ニョッキの おなかの したを のぞきこみました。ミルクいろの おなかの むこう、くさむらの なかに、ニョッキの かおが ちらっと みえました。

「め、あいてるけど。」

「め あけた まま ねてるんじゃ ない？」

「まばたき したよ。いま。」

きょうだいは すずしい おなかの したに ねころんで、ニョッキの いきに あわせて いきを しました。すって、はいて。すう、はあ。

ピオが みちばたの いしの うえに ぴょこんと のりました。

「ニョッキ どうしたの？」

「わからない。うごかないんだ。」ウソンが おなかの したから はいだして きました。「どこか いたいのか、それとも……」

ピオは そこまでしか きいて いませんでした。

「ニョッキが いたいんだって！」

ピオは もう みじかい はねを ぱたぱた させながら、ぴょんぴょん はねて いって いました。ピオは たかくは とべなくても、うわさを はこぶのは 森で いちばん はやいのです。

「いたいなんて いって ないのに？」

森の むこうで、ピオの こえだけが だんだん ちいさく なって いきました。「ニョッキが いたいんだって！ ニョッキが あ！」

ウソンは うでぐみを しました。

「ぼく、しってる。びょうきの ときは みずを のまなきゃ。」

ウソンは ぼうしを ぬいで、みちばたの おがわへ はしって いきました。ぼうし いっぱいに みずを くんで きました。ニ

ョッキは おおきいからです。あんまり いそいだので ぼうしが ぐらっと かたむいて、くさの うえに みずが こぼれました。

くさむらの なかから、あわてた こえが しました。

「そこは だめ！」

ジソンが りょうてで くさを そっと かきわけました。

ちいさな はっぱの したに、カタツムリの ヌルが いました。くるくる まいた つちいろの からを せおって、はっぱを いちまい かさみたいに さして いました。

「それ いじょう みずを あげたら、あふれちゃう。」ヌルが いいました。

「なにが？」

「ぼくの おにわ。」

ヌルの まわりには、ちいさな はっぱたちが よりそうように あつまって いました。はっぱ ごとに つゆが ひとつずつ。こぼれた みずは、ちょうど その よこに みずたまりを つくって いました。

「ごめん。」ウソンが ぬれた ぼうしを せなかの うしろに かくしました。

ジソンは はっぱに はなを くっつけそうに なって、とまりました。

「みても いい？」

「うん。そのかわり、ふうって ふかないでね。つゆが ゆれちゃう。」

ジソンは りょうてで くちを ぎゅっと おさえました。はないきが つよすぎて けっきょく つゆが ぷるぷる ふるえましたが、ヌルは みなかった ふりを して くれました。

（ヌルは 森の みずたまりを ひとつ のこらず しって います。なまえも ぜんぶ つけて あるそうです。きょう できた みずたまりの なまえは 「ウソンの ぼうし」です。）

ニョッキは ヌルの おにわを みて いました。とても ながいあいだ、とても ちかくで。

「こんなに ちいさな ところに、また 森が ある。」

ニョッキが ひそひそ いいました。きょうだいも ニョッキのかおの よこに ならんで、はらばいに なりました。くさが ほっぺに こちょこちょ。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

つゆの なかには、きが さかさまに たって いました。そらはしたに あって、ねっこは うえに あります。その まんなかに、ニョッキの かおも とても ちいさく はいって いました。

「ニョッキ、ちっちゃい。」ジソンが わらいました。

「ぼくも はいりたい。」

ウソンが かおを ぐっと ちかづけると、つゆの なかには ウソンの はなだけが おおきく はいりました。

「おにいちゃんの はなだけだよ。」

ニョッキも わらいたく なったみたいです。わらう ときは いつも くびが よこに かたむくのに、きょうは かたむきかけて、とちゅうで ぴたっと とまりました。

「じゃあ、どうして おきないの？」

「おきたいんだけど。いてて。あさから ずっと ここを みていたら、くびが かちかちに なっちゃった。」

ちいさな 森を みるのに むちゅうに なって、くびが かたくなって いくのも、すべりだいの やくそくも、すっかり わすれて いたのです。

「すべりだいは？」ジソンが ききました。

「あ。」ニョッキの めが まんまるに なりました。「ごめんね。くびが なおったら、きっと やって あげる。」

ウソンが そでを まくりあげて、ニョッキの くびを りょううでで だきかかえました。

「ぼくが おして あげる。よいしょって すれば いいんだ。」

ニョッキは めだけ ころりと うごかしました。

「くびは やめて。くびは いま こわいの。ここ つかんで。」

ニョッキが めで しめしたのは、じぶんの ほっぺの よこでした。ウソンは そっと うでを ほどきました。

ところが ニョッキの ほっぺの すぐ したに、ヌルの はっぱが いちまい しかれて いました。

「まって。その はっぱ、さきに うごかしてから。」ヌルが しょっかくを のばしました。「この はっぱ、あさから はこんで いたの。」

ウソンが はっぱを つまんで あげようと すると、ヌルが しょっかくを ひゅっと ひっこめました。

「じぶんで やる。」

それで みんな まちました。ヌルは はっぱを ひっぱって、やすんで、また ひっぱりました。

ウソンは じっと して いるのが いちばん にがてです。あしの ゆびが どうしても もぞもぞ うごきました。くつの なかで もぞもぞ、くつから ぬけだして また もぞもぞ。

ヌルは その あしの ゆびの まえを とおる ために、ぐるっと まわりみちを しなければ なりませんでした。

「おにいちゃんの あしの ゆびの せいで、ヌルが とおまわり してるよ。」ジソンが くちを かくして おしえました。

ウソンは あしの ゆびを ぎゅっと まるめました。あんまり ぎゅっと まるめたので、かおまで まっかに なりました。

はっぱを ぜんぶ はこびおえると、きょうだいは ニョッキの ほっぺの したに てを あてました。ウソンは ひだりの ほっぺ、ジソンは みぎの ほっぺ。ニョッキの ほっぺは おもったより やわらかくて、あったかでした。

「いち、にの……」

「さんは ゆっくりね。」ニョッキが たのみました。

「さあああん。」

ニョッキが ゆっくり くびを のばします。くさむらから かおが のぼって きて、また のぼって きて、どこまでも のぼって きます。きょうだいは くちを ぽかんと あけて、うえを みあげます。

ニョッキが くびを ぐるりと ひとまわし させました。ぽきぽきっ！

「ありがとう。やっと うえの 森だ。」

ニョッキの かおには、はっぱが いっぱい くっついて いました。おでこに ひとつ、はなの さきに ひとつ、あごの したに みっつ。ジソンは それを みて、くさの うえを ころころ ころがりました。

森の むこうから、どしどし あしおとが しました。ピオが ボリを つれて もどって きました。ピオは ボリの あたまの うえに すわって いて、ボリは おおきな ふとんを くるくる まいて かかえて いました。せなかには かばんが ひとつ、ふたつ、みっつ。

「どこが いたいの？」

ボリが はあはあ いきを きらしながら ききました。

「いまは いたくないよ。」ニョッキが いいました。「でも すわる ものは ほしいな。」

ボリには、にもつを つめる ときに うたう うたが あります。

「いるかも、いるかも、もう ひとつ いれよう。」

きょうは その うたを さんかいも うたいました。だから かばんが みっつ。ひとつめの かばんからは ちいさな いす、ふたつめの かばんからは すいとう、みっつめの かばんからは パンが でて きました。いたい ときは、おなかも すくからです。

「ピオが、ニョッキが いたいって、すごく いたいって、ものすごく いたいって いって まわってたよ。くる あいだに、どんどん いたく なって いったんだ。」

「きいた？ ぼくが さいしょ！」ピオが むねを ぐっと はりました。

ボリは ふとんを くさの うえに ひろげました。ヌルの おにわは よけて、その すぐ よこに。

ふとんの うえに、みんなで はらばいに なりました。あたまだけ ふとんの はしに のせた ニョッキまで。ヌルが つゆの のった はっぱを もう いちまい ひっぱって きて、まんなかに おきました。

みんなで つゆを のぞきこみました。さかさまの きの あいだに、ウソンの かお、ジソンの かお、ボリの まるい みみ、ニョッキの はなの あなが じゅんばんに うつりました。ピオが はねを ばたばた させました。

「ぼくの かおは？」

ニョッキが くびを すこし うしろに ひきました。つゆの なかの おおきな はなの あなの ところに、ピオの かおが すぽん。

よんばんめの おはなし

モリの きれた ひも



モリの のきしたには、いろんな ものが なんでも あります。なくして みつかった もの、なおしてと あずけられた もの、まだ もちぬしが だれか わからない もの。のきの はしっこの したには あまみずを うける コップも ひとつ あって、のきに のこった あまみずが ときどき その なかへ ぽちゃん、と おちます。

きょうは ジソンも あずける ものが ありました。タイヤが ひとつ とれた おもちゃの にぐるまです。モリは あう くぎを

さがしに、のきしたの おくへ はいって いきました。なかで がちゃがちゃ、はこを かきまわす おとが ながい こと しました。

その あいだに、ウソンは いとまきを ひとつ みつけました。ふとい いとが ぐるぐる まかれた、きの いとまきでした。

ウソンが いとまきを みちに おいて、ころっと ころがしました。いとが みちの うえに ながく ほどけて いきました。

「ここまでが かわだよ！」

ジソンは かたあしで かわを わたりました。ぴょん。

「ぼく、かわ わたったよ！」

「じゃあ、もっと ひろい かわ！」

ウソンは いとまきを もっと とおくまで ころがしました。いとが みちの かどを まがって、くねくね まがります。

「うわあ、ながれが はやい！」

ジソンは わざと よろよろ、わざと くさの うえに べちゃっ。ウソンは それが おもしろくて たまらなくて、また いとまきを ころがしました。

「ここからは ジソンがわ。」

ジソンは じぶんの かわを わたる たびに、りょうあしで ぴょんぴょん はねました。

その とき、モリが のきしたから でて きました。フードを かぶって、ボタンが ふたつ ついた ふくを きた モリです。フ

ードの なかの まるい ミルクいろの かおが、もっと まるく なりました。モリは いそいで いとの はしを つかみました。

「それ、かごを なおす ひもだよ。ひとつめ、ラッコの かごの そこが ぬけたんだ。ふたつめ、この ひもは じょうぶだから、あんで おけば とても ながもちする。みっつめ、どうして ながもちするかって いうと……」

ウソンは モリの せつめいを はんぶん ききました。のこりの はんぶんは、いとまきを みて いました。もう いっかいだけ ころがしたかったのです。たった いっかいだけ。

ウソンが いとまきを にぎった てを ひっぱりました。モリも はしを つかんだ てを ひっぱりました。ひもが ぴんと はって、ぷつん。

「なんで ひっぱるの！」

ウソンの こえは、おもったより ずっと おおきく でました。ジソンが かたあしを あげた まま、かたまりました。

モリは いいかえしませんでした。きれた ほうを みおろしてから、そでに ついた いとを いっぽん とりました。つめの さきで、とても ゆっくり。

ラッコが かごを かかえて かわから あがって きました。かごの そこは ぶらぶら。

「モリ、ひも ある？ ぽちゃりんが すぐ そこから おちそうに なるんだ。」

ぽちゃりんは、ラッコが だいじに して いる まるい いしです。

モリは きれた ふたつの ひもを ひろって、はしと はしを むすびました。むすびめが まるく ぷっくり もりあがりました。その ひもを かごの あなに とおして みましたが、むすびめが あなの まえで ひっかかって しまいました。

「あした また やって あげる。」

「だいじょうぶ。この こたちは もう ひとばん ここで ねれば いいよ。」

ラッコは かごから いしを ひとつずつ だして、のきしたの たなに ねかせました。「おやすみ。」「あしたね。」「きみは いびき かかないでよ。」

（いしは ほんとうは いびきを かきません。でも ラッコの いしの なかに、ひとつだけ かく いしが あります。とても ちいさく、ぐう ぐう。）

ラッコは なんでも ない かおを して いました。でも ウソンは、その ばに それ いじょう たって いられませんでした。いとまきを みちに おいて、くるっと むきを かえて はしりました。

ウソンは のきしたから みえない きの うしろに しゃがみこみました。てには みじかい ひもが ひときれ のこって いました。さっき じぶんが だした おおごえが、まだ みみの なかで わんわん ひびいて いました。

ジソンが きて、となりに すわりました。なにも きかないで、ただ。てには、モリの そでから おちた いとが いっぽん。

「モリ、おこった？」

ほんとうは、ウソンが いちばん ききたかったのが それでした。

ジソンは いとを ゆびに まきつけました。

「しらない。しずかだったよ。」

ウソンは ひもを ゆびに ぐるぐる まいては ほどきました。おしゃべりな モリが、さっきは ひとことも いいませんでした。

「ごめんねって いえば いいじゃない。」

ジソンは とても かんたんな ことみたいに いいました。

「わかってるけど、くちが うごかないの。」

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ウソンは くちびるを ゆびで ぎゅっ ぎゅっと おして みました。ご、め、ん、と くちの かたちを つくろうと したら、くちびるが アヒルの くちばしみたいに つんと とがりました。ジソンが まねを して、くすっと わらいました。

その 日の ごご ずっと、ウソンの くちは とうとう うごきませんでした。

よるに なると、きみどりの おうちの かいだんの よこの ふたつの ベッドが、すうっと まどべへ おりて きました。お月

さまも きて くださいました。ふとんの うえに、しろい ひかりが しかくく おりて きました。

パジャマを きた ウソンは、ふとんを はなの さきまで ひっぱりあげました。そして とても ちいさな こえで ささやきました。

「お月さま、ぼく、あしたは ごめんねって いいます。くちが ちゃんと うごくように して ください。」

となりの ふとんで、ジソンが もぞもぞ しました。

「ぼくも。にぐるまの タイヤも。」

「それから、ひもも また くっつくと いいな…… ラッコの いしたちも、たなで さむく ないように……」

ウソンの こえが だんだん ゆっくりに なりました。

「それから…… ぽちゃりんは…… それから……」

さいごの 「それから」の あとに なにを いおうと したのかは、だれも しりません。ウソンも しりません。もう すやすや ねむって いたからです。ジソンは それより さきに ねむって いました。くちを ぽかんと あけて、あしを ひとつ ふとんから だした まま。

（お月さまは とても みみが いいそうです。ねぼけて いいかけた ことばも、お月さまの むこうの、もっと とおくまで きこえるそうです。）

お月さまは その あしの うえまで、ひかりを かけて くださいました。

つぎの 日の あさ、ジソンが スプーンを もって さけびました。

「おにいちゃん、ごはんに きらきら かけて！」

ジソンは、のりの こなの きらきらを かけた ごはんが いちばん すきです。ウソンが いれものを あんまり たのしく ふった せいで、ごはんが まっくろに なりました。

「たくさん きらきら してるね。」

ジソンは まっくろな ごはんを、おいしそうに ぜんぶ たべました。

のきしたに いって みると、モリは きのうの むすびめを ほどいて いました。ラッコは たなに ねて いる いしたちの そばで、ほおづえを ついて いました。コップの なかに、あまみずが ぽちゃん。

ウソンは モリの すぐ まえまで いって、くつの さきばかり みました。

モリが むすびめを もった まま、はなしだしました。

「この むすびめは…… あ、きみの はなしは まだ きいて なかったね。」

ジソンが うしろから、おにいちゃんの ふくを そっと おしました。

くちが、うごきました。

「おおきな こえ だして ごめんね。きいてから つかえば よかった。」

「うん。こっちも びっくりしたよ。」

モリが むすびめを おきました。

「でも、これが もんだいなんだ。むすぶと むすびめが できて、むすびめが できると あなを とおらない。」

ウソンは かごの あなに めを ぐっと ちかづけて みました。あなは ちいさくて、むすびめは ふとっちょでした。そのうち、とんでもない かんがえが うかびました。

「むすびめが あなに はいらないなら、むすびめには なかで くらしてって いえば いいじゃない。」

「なかで？」

「うん。かごの なかに。おうちに いてって。」

ウソンは ひもを かごの うちがわから とおして みせました。むすびめが かごの うちがわの かべに ぴたっと ひっかかって、とまりました。もう ひもは ぬけませんでした。

モリの めが まるく なりました。

「それは おもいつかなかった！ むすびめが うちがわで ドアの とっての かわりを するんだね。ドアの とってって いうのは、もともと ドアに つける ものなんだけど……」

モリの せつめいは ながく ながく つづきました。ウソンは とちゅうで かごを あみに いって しまい、ジソンは いとまきの ばんで いそがしく して いました。いとまきが ぴくっと うごいただけで、「だめ！」と りょうてで ぎゅっと おさえました。

さいごまで きいて いたのは、たなの うえの いしたちだけです。

のこった みじかい ひもは、ジソンの にぐるまの タイヤをむすぶのに つかいました。タイヤが また ころころ。

「ぼくの にぐるま！」

かごの そこが ぜんぶ あみあがると、ラッコが たなから いしを ひとつずつ つれて きました。そして かごに いれる たびに、うたを うたいました。

「はいって はいって、きょうは ぼくと いこう。 でてきて でてきて、あしたは きみ おやすみ。」

いし ひとつに いっかいずつ。いしが じゅういっこ だから、うたも じゅういっかいです。さんかいめ くらいから ジソンが いっしょに うたいました。ごかいめ くらいからは ウソンも、はっかいめ くらいからは モリもです。

さいごは ぽちゃりんの ばんでした。こんどは みんなで こえを はりあげて うたいました。

「はいって はいって、きょうは ぼくと いこう！」

ごばんめの おはなし

いちごは ひとつなのに



その 日の ごご、ウソンと ジソンは にわの きりかぶテーブルで ブロックを つんで いました。ウソンが とうを たかく つむと、ジソンが いちばん うえに ちいさな ブロックを もう ひとつ のせます。すると とうが がらがらっ。すると ふたりで いっしょに けらけら。

ラッコが いちごを ひとつ もって、かわから あがって きました。とても あかくて、とても まるくて、ラッコの てのひらに すっぽり おさまる いちごでした。

ウソンの みみが ぴんと たちました。ウソンは せかいで いちばん いちごが すきなのです。

ラッコは テーブルの まんなかに いちごを おいて、じいっと みおろしました。

「さっきは ふたつ だったのに。」

ちょうど あそびに きて いた ドゥドゥが、くびを にゅっとのばしました。

「もう ひとつは？ どこ いったの？ いつ？」

ラッコは まえあしを もじもじ させました。くちの まわりに、あかい しるが ついて いました。

「さっき たべちゃった。ひとつは たべて、ひとつは もってくる。そう きめて おいたんだ。」

ラッコは およいで くる あいだ ずっと、いちごを おなかのうえに のせて、りょうほうの まえあしで しっかり おおってきました。おかげで いちごは ちっとも ぬれなかったけれど、ラッコの おなかの けが ピンクいろに なって しまいました。

ジソンが ブロックを おいて、いちごの まえに おさらを ひとつ おきました。

ウソンは おさらを もう ひとつ おきました。それから また ひとつ。ジソンの ぶんが ひとつ、じぶんの ぶんが ひとつ、それから じぶんの ぶんが もう ひとつ。

「おにいちゃん、おにいちゃんの ふたつ あるよ。」

「……これは れんしゅうよう。」

ドゥドゥは にわじゅうに ひびく こえで、ともだちを よびました。

「ボリ！ ピオ！ いちごが ひとつ だけだよ！」

ドゥドゥは ポケットから しょうたいじょうを だして、えんぴつで いそいで かきました。

『いちごの あつまり。いま。いちごは ひとつ。おそいと ない かも。』

その したに ちいさく、もう いちぎょう かきたしました。

『でも きたら うれしい。』

ピオが いちばん さきに かけて きました。

「いちご どこ？」

ボリは はあはあ いきを しながら、あとから きました。せなかには ふくらんだ かばん、てには むぎちゃの びん。ボリは すわるなり、まず コップを みたしました。いちばんめは、だれも すわって いない あの せきの まえの コップに つぎました。だれが よういしたのか わからない テーブルに であった あの 日から、ボリは いつも そうします。どうしてって きくと、「いちばんめ だもん」と いう だけです。にばんめに つぐ ぶんからが、ともだちの ぶんです。

「はんぶんこ しよう。」ウソンが てを ほうちょうみたいにして、いちごを さしました。「はんぶんに きれば いいよ。」

「なんにんで たべるの？」ドゥドゥが ききました。

ウソンは ゆびを いっぽんずつ ひらきました。

「ラッコ、ドゥドゥ、ボリ、ジソン、ぼく……」

ゆびが ごほん ぜんぶ ひらきました。ピオが その ゆびさきに ぴょこんと とまりました。

「ぼくは？」

「いま かぞえようと したの。」

ジソンが てを ぱっと あげました。

「いっぱいに きれば いいよ！」

「いっぱいって いくつ？」ウソンが ききました。

「いっぱい。」

ドゥドゥが 「じゃあ ろくも いっぱい？」と きくと、ジソンは うれしく なって こたえました。

「うん！ ろくも いっぱい、じゅうも いっぱい。」

ウソンが、ピオの とまった てを ぐっと つきだしました。

「ちがうよ。ろくは ろくだよ。ほら、ゆびが ごほんと ピオ。」

ボリが かばんを あけました。かさ、けいとの てぶくろが、つぎつぎに でて きました。

「てぶくろは なんで？」ウソンが てぶくろを はめて みました。

「いちごが つめたいかも しれないでしょ。」

いちばん したからは、まるくて ひらたい パンが でて きました。

「これを しいて、その うえに いちごを のせれば いいよ。」

ボリが パンの まんなかを ぎゅっと おすと、パンが よこに ぺたんと ひろがりました。もう パンは おさらより おおきい です。ドゥドゥが おさらを ふたつ くっつけて、ささえました。

ウソンが てぶくろの ゆびで、いちごを そうっと つまみました。ところが てぶくろを はめた ゆびには、おもったより ちからが はいって しまいました。

いちごが ぎゅうっと つぶれて、パンの うえに ぽとっと おちます。

みんな くちが あんぐり。あかい しるが ひろがります。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

「ぼくの いちご……」

ウソンの こえが ちいさく なりました。ピオは その ゆびから、テーブルへ うつって とまりました。

いちごは もう、はんぶんにも、ろくにも、いっぱいにも わけられませんでした。ウソンは めを ぱちぱち させました。

「これは…… わざと やったの。」

「わざと？」ドゥドゥが ききました。

ウソンは くちを ぱくぱく させる だけ。ボリが パンの ふちを ゆびで ぎゅっと おして みました。

「だいじょうぶ。パンが いちごを きたね。ぐうっと のばして ぬれば、ぜんぶ いちごあじだよ。」

ウソンが スプーンを とろうと すると、ジソンが さきに スプーンを さっと とりました。

「ぼくが やる。」

「いっしょに やろう。」

「ぼくが やるの！」

ジソンは スプーンの せで いちごを ぎゅっと おしました。それから よこへ すうっと、じぶんの まえの ほうへ だけ よせました。また ぎゅっ、また じぶんの まえへ。あかい しるが、ジソンの まえに だけ あつまって いきました。

「ジソン、そこだけ あかいよ。」

「ここが おいしい ところなの。」

いじを はった ときの ジソンの スプーンは、いわみたいに おもく なります。

ウソンは スプーンを とりあげませんでした。そのかわり、くっつけた ふたつの おさらを りょうてで もって、パンを くるりと まわしました。

ジソンの スプーンは おなじ ところに あるのに、パンが まわります。あかい しるが スプーンの したを とおって、ぐるりと ひろがって いきます。くるり、くるり、くるり。パンの うえに、まるで カタツムリの からみたいな あかい うずまきが できました。

「カタツムリ パン！」ピオが さけびました。

ジソンは じぶんが かいたと おもって、とくいそうに むねを はりました。ウソンは なにも いわずに、もう ひとまわし まわしました。

ボリが ナイフを もつと、ドゥドゥが ゆびで あちこち さしました。

「ここ？ ちがう、ここ？ なんかい きるの？ ピオのは ちいさくても いい？」

「だめ！ おなじに！」ピオが ぴょんと とびあがりました。

ドゥドゥが きいて いる あいだに、ボリは もう ナイフを さんかい おろしました。だから、ある きれは あつくて、ある きれは うすかったのです。

ラッコは じぶんの きれと ジソンの きれを かわるがわる みて、おさらを すっと おしだしました。

「とりかえる？ こっちの ほうが おおきいよ。」

ほんとうに、ラッコの ほうが おおきな きれでした。そのかわり、いちごは ほとんど ついて いませんでした。

「ぼくは これ。」

ジソンが じぶんの パンを りょうてで しっかり もちました。ちいさくて うすいけれど、はしっこまで あかい きれでした。

ラッコは じぶんの パンを ひとくち たべました。もぐもぐ。

「じゃあ、ぼくは これ。」

それから なんでも ない ように、もう ひとくち たべました。

ピオは じぶんと おなじくらい ちいさな きれを りょうあしで しっかり おさえて、つんつん つつきました。ウソンは けいとの てぶくろを はめた まま、うずまきの はしっこが かかった きれを、とても ゆっくり たべました。

ドゥドゥが にわの いりぐちの ほうを みました。

「だれか モリ よんだ？」

みんな、おたがいの かおを みあわせる だけでした。

「モリは おそく くるんだ。なおす ものが たくさん あるから。」ウソンが しってる ふりを しました。

ボリは あいて いる いすを ひとつ ひっぱって きました。それから じぶんの パンを はんぶんに わって、うずまきが とおった ほうを その まえに おきました。

その となりの あいた せきの まえでは、ボリが ついで おいた いちばんめの コップが、まだ ちゃぷちゃぷ ゆれて いました。

ラッコは いちごの へたを、ちいさな おさらの まんなかに きちんと おきました。みどりの はっぱが ほしみたいに ひらいた へた。

モリが にわに かけこんで きました。てには、なおして いた やかんの ふたを その まま もって いました。

「いちごの においが、のきしたまで きたよ。」

モリは いきを ととのえながら テーブルを みまわして、ちいさな おさらの まえで とまりました。

「いちごの へたって いうのはね。いちごの たねは もともと そとがわに ついて いるんだけど、それは どうしてかっていうと……」

それから はなしを やめて、ききました。

「これ、もらって いいの？」

「それは みてる だけ。」ラッコが いいました。「きみの パンは あっち。」

モリは うずまき パンを ひとくち たべて、めを ぎゅっと つぶりました。

「いちごの あじだ。」

ラッコが おなかを とんとん たたきました。

「あしたは みっつ さがして みるね。ひとつは たべて、ふたつは もって くる。」

「じゃあ、ひとつは ぼくの！」ウソンが てぶくろを はめたてを ぱっと あげました。

「また たりなく なるね。だれのから へらすの？」

ドゥドゥが さけぶと、みんな おなかを かかえて わらいました。ジソンだけ、くびを かしげました。

「ふたつなら いっぱい？」

ひとつずつ おおい 日



あさ はやく、ドゥドゥが きみどりの おうちの かいだんの したで、しょうたいじょうを ふりました。

「どこで？ いつ？ だれと？ それと、その まえに もう ひとつ！」

きくのも ドゥドゥ、こたえるのも ドゥドゥです。

「どこで？ きりかぶテーブル！ いつ？ ひが あたまの てっぺんに きた とき！ だれと？ みんなで！」

「もう ひとつって なに？」かいだんの うえから、ウソンが さけびました。

ドゥドゥが うらがわを おおきな こえで よみました。

「きょうの おひるは、みんなで ぐるぐる まぜて たべよう。ひとり ひとつずつ、いれる ものを もって くる こと。なにを もって くるかは ひみつ。クッキーと ジュースは、ボリの おうちの だいどころで みんなで つくろう。」

「ひみつ！」

ジソンは りょうてで くちを ぎゅっと おさえました。まだなんにも きめて いないのに。

きょうだいは アヒルの ふくを きて、かいだんを どんどん おりて きました。きいろい ふくで、フードの さきには オレンジいろの くちばしが ついて います。ジソンが だいじに だいじに して いる ふくです。おにいちゃんのと おそろいだからです。

みんな ボリの おうちの だいどころへ、どやどやと はいって いきました。ニョッキだけ、まどの そとから はなの さきを つっこみました。

ボリが エプロンの ひもを むすびながら、しごとを わけました。

「ウソンは たまご わり、ジソンは きじ まぜ、ラッコは クッキー はこび、モリは ジュース。ニョッキは まどの そとで

おうえん。ドゥドゥは しょうたいじょうを やったから、おやすみ。」

ウソンが たまごを つまみあげました。

「ぼく、しってる。たまごは こつんって たたけば いいんだ。」

こつん！

つよすぎました。たまごは からごと ボウルの なかに ぽちゃんと おちて しまいました。

「あ……」

「だいじょうぶ、まかせて！」

ジソンが いすの うえに たって、ゆびの さきで からを すくいあげました。

「ひとつ。ふたつ。おにいちゃん、ここにも まだ かくれてる。」

でも、きじ まぜは たいくつでした。まぜても まぜても きいろい ばかりでした。ジソンが ポケットに てを いれました。おひるに ひみつで もって いこうと おもって いた ちいさな いれものが、てに さわりました。

ごはんに かけて たべる きらきら！ ジソンが せかいで いちばん すきな もの。

ぱらぱら。

「ジソン！ それは ごはんに かける ものだよ！」ウソンが さけびました。

「クッキーも きらきら しなきゃ。」

ジソンは いれものを ぎゅっと にぎって、もう いっかい ふりました。ぱらぱらぱら。

ボリが きじを ゆびで すくって あじみ しました。しょっぱくて、こうばしくて、うみの かぜの においが しました。

「だいじょうぶ、まかせて！ クッキーを ふたしゅるい やけば いいよ。」

ボリは きらきらの きじを まるく まるめて、オーブンに すぽんと いれました。

「これは ジソンの クッキー。あまいのは、あたらしく もうひとつ。」

ボリの てが いそがしく なりました。こむぎこを いれて、ぐるぐる。こむぎこが しろく まいあがって、そばに いた ウソンを すっぽり おおって しまいました。きいろい アヒルが、すぐに しろい アヒルに なりましたね。

「はっくしょん！」

あんまり いそがしくて、ボリは オーブンの ことを すっかり わすれて しまいました。

ドゥドゥが はなを くんくん させました。

「ボリ、においが なんで くろいの？」

オーブンの すきまから、くろっぽい けむりが もくもく もれて きます。ボリは りょうてに きじが べったり ついて いて、うごけませんでした。

「だいじょうぶ、まかせて！ ぼくの くびは ながいもん。」

まどから、ニョッキの くびが にゅっと はいって きました。かべに かかった オーブンの てぶくろを くちで くわえて、はなに すぽっと かぶせました。それから てぶくろを はめた はなで てんぱんを ひっぱりだして、まどの そとへ たかく もちあげました。

「うえは かぜが たくさん ふいてるよ。すぐ さめるよ。」

ニョッキは クッキーを めの まえに ぐっと ちかづけて、ひとつずつ かぞえはじめました。

「ひとつ、ふたつ…… さっき かぞえたっけ？ ひとつ、ふたつ……」

てんぱんは きの てっぺんの たかさに ふわり。ニョッキは かぞえる たびに、はじめから かぞえなおしました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

「だいじょうぶ、まかせて！ ぼく、きのぼり とくいなんだ。」

ラッコが ニョッキの くびを するする のぼって いって、みずに うかぶ ときみたいに、てんぱんの よこに ごろんと あおむけに なりました。そして クッキーを ひとつずつ、おなかの うえに のせかえました。

「きみは まるりん。きみは くろりん。きみは きらきらりん。」

ラッコは ニョッキの くびを すべりだいに して、するーっと すべりおりて きました。おなかの うえの クッキーは、ひとつも おちませんでした。

ところが ラッコの おなかの うえには、もともと くろっぽい いしも ひとつ あったのです。

「どれが いし だっけ？」

「だいじょうぶ、まかせて！ そういう ことなら くわしいんだ。」

モリが ジュースの ピッチャーを もった まま、まえに でました。

「クッキーと いしを みわける ほうほうは みっつ。ひとつめ、たたいて みる。クッキーは とん、いしは かちっ。ふたつめ……」

モリは ピッチャーを もった てで、クッキーを ひとつずつ たたきました。とん、とん、とん、かちっ。

「みつけた！」

モリが くろっぽい いしを たかく かかげました。ピッチャーも いっしょに ぐいっと かたむきました。

とぽぽぽぽ。

ジュースが こぼれたのは、よりによって こむぎこを かぶった ウソンの あたまの うえでした。しろい アヒルが、オレンジいろの アヒルに なって しまいました。

モリが からっぽの ピッチャーを みおろしました。

「あ、みっつめが 『ピッチャーを まっすぐ もつ』だったのに。」

「だいじょうぶ。」ウソンの あたまから、ジュースが ぽたぽた たれました。「……まかせて。」

ウソンは アヒルの フードを ぬいで、さかさまに もちました。フードの なかに たまった ジュースを、じぶんの コップに そうっと そうっと つぎました。

「ほら。ちっとも すてて ないよ。」

その つぎに しっぱいする ばんは、だれにも まわって きませんでした。ひが もう、あたまの てっぺんに きて しまったからです。

きりかぶテーブルの まんなかに、おおきな きの うつわが おかれました。みんな せなかの うしろに ひみつを ひとつずつ かくして、ぐるりと たちました。

「さんで いれるんだよ。いち、に、さん！」

ボリが ふろしきを ほどきました。しろい ごはんが でて きました。

「もしかして、だれも ごはんを もって こないかと おもって。」

ドゥドゥが ふうとうを あけると、ふうとうからも ごはんが でて きました。

「みんな、ごはんを わすれそうな きが して。」

モリが ちいさな かごを あけました。また ごはん。

「まぜて たべるなら、ごはんが ないとね。」

ニョッキが あたまに のせて きた おおきな おなべを、どすんと おろしました。おなべ いっぱい、ごはん！

「ごはんが たりないと、かなしいもん。」

うつわの うえに ごはんが こんもり、また こんもり つもりました。うつわが みえなく なるくらい。

ラッコは おなかの うえから、わかめを ひとすじ とりだしました。わかめが ごはんの やまの てっぺんに、はたみたいにかかりました。

ウソンの ひみつは いちご！ ラッコが みつけて きて くれる たびに、たべないで ためて おいた いちご いつつぶが、しろい さかを ころころ ころがりおちました。

「いちごを ごはんに？」ドゥドゥが さけびました。

「ぼく、いちごが いちばん すきなんだもん。」

さいごに ジソンが きらきらの いれものを さかさまに して、ぱっぱっと ふりました。きらきらが ごはんの やまに、ぼたゆきみたいに どんどん ふりました。

「できた。これで おいしいよ。」

みんな スプーンを もって、ぐるぐる まぜました。まぜればまぜるほど ごはんの やまが くずれて、くさの うえまで ながれおちました。

ドゥドゥは くちを とがらせました。

「ひみつが ぜんぶ ごはんじゃ、ひみつに ならないじゃない。」

あたまが べとべとの ウソンは、ごはんに まざった いちごを ひとつぶ たべて みて、かおを ぎゅっと しかめました。

「いちごが ごはんの あじ する。」

ボリは ふちが くろっぽい クッキーを つまみあげて、ふうっと ためいきを つきました。

ラッコだけ、おおよろこびでした。きらきら クッキーを ひとくち たべると、めが まんまるに なりました。

「しょっぱい。うみの あじだ。」

「でしょ？」ジソンは とくいそうに むねを はりました。

ボリが クッキーを わけて いて、てを とめました。

「ひとつ、ふたつ、みっつ…… やっつ。ぼくたちは ななにん なのに。」

ドゥドゥが ジュースの コップを かぞえました。やっつ。モリが スプーンを かぞえました。それも やっつ。ニョッキが ごはんの おちゃわんを かぞえました。また やっつ。

「どうして ひとつずつ おおいんだろう？」

みんな かんがえこみました。

ドゥドゥは ゆびを おったり ひらいたり しました。「ぼく、だれかを にかい しょうたい したっけ？」

ボリは エプロンの ポケットを さぐりました。「いるかもって、もう ひとつ やいたっけ？」

ラッコは のこった クッキーを みみに あてて みました。クッキーは なんにも いって くれませんでした。

「あまったら へんでしょ？」ドゥドゥの くちは、まだ とがった ままでした。

のこった クッキー ひとつと ジュースの コップ ひとつは、テーブルの かたすみに ならんで おいて ありました。スプーン ひとつ、ごはんの おちゃわん ひとつも、その よこに ありました。

ボリが クッキーを とろうと すると、ジソンが りょうてを ぱっと ひろげて とめました。

「ぼく、この ままが いい。」

そして、ごはんつぶが いっぱい ついた スプーンを たかく あげました。

「みんなで たのしく たべよう！」

ななばんめの おはなし

ヌルが さきに ついた 日



えんそくの 日、ヌルは ひが 森の うえに のぼる ずっと まえに、おうちを でました。

かばんも おべんとうも もたずに。せなかの から ひとつで じゅうぶんだからです。

「さきに いくね。くさはらで あおう。」

そう いったけれど、きいた ともだちは ひとりも いませんでした。みんな まだ、ゆめの なかだったからです。

ひが たかく のぼった あとも、ボリは だいどころで ふろしきに にもつを つつんで いました。パンを いれて、すいとうを いれて、あめが ふるかも しれないから おおきな ぬのも。ひとつ いれる たびに、ボリは はなうたを うたいました。

「いるかも、いるかも、もう ひとつ いれよう。」

うたが おわると、ボリの てには また なにかが にぎられています。スプーン、また スプーン、それから ちいさな いす。

「くさの うえに すわれば いいじゃない？」ドゥドゥが きいても、むだでした。

「くさが ぬれてるかも しれないでしょ。」

えんそくの ぼうしを かぶった ウソンと ジソンが、だいどころの ドアを がたん がたんと にかい おして はいって きました。

「もう つめた？ いつ いくの？」

「もう すこし。」ボリは こたえながら、スプーンを もう ひとつ いれました。

ふろしきは もう、ボリより まるく なりました。ドゥドゥが ふろしきの うえに すわって おしりで ぎゅっと おさえて、やっと むすべました。

ドゥドゥが ポケットから ふうとうを ふたつ だしました。ひとつは ウソンの、ひとつは ジソンの。

「くさはらで おひるごはん。でも、おひるって いつだっけ？おなかが ぐうの まえ？ ぐうの あと？」

ウソンは こたえる かわりに、さきに たって はしりだしました。

「ついて きて。おかを こえて、まっすぐ いけば いいんだ。」

ところが すこし いって ふりかえると、ついて くる ともだちが いません。ジソンは だいどころの ドアの まえに すわりこんで、くつを さかさまに して ぱたぱた ふって いました。ちいさな いしが ひとつ、ころんと おちました。

「これ だった。」

その あいだに ボリは ふろしきを また ほどいて、いすをとりだしました。おもすぎたからです。

「これは おいて いこう。」

いすは だいどころの ドアの よこに、ひとりで のこりました。

やっと みんなで しゅっぱつしました。わかれみちで、ウソンが みぎを ゆびさしました。

「こっちが はやいよ。たぶん。ほとんど ぜったい。」

ところが みぎの みちの まんなかに、おおきな きが たおれて いたのです。ジソンは きの したを はらばいで くぐりぬけました。ボリは ふろしきが ひっかかって、きの はしまで ぐるっと まわって いきました。

きの したの しめった つちには、ほそく きらきら ひかる すじが ついて いました。ジソンの ひざが、ちょうど その よこを とおりました。

つぎには、ちいさな おがわが ありました。

ウソンは おがわの ほとりを いったり きたり しながら、わたる ところを さがしました。その あいだ ジソンは はらばいに なって、りょうてで みずを すくって のみました。かおを あげると、くさの はの したを ひかる すじが いっぽん とおって いました。さっき きの したで みたのと、おなじ すじです。

「ヌルも ここに きたよ。」

「うん、ヌルも くるでしょ。」ウソンの めは、おがわばかり みて いました。

「ちがう、きたの。」

「みつけた！ ここが いちばん あさい！」

ウソンが、あさそうな ほうに いきおいよく あしを いれました。

ざぶん。

みずが あしくびを こえて、くつの なかまで いっぱいに なりました。いっぽ あるく たびに、くつが ぐちゅ、ぐちゅと へんじを しました。

ドゥドゥが うしろを ふりかえりました。たおれた きの むこうに、ボリの おうちの やねが また みえました。

「ぼくたちの えんそく、なんで どんどん おうちの ほうへ いくの？」

その あいだに、ジソンは くさの はを いちまい めくって いました。

「おにいちゃん、ここは まだ みて ないでしょ。」

くさの はの うしろに、ひらたい いしが ぽつん ぽつんと ならんで いました。みずに しずんで いない いしと いしの あいだを、ひかる すじが つながって います。くねくね、とても ゆっくり とおった みちです。

（ヌルが とおった みちは、ひの ひかりが ななめに さす ときだけ きらきら ひかります。クモたちは その みちを こっそり あつめて、いとに つかいたがって いるそうです。）

こんどは おにいちゃんが ジソンの ほうへ もどって きました。

ボリは まず、ふろしきを わたしました。ドゥドゥが うけとって、いしの うえに たった ウソンが うけとりました。ふろしきは パンの においを させながら、てから てへ おがわを わたりました。

ジソンは いちばん さいごに わたりました。ひかる すじを ふまないように、したの さきが くちから ちょこんと でて いました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

くさはらには、ヌルが きて いました。
　いちばん ひろい はっぱの うえに、ちょこんと すわって。はっぱの さきには、つゆが ちいさく のこって いました。あさには もっと おおきかったはずの つゆです。
「ヌル！」ジソンが かけよりました。
「ずいぶん まった？」ウソンも あとから ききました。
　ヌルは しょっかくを ひとつ、森の はしっこの ほうへ かたむけました。
「ひが あっちに あった ときから。」
　ひが のぼりはじめた ばかりの ほうでした。いま ひは、あたまの まうえに ありました。
　ドゥドゥが ポケットを ごそごそ さぐって、かどが くしゃくしゃの ふうとうを もう ひとつ だしました。
「これ、ヌルの。きのう わたさなきゃ いけなかったかな？」
「だいじょうぶ。おとどい きいたよ。だから きのうは ばんごはんも たべないで、はやく ねたの。」
　ドゥドゥは くびを かしげました。おとどいと いえば、ドゥドゥが えんそくを おもいついた ばかりの 日だったからです。
　ボリが ふろしきを ひろげました。すいとうが でて、おおきな ぬのが でて、いるかもって いれた スプーンが いつつも でて きました。それから、ちいさな いすを ぬいた ところには、パンが はいって いました。

ボリは パンを ひとつずつ くばりました。さいごに のこった ボリの ぶんは、ふろしきの したじきに なって、ぺちゃんこに なって いました。ボリは それを もって にっこり わらいました。

「これは もともと こういう かたちの パンなの。」

ドゥドゥが パンを はんぶん たべた ところで ききました。

「でも、ぼくたち はやく きたよね？ なんで きみが さきなの？ いつ きたの？」

ヌルは パンを たべて いて、こたえる ひまが ありませんでした。ヌルは たべるのも とても ゆっくりだからです。ドゥドゥは まって いる うちに、パンを ぜんぶ たべて しまいました。ヌルは まだ もぐもぐ。

やっと、ヌルが くちの まわりを ふきました。

「ぼくは あさから ずっと、こっちに むかって いたんだよ。」

「ぼくたちも あさ でたよ。」

「ぼくは うんと うんと あさ。」

ジソンが パンを たべる てを とめて、いいました。

「きの したにも きらきら あったよ。」

「それ、ぼくの みち。きみたち、ぼくの みちを なんども ふんで いったよ。きの したで いっかい、おがわの ほとりで いっかい、いしの うえで いっかい。」

ドゥドゥが ゆびを ひとつずつ おって みて、くちを ぽかんと あけました。

かえる じかんに なると、ボリが きょろきょろ しました。くさはらを ひとまわり して、からっぽの ふろしきを ぱたぱた はたいて みました。

「ぼくの いす、どこへ いったんだろう？」

それから、てを ぽんと たたきました。

「あ、もって こなかったんだ。」

ドゥドゥは わらって いる うちに、しゃっくりが でて しまいました。

ヌルは もう、しゅっぱつ して いました。ばんごはんの まえに おうちに つくには、いま でなければ ならないからです。

ウソンが ヌルの よこに しゃがみこみました。てには、まだかわききって いない くつが かたほう ありました。

「ヌル、これに のって いく？」

「くつに？」

「うん。なかが じめじめ してるよ。ヌル、じめじめ すきでしょ。」

ヌルは しょっかくを のばして、くつの なかを あちこち しらべました。つまさきも、かかとも、くつひもの あなまで ひとつ ひとつ。

「……いいよ。でも、もちあげる ときは ゆっくりね。」

ウソンは くつを くさの うえに ねかせて、ヌルが じぶんで はいって くるまで まちました。それは かなり じかんが かかりました。その あいだに ドゥドゥの しゃっくりは すっかり とまり、ボリは スプーン いつつを にかいも かぞえなおしました。

ヌルが くつの つまさきに、すぽんと おさまりました。

「ここ、ひんやり してる。まるで あさみたい。」

ウソンは かたほうの あしだけ くつを はいて、ヌルの のった くつを りょうてで ささえて もちました。くつを はいた あしは とん、はだしの あしは さく。とん、さく。あしおとが おかしくて、ジソンも まねを します。とん、さく。

ヌルが くつの つまさきから、しょっかくを ぐうっと のばしました。

「こんなに はやく いくのは はじめて。きょうは ばんごはんの まえに つけそう！」

この いしは とりかえっこ しない



その ひの あさ、ラッコは かわべの ひらたい いしの うえに ねころんで、いしを ひとつ みがいて いました。

ラッコの おなかくらいの、ひらべったい いし。かどが ひとつ かけて いて、まんなかには つめで そっと ひっかいたような ちいさな きずも あります。ラッコは その いしを みずに いちど つけて、けで ごしごし こすって、また みずに ぽちゃん。

かわべの あちこちに、ラッコの いしが おいて あります。ラッコは まいにち、その ひ いっしょに つれて いく いしを えらんで かごに いれ、のこりは かわべで やすませます。いしには ひとつずつ なまえも あります。あさの いし、ねむい いし、ドゥドゥが かりて かえした いし。

（かわべの いしたちは、ラッコが なまえを よんで あげる たびに、もっと つやつやに なります。モリは、それは みんな みずの せいだと いいますけどね。）

ニョッキが ながい くびを ぐうっと おろして、ラッコの まえに こいしを ひとつ おきました。みずに ぬれて きらきら ひかり、しろい すじが ふたつも はいった こいしです。

「これ みて。こっちの ほうが きれいだよ。」

ラッコは こいしを ちらっと みると、かけた いしを おなかの うえに のせて、りょうてで ぎゅっと かかえこみました。

「これは とりかえっこ しない。」

ウソンと ジソンが かわべに おりて きたのは、ちょうど その ときでした。ウソンの めには、ラッコの おなかの うえの いしが さきに とびこんで きました。うでの あいだから、ひびの はいった ところが ちらり。

「かけてるのに？」

「うん。」

ラッコは また みがきました。もう みがく ところなんて なさそうなのに、なんども なんども。

ニョッキは その きずが どれくらい ちいさいのか みようと、はなの さきを いしに ぴったり くっつけて、ながい ことじっと のぞきこみました。

「ちいさすぎて、ぜんぜん みえないや。」

はなの さきが、きずに くっついて いたのに。

かわべに おりて きた モリも、かけた いしを みました。モリは のきしたの ほうへ はしって いって、ちいさな のりのいれものを もって もどって きました。いきが きれて、フードが ゆさゆさ。

「かけた ところは、これで くっつければ いいよ。ひとつめ、あめが ふっても はがれない。ふたつめ、ぬりすぎると ゆびと ゆびが くっつく。みっつめ……」

ラッコは みっつめが でて くる まえに、くびを よこに ふりました。

「この ままで いい。」

モリは のりの ふたを あけたり しめたり しました。くっつけないでと たのまれたのは、はじめてでした。

ともだちは あたらしい いしを さがしに、みずべへ いきました。ラッコは ひらたい いしの うえに すわって、いしを かわかしました。でも、かけた かどの すぐ よこの、くぼんだ ところが なかなか かわきませんでした。ラッコは ほっぺを まあるく ふくらませて、そこに いきを ふきかけました。ふう、ふう。

　すると、くぼんだ ところから、とても ほそい おとが しました。ぴーっ。くさぶえよりも ちいさな おと。
　ウソンは みずべで いしを みっつ えらびました。まるい いし、しまもようの いし、それから まんなかに あなの あいた いし。
　「これ、ラッコに あげよう。これを あげたら、かけた いしは もう もって あるかなくても いいでしょ。」
　ジソンが あなの あいた いしを かりて、めに あてました。かたほうの めを ぎゅっと つぶって、あなから おにいちゃんを みました。
　「おにいちゃんが ちいさく なった。」
　「ちがうよ、ぼく おおきいもん。」
　ウソンは つまさきで せのびを しました。あなの なかの おにいちゃんは、それでも ちいさいままでした。
　ジソンは いしを かえすと、しゃがみこみました。みずべの すなの なかから、まめつぶくらいの ピンクの こいしを ひとつ つまみあげました。
　「おにいちゃん、これは まだ みて ないでしょ？」
　「それは ちいさすぎるよ。ラッコは おおきいのが すきなんだ。」
　ジソンは なにも いわずに、こいしを ポケットに すぽんと いれました。

ニョッキは みずべの はしっこで、あさ みつけて おいた いしを おして みました。ニョッキの どうたいくらい まるくて ひらべったい いしです。いしは びくとも しませんでした。ふたりも うしろから いっしょに おしましたが、さんにん ならんで しりもちを ついただけでした。

ニョッキが いいました。「いしを つれて いけないなら、ラッコを こっちに つれて くれば いいね。」

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ともだちは えらんだ いしを もって、ラッコの ところへ もどりました。

ラッコは あたらしい いしを じゅんばんに ころがして みたり、かぞえて みたり、みみに あてて みたり しました。それから ひらたい いしの よこに ならべて、なまえを つけて あげました。

「きみは ころりん。きみは するりん。きみは ちょろりん。」

でも、おなかの うえの いしは、さいごまで おろしませんでした。

ジソンが ラッコの よこに ぴったり くっついて すわりました。

「この いしの なまえは なあに？」

「かぜあな。」

「あな なんて ないよ？」

ラッコは かけた かどの よこの くぼみに くちを あてて、ふうっと ふきました。ぴーっ。ジソンは 「うわあ！」と くちを あけました。

「あめの ひに できた おとなんだ。」ラッコが いいました。「ひとりで かわべに いたら、モリが きたんだ。」

ジソンが ききました。「あめが ふってるのに、どうして ひとりで いたの？ うみに かえらないで？」

「いしが みんな ぬれちゃうでしょ。ひとつずつ ひっくりかえして あげて いたんだ。ぬれた ほうは したに、かわいた ほうは うえに。」

「それじゃ また ぬれちゃうよ。」

「だから ずっと ひっくりかえして いたんだよ。」

ウソンは くちを あけた まま、ラッコを みました。

「その ひは、まいごに なっちゃったんだ。」モリが くちをはさみました。「よく しってる みちなのに、あめが ふったら、ぜんぶ はじめて みる みちに なっちゃって。」

ラッコが つづけました。「モリの すわる ところが なかったから、ぼくが この いしを おして あげたんだ。おして いたら、あの いわに がつんと ぶつかって。」

ラッコは いしの かけた ところを なでました。

「ふたりで すわるには、ちいさかった。」

「だから、おしりは はんぶんだけ のせたの。」モリが おしりを かたほうに ずらして みせました。「のこりの はんぶん

は ずっと あめに ぬれてた。かぜが ふく たびに、おしりの したから ぴーっ、ぴーっ って おとが したよ。」

「それから、かいの おかしを わけて たべたんだ。」ラッコが いうと、モリが てを ふりました。

「わけて たべたんじゃ ないよ。ぜんぶ ひとりで たべちゃった。ラッコが ひとつずつ ずっと くれるから。たべおわってみたら、ラッコの ぶんは ひとつも なかったんだ。」

ラッコは あの ときのように、からっぽの てを ひらいて みせました。ジソンが くすくす わらいだし、ラッコも いしを かかえた うでを ゆらしながら、いっしょに わらいました。

ニョッキが くびを ながく のばして ききました。

「じゃあ、おおきい いしは みに いかないの？」

ラッコが かごを もちあげました。きのう つれて あるいた いし ふたつは、きょうは やすむ ばんでした。ラッコは そのふたつを あたらしい いしの よこに おろして、かぜあなを かごの いちばん うえに そうっと のせました。そして、うたを うたいました。

「はいって はいって、きょうは ぼくと いこう。 でてきて でてきて、あしたは きみ おやすみ。」

うたを うたいおわって から、ラッコは やっと ニョッキに こたえました。

「いくよ。そこに すわったら、かわが みえる？」

「ぜんぶ みえるよ。むこうぎしの きまで みえる。」

ラッコは ニョッキに ついて いきかけて とまり、ひらたい いしの よこの いしたちに てを ふりました。

「ころりん、するりん、ちょろりん。すぐ もどるね。もし おそく なっても まってて。」

さようならが ながくて、ウソンは にかいも むかえに もどらなければ なりませんでした。

みずべの はしっこの おおきな いしには、みんな すわる ことが できたのです。

ウソンと ジソンが すわり、ニョッキが くびを おりたたんで すわり、ラッコが すわりました。それでも まだ すわる ところが あまりました。あしもとを、かわの みずが おとを たてて ながれて いきました。

ラッコは かごから かぜあなを とりだして、よこに おきました。かけた かどと ちいさな きずが、うえを むいて いました。

ジソンが ポケットから ピンクの こいしを とりだして、かぜあなの うえに そっと のせました。こいしは かけた かどに はんぶんだけ すぽんと はいって、ぴったり はまりました。のこりの はんぶんは、そとに ちょこん。

ラッコは それを みて、ひげを ぷるぷる ふるわせました。

「はんぶんだけ はいってて いいね。この こだって、かわを みたいもんね。この こ、なまえは ジソンが つけて。」

「まめつぶ。」

ジソンは それだけ いうと、おにいちゃんの となりに もどりました。

ニョッキが じぶんの すわって いる おおきな いしを、まえあしで とんとん たたきました。

「じゃあ、この おおきい いしは？ なんて なまえに するの？」

ラッコは おおきな いしを ゆっくり なでました。こっちの はしから あっちの はしまで、みんなの おしりの あいだを とおって。

「まだ わからない。きょう みんなで すわって みてから きめる。」

モリは おおきな いしの いちばん はし、かぜあなが おいてある ほうへ いって、おしりを はんぶんだけ のせようと しました。からだが ひとりでに そっちへ いったのです。

ラッコが モリを よびました。

「きょうは こっちが ひろいよ。」

ラッコが よこに ずれて すわりました。モリは その ばしょに きて すわりました。おしりが はしまで ぜんぶ のりました。

モリは あしを ぶらぶら させながら、かわを ながめて います。フードは ちっとも ぬれて いませんでした。

ふたつめの にわ

あめの 日と あいた せき

きゅうばんめの おはなし

モリの おうちに あめが ふる



その ひの あさ、ジソンは きいろい レインコートに ながぐつまで はいて でて きました。

「ひが でてるのに？」ウソンが そらを ゆびさしました。

「きょうは ながぐつの ひなの。」

ジソンは それだけ いうと、きりかぶテーブルの ほうへ あるいて いきました。かわいた くさの うえで、ながぐつが きゅっきゅっと なきます。

ボリが あったかい おちゃを やかんに たっぷり わかして きて、コップに ひとつずつ つぎました。いちばんめに つぐのは、いつものように、だれも すわらない せきの まえの コップ。つぎに ウソンの コップ、ジソンの コップ、ドゥドゥの コップ、モリの コップ、ニョッキの おおきな コップ、それから ボリの コップ。

ジソンが コップを ひとつずつ てのひらで さわって みました。あちっ、あちっ、あちっ。ところが、あいた せきの まえの コップで てが とまりました。

「これ、あつくない。」

ウソンも さわって みました。ぬるく なって いました。いま ついだ ばかりの おちゃなのに。

その あいだに、ひが すうっと くもの うしろに かくれました。ウソンの はなの さきに、なにかが ぽつんと おちました。

「あめだ！」

「ほらね、ながぐつの ひでしょ。」

なつに なって はじめての おおあめでした。ともだちは いちばん ちかい やねを めがけて はしりました。モリの のきしたへ。

のきしたには、いつも ものが いっぱい おいて あります。ともだちは その あいだに からだを おしこんで、とびらの なかへ どやどやと はいりました。

モリは てんじょうを みあげると、コップを ひとつ もってきて、ゆかに おきました。

ぽとん。

ウソンが ぱっと その コップを とりあげました。

モリが いいました。「それは やねの みずを うける コップだよ。」

ウソンは くちに つけかけた コップを、あわてて もとの ところに おきました。ぽとん。コップが まってましたと いうように こたえました。

ほんだなの うえでも ぽとん。モリが コップを おくと、こんどは まどの よこで ぽとん。

ドゥドゥが めを まんまるに しました。

「コップは いくつまで あるの？」

「しんぱい いらないよ。ひとつめ、この うちで もる ところは みっつ。ふたつめ、やねの はしの みぞに はっぱが つまると、とびらの うえからも もるけど……」

ぽとん。いちども みた ことの ない ところで おとが しました。

「そこは…… はじめてだ。」

モリは コップを もう ひとつ おいて、とだなを あけて みました。

「のむ コップは、あと ふたつ。」

ボリが ぬれた エプロンを ぎゅっと しぼりました。

「みんなで うちの だいどころに いこう。あそこは もらないよ。オーブンも ついてるし。」

モリは まどの したに しいて いた おおきな ぬのを、しぼって いる ところでした。

「さきに いってて。あずかって いる ものを はこんでからいくね。」

たなの したには、いとまき、ボタンの はこ、ひもの きれた かばん。ともだちが あずけて いった ものです。

ともだちは あめの なかへ かけだしました。

のきしたの そとには、ニョッキだけが のこりました。ニョッキは さっきから、からだは あめに ぬれた まま、あたまだけ まどに つっこんで いました。まどが ちいさくて、はなとめが ひとつ やっと はいるだけでしたけれど。

「すぐ いくよ。」

ボリの だいどころの とびらも、この まどくらい ちいさいと わかって いながら。

モリは しぼって いた ぬのを ぱんぱんと はたいて、まどのそとへ さしだしました。そして ニョッキの あたまに ぱさっ。

「これでも かぶって。」

ボリの だいどころまでの みちには、みずたまりが いつつ あります。ジソンは みっつめの みずたまりで、わざと りょう

あしで ばしゃん！と とびおりました。ながぐつの ひですから。

だいどころに はいると、オーブンの あたたかさが かおを むわっと つつみました。

ボリは コップに あったかい ミルクを ついで、ひとつずつ くばりました。りょうてで コップを うけとった ジソンが、はっと とまりました。

「モリは、のむ コップ ある？」

ウソンは ちょうど かじろうと して いた パンを おろしました。

「あと ふたつって いってた。」

「いまは？」

こたえられる ともだちは いませんでした。まどの そとの あめの おとだけが、だんだん おおきく なりました。

ドゥドゥは テーブルの よこの いすを ひとつ あけて おいて、その うえに かわいた タオルを きちんと たたんで おきました。

「モリは いつ くるの？ この いすで いい？ モリは ミルクに パンを ひたして たべるよね？ ね？」

かぜが つよく ふく たびに、とびらが がたん、がたん、とにかい おされて あきました。その たびに ドゥドゥは はなすのを やめて、とびらの ほうを ふりかえりました。はいって くるのは かぜだけ。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

その あいだに、モリの おうちでは コップが ななつに ふえていました。

ぽとん、ぽとおん、ぽとん。コップごとに おとが ちがいます。みずが たくさん たまった コップは ひくく、からっぽの コップは たかく ひびくのです。

ニョッキが かぶった ぬのも びしょびしょに ぬれて、あたまに ぺったり はりついて いました。モリは いすに のぼって、いとまきを たかい たなへ うつして いる ところでした。

ボリの だいどころでは、ジソンが いすを まどべへ ひっぱって いきました。いすの うえに たって、まどガラスに おでこを こつんと つけました。そらは いちめん はいいろで、お日さまが どの あたりに いるのか わかりませんでした。

ジソンは りょうてを ぎゅっと あわせました。

「お日さま、パンを たくさん ください。」

ウソンが となりの いすに のぼりました。

「パン？ モリは コップが ないんだよ。」

ジソンは めを ぎゅっと つぶった まま、もう いちど いいました。

「……コップも ください。それから パンも たくさん。モリは パンを ミルクに ひたして たべるんです。」

ドゥドゥが ぷっと ふきだしました。ボリが オーブンの とびらを あけて みると、まるい パンが いっぱい ふくらんで いました。

「パンなら、さっきから やいて いたけど。」

ウソンは いすから ぴょこんと とびおりて、とびらの まえへ いきました。そして とびらを にかい おしました。いっかい、にかい。かぜが して いたように。

ボリは やいた パンと、あったかい ミルクの びんを ふろしきに つつみました。ドゥドゥは かわいた タオルを くびに まきました。ジソンは かたほうの てで おにいちゃんの てを にぎり、もう かたほうの てには、ボリの うちで いちばん ちいさな コップを ぎゅっと もちました。

「きたよ。」

モリの おうちの とびらを あけると、ななつの コップが いっせいに ぽとん。いすの うえの モリが ふりかえりました。フードの さきから、みずが ぽとんと おちました。

「どうして きたの？ だいどころは もらないでしょ。」

ジソンが からっぽの コップを たかく もちあげて みせました。

「コップ もって きたよ。」

ドゥドゥが ゆかの コップを かたすみに あつめかけて、てを とめました。

「あれ？ これ、のむ コップじゃ ない？」

のこって いた ふたつの うちの ひとつまで、いつのまにか やねの みずを うけて いたのです。ボリが ジソンの コップに あったかい ミルクを つぐと、ジソンは その コップを モリに さしだしました。

のきしたの そとから、ニョッキが ききました。

「モリ、さっき やねの みぞに なにかが つまると どう なるって いったっけ？」

「とびらの うえから みずが あふれる。」

ニョッキが くびを ながく のばしました。やねの はしまで、ぐうっと。

「みつけた！ おおきな えだが みぞを ふさいでる。」

モリが まどの なかから ながい ぼうを さしだしました。ニョッキは ぼうの さきを くちに くわえました。

「いち、にの、さん！」

えだが ぬけると、みぞに たまって いた みずが そとへ ざあざあ あふれだしました。コップが みっつ、しずかに なりました。

べつの ところでは、まだ ぽとん、ぽとん。そこは ただの あまもりでした。

ニョッキは とびらの そとで パンを たべました。ボリが いちばん おおきな パンを まどから さしだして くれたからです。

ふろしきの いちばん したの パンは、あまみずが しみて、かたほうが じっとり つぶれて いました。ジソンが その パンを とりあげました。

「これは、ミルクに ひたした ことに すれば いいよ。」

ジソンが おおきな くちで かじると、モリが こえを たてて わらいました。その ひ はじめて きいた、モリの わらいごえでした。

なかでは みんな、ニョッキの ほうへ いすを むけました。ドゥドゥは あしの みじかい いすに、ジソンは おにいちゃんの ひざに すわりました。

ジソンは コップの おとを かぞえはじめました。

「ひとつ。ふたつ。みっつ。いっぱい。」

「もう いっぱいなの？」ドゥドゥが あとを つづけました。「よっつ、いつつ…… さっきの コップ、かぞえたっけ？ あのコップは？ あれは？」

ドゥドゥは かぞえる とちゅうで、みじかい いすの うえで ぐらり、こっくりと ねむって しまいました。くちの まわりに パンくずを くっつけた まま。

モリは ぬれた フードを ぬぎました。ボリが パンの ふろしきを ぱたぱた はたいて ひろげ、モリの かたに かけて あげました。

モリは おしりを うかせかけて、また すわりなおしました。はこぶ ものを また おもいだしたけれど、その まま すわっていました。

ジソンが おにいちゃんの ひざの うえで、まどの ほうへ くびを ぐうっと のばしました。りょうてを あわせて くちびるを もごもご させましたが、こんどは なんの こえも でませんでした。

やねから、さいごの しずくが おちました。ぽとん。

モリは ジソンが もって きた ちいさな コップを、りょうてで つつみこみました。ミルクは もう ぜんぶ のんで しまったのに、おろしませんでした。

じゅうばんめの おはなし

ぼくの かごも あるよ



かわべで みんな いっしょに パンを たべる ことに した ひでした。

ジソンは にわの あおい ビーズクッションと すもうを とって いる ところでした。りょうてで だきかかえて うんっと たちあがると、ビーズクッションは もちあがる かわりに、ジソンの かたちに ぼすっと へこみます。また だきかかえて、また うんっ。

（あおい ビーズクッションは、だれかが もちあげようと すると もっと おもく なります。はこばれるより、だれかが ねころんで くれる ほうが ずっと すきなんですって。）

「それは もともと もちあがらないんだよ。」

ウソンは そう いいながら、ビーズクッションに どさっと ねころびました。ビーズクッションは まってましたと いうように、ウソンの かたちに ぼすっと へこみました。

「パンは もちあがるもん。」

ジソンの へんじは それだけでした。

こみちの むこうで、ボリの だいどころの とびらが いっかい がたん、にかい がたんと なりました。まもなく ボリが おおきな パンの かごを りょうてで かかえて、にわに はいってきました。やきたての パンの においは、ボリより さきに にわに きて いました。

ジソンが りょうてを おおきく ひろげて、ボリの まえに たちはだかりました。

「きょうは ぼくが もつ。」

かごは ジソンより おおきいのです。ジソンが なかに はいって すわっても、まだ あまるくらい。

「これ…… すごく おもいよ。まるい パンが とお、ほそながい パンが ふたつ、いるかもって いれた ジャムの びんも ひとつ。」

「もてるよ。」

ジソンが とってを りょうてで ぎゅっと にぎると、ボリは そっと てを はなしました。

どすん。

かごの かたほうが じめんに ついて、ジソンの からだも そっちへ ぐらり。

ウソンが ビーズクッションから とびだして、はんたいがわを もちあげました。

「おにいちゃんが こっち もつよ。」

「ぼく ひとりで。」

くちびるが つんと とがって いるのを みると、ジソンは ほんきです。ウソンが そうっと てを はなすと、かごは また かたむいて、かごの そこが くさを こすりながら ずるずる ひきずられました。

「ごはんだったら かるいのに。きらきらを かけた ごはん。」

「ごはんだって とおも あったら おもいよ。」

「ちがうもん。ごはんは かるいの。」

ジソンは さいごまで いいはりました。ごはんを とおも もった ことなんて、いちども ないのに。

ウソンが きみどりの おうちに かけこんで、ちいさな かごを ひとつ もって でて きました。ジソンが こいしを ひろうときに つかう かごです。とってが ジソンの うでに ぴったりです。

「これ、ジソンのでしょ。ジソンの かごは ジソンが もてばいいよ。」

ジソンの かおが ぱっと あかるく なりました。ジソンは ちいさな かごを うでに かけて、おおきな かごの なかを ごそごそ さがしました。まるい パン、まるい パン、ジャムの びん、まるい パン。その なかから すっと ひきぬいたのは、ほそながい パンでした。

「これ。」

ボリが ジャムの びんを とりだしました。

「これも いれて あげようか？ パンに ぬって たべられるように。」

ジソンは じぶんの かごを みおろしました。ほそながい パン ひとつで、もう ぎゅうぎゅうなんですもの。

「だめ。それは おもい。」

ほそながい パンの さきが かごから にゅっと はみだして、あるく たびに ひょこひょこ ゆれました。

・

かわの ほうの みちに はいると、ラッコが あがって きました。けから みずが ぽたぽた おちました。

「ぼくも なにか もとうか？」

「ラッコは そのまま きて いいよ。」ボリが いいました。

ラッコは てを ぷるぷる ふって、ジソンの よこに くっついて あるきました。めは、ひょこひょこ ゆれる ほそながい パ

ンの さきに むいて いました。ジソンが ふりかえると、ラッコは さっと そらを みあげます。くもが ひとつも ない そらを、とっても とっても いっしょうけんめいに。

ジソンは かごを はんたいの うでに もちかえました。

ラッコも そっと はんたいがわへ まわって きました。

ジソンが また うでを かえると、ラッコも また ばしょを かえて。うしろで ボリが わらいを こらえるので、おおきな かごが ゆさゆさ ゆれました。

「ラッコ、どうして こっちに ばかり くるの？」

「かぜが こっちに ふいてるから。」

かぜなんて ちっとも ふいて いませんでした。パンの においだけが ふわふわ ただよって いました。

かわべへ おりる いしだんの まえで、ジソンが とまりました。だんが ひとつ、ジソンの ひざくらいの たかさです。

ジソンが かごを おにいちゃんに ぐいっと さしだしました。

「ここだけ もって。はなさないでね。」

「ここだけ？」

「うん。かいだんの ところまで。」

ウソンは とっての まんなかを もって、ジソンは かごの そこを りょうてで ささえました。ふたりは いちだんずつ、いちだんずつ おりて いきました。ほそながい パンの さきが、だんを おりる たびに ウソンの はなの さきで ぺこり ぺこりと

おじぎを しました。ラッコは すぐ うしろで、はなを くんくん させながら ついて おりて きました。

いしだんの したで、ジソンは かごを かえして もらいました。こんどは りょうてで ぎゅっと だきしめました。ほそながい パンの さきが、ジソンの あごを こちょこちょ。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

かわべの ひらたい いしに、みんなで まるく すわりました。ジソンも ちいさな かごから ほそながい パンを とりだしました。

ところが、パンの さきに とても ちいさな あとが ありました。つめくらいの はんげつが ふたつ、ならんで。

「ここ。」

みんな パンの さきを のぞきこみました。だれかが ぱくっと、ひとくちだけ かじった あとです。

ジソンの めが ウソンの ほうへ いきました。いしだんで、パンの さきは ずっと おにいちゃんの はなの まえに あったのですから。

「おにいちゃんが たべたでしょ？」

「ちがうよ！」

ウソンは くちを おおきく あけて みせました。

「ほら。ぼくの くちは こんなに おおきいんだ。」

ほんとうに、ウソンの くちは あとより ずっと おおきかったのです。ボリも くちを あけて みせました。ボリの くちは もっと おおきかった。

ジソンは パンを もって、ラッコの まえへ いきました。ラッコは そらを みて いました。さっきのように、とっても とっても いっしょうけんめいに。

「ラッコ、あーん して。」

ラッコは くちを ぎゅっと とじた まま、くびを よこに ふりました。ほっぺが まあるく ふくらみました。

「あーん。」

ラッコが ほんの すこし くちを あけました。ちいさくて しろい まえば ふたつが ちらりと みえました。ジソンが パンの あとを ラッコの はに そっと あてて みました。ぴったりでした。

「ラッコの はの かたちだ。」

ラッコは りょうてで かおを かくしました。ゆびの あいだから、ちいさな こえが もれて きました。

「においが あんまり いいから。うでを かえる ときに、いっかいだけ ぱくって しちゃった。」

ウソンが くさの うえに ごろんと ひっくりかえって、けらけら わらいました。ボリは わらって いて、おおきな かごを おとしそうに なりました。ラッコも ゆびの あいだから みんなを みて いるうちに、いっしょに ふきだしました。

ジソンは パンを みおろしました。さきには ラッコの はのあと、まんなかには ぎゅっと だきしめすぎて へこんだ、ジソンの うでの あと。

ジソンは パンを りょうてで もって、ぱきっと ふたつに わりました。はの あとが ついた ほうを、ラッコに さしだしました。

「これは ラッコの。もう たべはじめてるから。」

まんなかが へこんだ ほうは、ボリの まえに おきました。ボリの めが ぱっと おおきく なりました。

「こういう かたちの パンが、いちばん すきなんだ。」

ラッコは あとの すぐ よこから たべはじめました。こんどは とっても おおきく、ぱくっ！

かえる ころに なると、ウソンが ボリの おおきな かごを もちあげて みました。ジャムの びんだけ のこった かごは、ウソン ひとりでも ひょいと もちあがりました。

「これは ぼくが もつね。」

「じゃあ、なにを もとうかな？」

ボリは からっぽの てを みおろして から、ジャムの びんを とりだして、エプロンの ポケットに すぽんと いれました。

「これに しよう。」

ラッコが みずべから しろい こいしを ひとつ ひろって きました。

「これ、のせて くれる？ パンの おだい。」

ジソンは かごの なかを のぞきこみました。そこには パンくずが いくつか。ジソンは パンくずを かたすみに よせて、ばしょを あけました。

「うん、これなら いいよ。」

ラッコは こいしを かごに おろして、てを ふりました。

「この こは ぱくりん。ぱくりん、ジソンの おうちで げんきでね。」

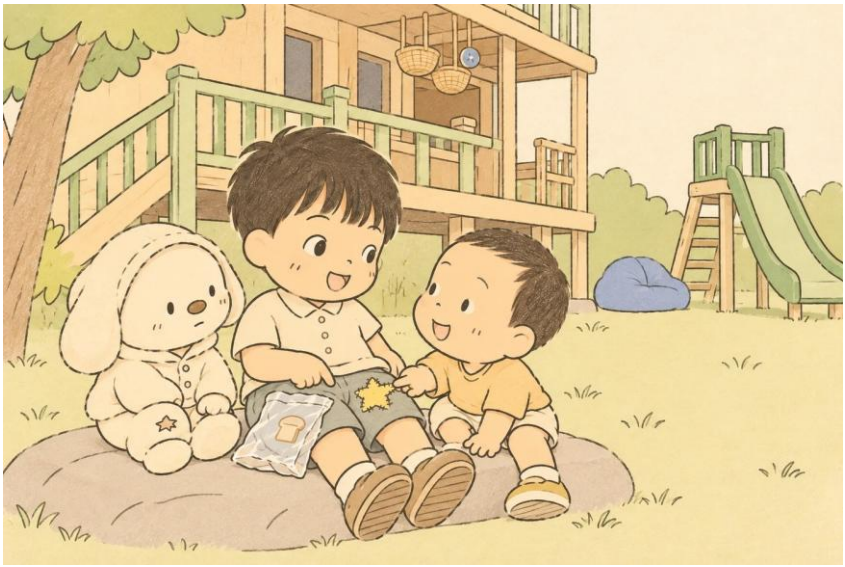
ジソンは さきに たって あるきながら、かごを たかく ふりました。

「ぼくの かごも あるよ！」

かごの なかで、ぱくりんが ころんと こたえました。

じゅういちばんめの おはなし

ぼくの ズボン、だれが なおしたの？



あさ、ズボンを はいて いた ウソンが、かたあしを あげた まま とまりました。

おしりの かたほうに、きいろい ぬのを きりぬいた ほしが ひとつ、ぬいつけて あったのです。きのうまでは あなが あいて いた ところです。

きのうの ゆうがた、にわの ものほしに ひょいと かけて、そのまま わすれて いた ズボンです。

ほしを みようと うしろを ふりむくと、ほしも いっしょに うしろへ まわって しまいます。ウソンは その ばで くるくる まわります。

ジソンが ほしを ゆびで なぞって いって、ひとつの ところで とまりました。

「ここだけ ながい。」

いつつの とがった さきの うち、ひとつだけが にゅうっと のびて います。

「どうして ほしなの？」

ジソンが ききました。ウソンは こたえる かわりに、ゆびを ひとつずつ おりました。

「きのうの ゆうがた かけて、あさには なおって た。じゃあ、よるの うちに なおしたんだ。ラッコは よるは うみの おうちに かえってるし、ニョッキは はりが ちいさすぎて みえないし、ピオは はねだから はりを もてない。」

「モリは？ モリは いつも なおしてるよ。」

「モリは よるは ぬいものを しないんだ。はりの あなが みえないって、モリが いってた。ぼく しってるもん。」

ウソンが さいごの ゆびを おりました。

「じゃあ ボリだ。ボリは なんでも じょうずに つくるもん。」

ウソンが ボリの だいどころの とびらを にかい おしました。

「ぼくの ズボン、なおして くれて ありがとう。」

ボリは パンの きじを こねる てを とめて、エプロンの すそを もちあげました。そこにも、ゆびが にほん すぽんと はいるくらいの あなが あいて いました。

「ぼくじゃ ないよ。ぼくだって モリに たのまなくちゃ。」

「モリは よるは しないんだってば。」

ジソンが ボリの エプロンの ひもを ひっぱりながら ききました。

「ボリ、どうして ほしなの？」

「さあ。ぼくだったら、パンの かたちに したと おもうけど。」

ボリは やきたての パンを ふたつ、ふくろに いれて くれました。

「さがして あるいたら、おなかが すくでしょ。みつけたら、その こにも ひとつ あげてね。」

だいどころを でると、ジソンが いきなり いいました。

「コンイ。」

「コンイは つちを ほるだけでしょ。」

「コンイだよ。コンイの めがね、まるいもん。」

めがねが まるいのと ほしと、なんの かんけいが あるのでしょう？ だれにも わかりません。それでも ジソンは くちを きゅっと むすんで、コンイの おうちの ほうへ さきに たって あるきました。

コンイの おうちの いりぐちは ふたつに わかれて います。おうちの えと シャベルの えが かいて ある かんばんは、きょうも さかさまに たって います。おうちの えの ほうへ げんきよく はいって いった ウソンは、つちの やまに はなを つっこんで でて きました。

「ぺっ、ぺっ。ここ、ものおきだ。」

もう ひとつの いりぐちには、コンイが ぼうしを かぶって すわって いました。コンイは つちの なかの トンネルに すむ、ちいさな モグラです。まるい めがねを かけて、ふところには いつも おりたたんだ かみを いれて います。

「コンイ、おにいちゃんの ズボン なおしたの、コンイでしょ？」

ジソンが なんでも しってるよ、と いう かおで ききました。コンイは めがねを おしあげました。

「ううん。はりは もって ないよ。でも、こういう かたちの トンネルなら しってる。」

コンイが おりたたんだ かみを ひろげました。いちど ひろげると コンイの かおが かくれて、にど ひろげると ジソンが まるごと かくれて しまいます。

「この トンネルは、さきっぽが ひとつだけ ながいでしょ？つちの なかに おおきな いしが あるからなんだ。その いしを よけて ほって いたら、ミミズに あって……。」

ほしの はなしは、そのまま つちの なかに もぐって いって しまいました。

コンイは ちずを てきぱき たたんで、ちずを つつんで いた あおい ぬのを とりだしました。

「あ、そうだ。これ、モリに かえして くれる？ きのう かりたの。」

ジソンが ぬのを うけとって、ポケットに すぽんと いれました。

モリの のきしたに いって みると、モリは いませんでした。そのかわり、ドゥドゥが ふうとうを にまい ふりながら かけて きました。

「モリを さがしてるの？」

ドゥドゥが かたあしを ぐいっと まえに だしました。くつひもが、リボンの うえに リボン、にじゅうに むすんで あります。

「これ みた？ だれが むすんで くれたと おもう？ しりたいでしょ？」

ジソンが ドゥドゥの そでを ひっぱりました。

「ドゥドゥ、どうして ほしなの？」

「ほし？ よるに でる ほし？ それが どうして おしりに でたの？」

ウソンは こたえるのに つかれて、だまって あるきだしました。そこで やっと、ドゥドゥの こえが うしろから おいかけて きました。

「あっ、そうだ！ モリは かわべに いるよ！ ぼくの くつもモリが むすんで くれたんだ！ ゆうべ、まっくらな ときに！」

ウソンの あしが ぴたっと とまりました。ゆうべ？

ふたりは くるりと むきを かえて、かわの ほうへ かけだしました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

かわべの ひらたい いしの うえに、モリが すわって います。ひざには いとと はり。

ウソンは うしろを むいて、おしりの ほしを ゆびさしました。

「モリが したの？ よるは はりの あなが みえないって いってたのに。」

モリは ほしの ながい さきを、ゆびで ぎゅっと おさえました。みみが ほんのり あかく なって います。

「みえないよ。だから いとは、あかるい うちに とおしておいたの。はりが ぬのに はいるのは、めを つぶってても ゆびの さきが わかるんだ。」

「じゃあ、これは？」

ジソンが ながい さきを ゆびさしました。

「はさみは、ゆびの さきでも よく わからないんだ。まっくらで、かたほうが ながく なっちゃった。」

ウソンが てを ぱちんと たたきました。

「ほらね、ぼくの いった とおりでしょ？ まっくらで みえなかったんだ。」

「おにいちゃん、モリじゃ ないって いったじゃない。」

ジソンの ことばに、ウソンの みみが まっかに なりました。

「どうして ほしなの？」

ジソンが ききました。きょう もう よんかいめの しつもんです。

モリの めが きらりと ひかりました。

「それはね。まっくらだったから、ここに ひかりが ひとつ あったら いいなと おもったの。でも、たいようは だめ。たいようは おおきくて まるいから、おしりが ぜんぶ かくれちゃう。だから ほしに したんだ。ほしは ちいさくても、よるに ひかるから。」

ジソンの くちが まあるく ひらきました。

「ほしは こうやって つくるの。ひとつめ、ぬのを はんぶんに おる。ふたつめ、また はんぶんに おる。みっつめ、ななめに いっかい ちょきん。」

「ちょきん、もう いっかい して。」

モリは はじめから もう いちど いって くれました。おって、また おって、ちょきん。ジソンは くうちゅうで ぬのを おる まねを しながら、いっしょに やりました。

「これ、あげようと おもって。」

ウソンが パンの ふくろを さしだしました。ところが、なんだか へんに かるいのです。さかさまに して ぱたぱた ふると、パンくずが いくつか。それで おしまいでした。

ウソンが ボリの だいどころを でて、ひとくち。コンイの ちずの したで、ひとくち。ドゥドゥの はなしを ききながら、ひとくち。ジソンも ひとくち、また ひとくち。ひとくちずつが あつまって、パン ふたつに なって いました。

モリは からっぽの ふくろを みて、ふきだしました。

「じゃあ、あじを おしえて。どんな あじ？」

「あったかい。」

ジソンが いいました。

「そとは さくさく、なかは ふわふわ、はしっこが ちょっと こげてた。」

ウソンが ゆびで ひとつずつ おりながら いいました。

モリは めを つぶって、くちを もぐもぐ うごかしました。さくっと かむ まねを して、ふわっと ほっぺを ふくらませて、こげた ところでは はなを ちょっと しかめて。

「うん。こげた ところが いちばん おいしいね。」

ところで、モリの ズボンの ひざにも あなが ひとつ あいていました。あてる ぬのが なくて、はりだけ もって いた ところだったのです。

ジソンが ポケットから あおい ぬのを とりだしました。

「これなら いい？」

「あれ、この ぬの、コンイに かして あげた やつだ。」

「コンイが かえすって。」

ジソンは おつかいに きた かおで つたえました。モリは ぬのを ひざに あてて、まあるく ぬいつけました。きょうは ひの ひかりが あかるくて、はりの あなが よく みえます。

ぬいおわると、ジソンが ほしを また なぞりました。こんどは モリの ゆびも よこで いっしょに なぞりました。ひとはり、ひとはり。

「ひとつ、ふたつ、みっつ。」

ジソンの ゆびが そこで とまると、モリが つづきを かぞえました。

「よっつ、いつつ、むっつ……」

「いっぱい！」

「ううん、ななつ。」

「どうして ななつなの？」

モリは みつかっちゃった、と いう かおに なりました。

「むっつだと ちょっと たりなく みえるし、やっつだと ちょっと おおく みえるんだ。それは じぶんで きめたの。ほんには かいて ないよ。」

ジソンは その こたえが とても きに いりました。ゆびを ななほん たてようと したら じっぽん ぜんぶ たって しまって、さんぼん もどすのに うんうん いいました。

・

おうちへ かえる みちで、ジソンが また ほしを さわりました。

「なまえ つけて あげようか？」

ウソンは てを うしろに まわして、ほしの ながい さきを そっと なでました。

「モリぼし。」

ジソンは その なまえが すきで、なんども まねして よびました。モリぼし、モリぼし。それから じぶんの ズボンを まえに ひっぱって みたり、うしろに まわして みたり しました。あなは どこにも ありません。

ジソンは ひざを みちに ごしごし こすりつけました。

「おにいちゃん、まだ あなが あかない。」

（ふくの どこかに、だれかが こっそり なおして くれた ところが あったら、なまえを つけて あげて ください。クマタぼしでも、ボリぼしでも。）

じゅうにばんめの おはなし

きょうは いしも おやすみ



かわから あがって きた ラッコは、いつも まず ひらたい いしを さがします。そこに あがって ひとやすみ するのが、ラッコの さいしょの しごとです。

ところが きょうは、あがるなり かごから いしを ひとつ とりだしました。

ほそながくて、あたまの ほうが すこし かたむいた いしです。なまえは 『こっくりん』。ゆうべ ラッコが つけて あげ

た なまえです。たてて おくと、まるで いねむりを して こっくり くびを たれたような かっこうに なるからです。

（ラッコの いしは、なまえを もらうと その ひから すこし おもく なるんですって。ラッコの かごが まいにち おもく なるのは、その せいです。）

ラッコは こっくりんを ひらたい いしの うえに よこに ねかせて、その となりに ならんで ねころびました。おなかの うえに りょうてを きちんと のせて、めは ぎゅっと つぶって。

しばらく すると、ドゥドゥが ちょこちょこ やって きました。わきに はさんだ ふうとう にまいが、かぜが ふく たびに ひらひら。

「ラッコ！ しょうたいじょう いる？ あしたの？ あさっての？ それより、ねてるの？」

ラッコは めも あけずに、ゆび いっぽんで こっくりんを さしました。

「こっくりん、ねてるでしょ？」

「うん。」

「じゃあ、ぼくも ねてるって こと。」

ドゥドゥは ラッコと こっくりんを かわるがわる みました。いしが ひとつ、ラッコが ひとり。どっちも おなじように ねころんで います。

「じゃあ、こっくりんが たってたら？」

「あそぼうって こと。」

ラッコは そう いうと、ほんとうに すうすう ねむって しまいました。いきを する たびに、ひげが そよそよ。

ドゥドゥは ふうとうを ぎゅっと にぎりました。だれかが しらずに きて、おおきな こえで よんだら たいへんです。

ドゥドゥは ふうとうを いちまい うらがえして、えんぴつで おおきく かきました。うらが まっさらなのは、あさっての しょうたいじょうだけでした。

『ラッコを おこさないで ください。』

じが おおきすぎて、おしまいの 『さい』は かみの はしっこに やっと ぶらさがりました。ドゥドゥは ラッコに せなかを むけて みちの いりぐちに たち、かみを さっと たかく かかげました。

かぜが ふけば かみの かどを ぎゅっと おさえ、チョウチョが とんで くれば チョウチョにも 「しーっ。」 チョウチョは なんだか わからないまま、べつの はなへ とんで いきました。

・

いちばん さいしょに きたのは、ウソンと ジソンでした。

「ラッコ！ あそ……。」

「しーっ！」

ドゥドゥが かみを ふたりの はなの さきに つきつけました。

「ここに かいて あるでしょ。」

ウソンと ジソンは かみを じいっと みつめました。ふたりとも、まだ じが よめません。かみの うえには、くろい くねくねが いっぱい あるだけです。

「なんて かいて あるの？」

ドゥドゥが とっても ちいさく、その かわり とっても ながく よんで あげました。

「ラッコを、おこさないで、ください。わかった？ かかとであるける？ こえは アリくらい ちいさく できる？ やって みる？」

ジソンが くびを かしげました。

「おこ？ おこるの おこ？」

「その おこじゃ なくて。ねてるのを おこすの おこ。」

ジソンは ラッコの ほうを のぞきました。ラッコの ひげのさきに、ごまつぶくらいの すなつぶが ひとつ ついて います。ジソンは それを とって あげたいのを、ぐっと がまんしました。おこさないでって かいて あるんですもの。

ウソンが そろり そろりと つまさきだちに なりました。ジソンも まねして つまさきだち。ふたりは ラッコの ほうへ てを いちど ふっただけで、そっと はなれました。なんぽか いってからは、ふつうに かけだしました。かわの みずが あしくびまで ちゃぷちゃぷ する、あさい みずべまで。

あさい みずべにも、ラッコの いしが ずらりと ならんで います。ウソンは いしの ひとつに こしを おろしかけて、ぱっと たちあがりました。

「これも ねころんでる。ねてる いしだ。」

となりの いしも ねころんで いて、その となりの いしも ねころんで います。ふたりは けっきょく くさの うえに すわりました。いしの よこを とおる たびに つまさきだちを したので、あしが すっかり いたく なりました。

ジソンが みずに あしを つけたら、すべって しりもちを つきました。

ばしゃん！

ジソンは びっくりした かおで すわって いましたが、おにいちゃんが わらうので、いっしょに けらけら わらいました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ラッコが めを さましたのは、ひが てのひら ひとつぶんくらい うごいた ころでした。

ラッコは あくびを しながら おきあがりました。のどが からからでした。ひとりで ちびちび のむ みずじゃ なくて、だれかと むかいあって のむ みずが のみたかったのです。

ラッコは こっくりんを りょうてで だきおこして、たたせました。

「こっくりん、おきた。ぼくも おきた。」

これなら だれが みても わかるでしょう。ラッコは こっくりんの よこに すわって まちました。

ところが、だれも きません。ラッコは ひげを なでて みたり、えへん、おほんと せきばらいを して みたり しました。

せきばらいの おとに、みちの いりぐちの ドゥドゥが かみを もっと たかく かかげました。

「しーっ！ だれ？」

みちには アリ いっぴき いませんでした。

ドゥドゥは あいかわらず ラッコに せなかを むけて、みちの ほうばかり みて いました。

とおくで、ニョッキが ながい くびを ぐうっと のばして、ひらたい いしの ほうを のぞきました。

「あれ、こっくりんが たってる。ラッコ、おきたみたい。」

「しーっ！ しーっ！」

ドゥドゥが かみを あたまの うえに さしあげました。ニョッキの くびが たかく なれば かみも たかく なり、ニョッキの くびが よこへ いけば かみも よこへ いきます。とうとうニョッキの めの まえには、かみしか なく なりました。

「みえないよ。」

「みえなくて いいの。ラッコは ねてるんだから。」

ニョッキは ながい くびを だらんと たらして、かえって いきました。

つぎに、ウソンと ジソンが もどって きました。ジソンの ズボンは ひざまで びっしょり ぬれて います。ウソンが ひらたい いしの ほうを ゆびさしました。

「ほら、こっくりんが おきてる。じゃあ、ラッコも おきてるって ことだよ。」

「しーっ！ かみに まだ『おこさないで ください』って かいて あるでしょ。」

ドゥドゥが かみを とんとん たたきました。

ひらたい いしの うえで、ラッコは まって まって まちくたびれて、たちあがりました。とぼとぼ あるいて きて、ドゥドゥの すぐ うしろに たちました。

「ドゥドゥ。」

ドゥドゥは ふりむきも しないで、かみを もっと たかく かかげました。

「しーっ！ ラッコは ねてるんだよ！」

「ぼく、ラッコだけど。」

ドゥドゥが びくっと ふりかえりました。ラッコの かお、てに もった かみ、また ラッコの かお。

「えっと…… いつ おきたの？」

「こっくりんが おきた とき。」

ドゥドゥは かみを みおろしました。

「かみは ちゃんと かいたのに。こっくりんが さきに おきちゃったんだもん。」

いちばん さきに ふきだしたのは ウソンでした。ドゥドゥは かみで かおを かくして わらいました。かみの おもての 『おこさないで ください』も、いっしょに ゆさゆさ。ジソンは どうして わらって いるのか よく わかりませんでしたが、いちばん おおきな こえで わらいました。

わらって いるうちに、みんな のどが かわきました。ラッコは かわの みずを くんで きて、みんなの まえに ひとつずつ おわんを おきました。かえりかけて いた ニョッキも よびもどして、いちばん おおきな おわんを あげました。ニョッキが くびを よこに かしげました。みずは つめたくて あまかったのです。ラッコは ひとくち のむ たびに、ともだちの かおを ひとりずつ みまわしました。

ジソンが ひらたい いしに はらばいに なって、こっくりんを いじりました。たてるのでも ねかせるのでも なく、ななめに もたせかけました。

「これは？」

みんなが ラッコを みました。ラッコは ほおづえを ついて、ながい こと かんがえました。

「もうすぐ ねるかも。」

ドゥドゥが さっと かみを ひろいあげました。ラッコが ドゥドゥの てを ぎゅっと おさえました。

「それは、ほんとうに ねる とき。」

・

ひが かたむくと、ラッコは かえる したくを しました。ひらたい いしの うえの いしを ひとつずつ かごに いれながら、うたを うたいました。

「はいって はいって、きょうは ぼくと いこう。」

こっくりんの まえでは、うたの うしろの ところを うたって あげました。

「でてきて でてきて、あしたは きみ おやすみ。」

こっくりんは かごに はいらないで、ひらたい いしの うえに よこに なりました。ドゥドゥが その したに 『ラッコを おこさないで ください』の かみを はさみました。こんどは、かみが ほんとうの ことを いって います。

ラッコは こっくりんの あしもとから、ちいさくて まるい いしを ひろって、ジソンの てのひらに のせて あげました。

「こっくりんの あかちゃんだよ。この こは きょう、きみたちの おうちで ねるの。」

それから かわの みずに せなかを つけて、ぷかぷか うかびました。かごは おなかの うえに。かわの みずが、ラッコを ゆっくり はこんで いきました。

ねる じかんに なると、きみどりの おうちの かいだんの よこの ふたつの ベッドが すうっと おりて きました。ジソンは まくらもとに こっくりんの あかちゃんを ななめに たてて おきました。

「おにいちゃん、ぼく もうすぐ ねるかも。」

へんじが ありません。ウソンは ふとんの うえに すわったまま、こっくりんみたいに くびを たれて いました。

じゅうさんばんめの おはなし

ちずは あってるのに みちが ない



「うちに あそびに きて。くる みちは、ぜんぶ ここに かいて あるよ。」

きみどりの おうちに やって きた コンイが、つちの ついた かみを さしだしました。それから めがねを おしあげて、はなしはじめました。

「おおきな きが でて きたら、そこからは……。」

「わかった！」

ウソンは ちずを うけとるなり、まず くつを はきました。コンイは くちを あけた まま とまって しまいました。まだ さいしょの ひとことも いいおわって いないのに。

「おにいちゃん、まって。」

ジソンが かたほうの くつを てに もった まま、かけだしてきました。ピオも ぴょこぴょこ ついて きました。

コンイが うしろで なにか まだ いって いました。したのほうが どうとか、あなが どうとか。ウソンの みみに はいったのは、たった ひとことでした。

「ちかみち。」

おおきな きへ いく とちゅうで、ジソンが しゃがみこみました。みちばたに、きいろい はなが いちりん さいて います。はなびらが ひとつ はんぶん おれて いて、まるで かたほうの めを ぱちっと つぶって いる かおみたいです。

「おにいちゃん、この はな ウインク してる。」

「あとで みよう。コンイの おうちに いかなくちゃ。」

ジソンは はなに いっしょに ウインクを して あげてから、やっと たちあがりました。

おおきな きは すぐに みえて きました。ウソンは ちずのとおりに、げんきよく ひだりへ まがりました。

ちずには、みちが ありました。

ところが、めの まえには きの ねっこばかり。ふとい ねっこが じめんから ぼこぼこ もりあがって、あっちこっちで からまりあって います。

ピオが いちばん たかい ねっこに ぴょこんと とびのりました。

「コンイの おうち？」

「ううん。もうすぐだよ。」

ウソンは ねっこを ぐるっと まわって いきました。ジソンは ねっこを のりこえようと して、あしが ずぼっと はまりました。くつの なかに つちが はいって、あるく たびに あしのうらが じゃりじゃり。

「おにいちゃん、くつに つち。」

「がまんして。もうすぐだってば。」

ねっこを ひとまわり すると、みおぼえの ある はなが みえました。さっき ジソンが いっしょに ウインクして あげた、あの はなです。

「この はな、さっき みたよ。」

「にてる はなが たくさん あるからだよ。」

でも、はなびらの おれかたまで そっくりなんですもの。

ウソンは ちずを はなの さきまで もちあげました。

「ぼく、わかるよ。おおきな きから ひだり、それから まっすぐ。あれ、みぎだったかな？」

ジソンが おにいちゃんの そでを ひっぱりました。

「ちがう。こっち！」

ジソンが ゆびさしたのは、みぎでも ひだりでも ない、やぶの あいだの せまい すきまでした。

「そこは ちずに ないよ。」

「こっちだよ。ぼく しってるもん。」

ジソンは あしを どんと ふみならすと、ひとりで やぶの なかへ はいって いって しまいました。ウソンと ピオは しかたなく ついて いきました。やぶを ぬけて、ねっこを こえて、いしころを みっつ とおりすぎて……。

きいろい はなが また でて きました。あいかわらず、かたほうの めを ぱちっと つぶって。

ジソンは くちを ぎゅっと むすんで、こそこそ おにいちゃんの うしろに まわって たちました。

「みて くる！」

ピオが ひくい えだへ ぴょこんと とびあがりました。はねが みじかいので、えだ いっぽんぶんの たかさが せいいっぱいです。ピオは からだを ぐうっと のばして、まわりを ぐるりと みまわしました。

「きが いっぱい！」

それは ウソンも しって います。

ジソンが ねっこの うえに どさっと すわって、くつを さかさまに して つちを はらいました。

「おにいちゃん、おうち どこ？」

ウソンは ちずを まわしました。ちずの うえの ちいさな おうちの えが、ウソンの ほうを むいたり、ピオの ほうを むいたり して、とうとう さかだちを しました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

「ぼくも わからない。」

ウソンが ちずを おろしました。いって しまうと、はなの おくが つんと しました。ウソンは そでで めを ぐいっと こすりました。こすっても こすっても、また ぬれて きました。

ぐすん。

ジソンが おにいちゃんの ひざに てを のせました。

その ぐすんと いう おとを、ピオが ききました。ピオは えだの さきで むねを いっぱいに ふくらませると、森じゅうに ひびく こえで さけびました。

「ウソン、ここに いたよー！ ウソン、ここに いるよーっ！」

ちいさな とりの こえが、どうして こんなに おおきいのでしょう？ ねっこの したまで わんわん ひびいたのです。

すると、ねっこの うしろで つちが もこもこ うごいて、まるい めがねが ひょこっと でて きました。コンイです！

「そこに いたの？ ずっと まってたのに。どうして おりてこないの？」

はなの よこの くさの はでは、ヌルが しょっかくを にゅうっと のばしました。

「きみたち、さっきから この はなの まえを ぐるぐる まわって たよ。よぼうと すると、もう あんな ところまで いっちゃってて。」

ウソンは いそいで ちずを かおの まえに もちあげました。ぬれた めを みられないように。

「おりて くるって？」

「この あなから。ちかみちは、つちの なかを とおって くる みちなの。さっき いおうと したのに。」

コンイは ねっこの あいだの ちいさな あなを ゆびさすと、ふところから おおきな かみを また とりだしました。

ウソンは ちずの まえに どさっと すわりました。そして りょうてを おしりの したに しきました。てが また ちずを ひったくって、かけだして しまわないように。

「こんどは さいごまで いって。ぼくの て、おしりで おさえてるから。」

ジソンも おにいちゃんの まねを して、りょうてを おしりの したに しきました。どうしてかは わからないけれど。

コンイは ことばの かわりに ちずを ひろげました。

「ここが おおきな き。」

ひとます。

「ここが つちの なかの みち。」

また ひとます。

「ここが あめの ひの みち。」

また ひとます。ひろげる たびに、ちずは コンイより おおきく なります。

（コンイの ちずを さいごまで ぜんぶ ひろげて みた ともだちは、まだ いません。コンイもね。）

かみが また ひろがって、その はしが ピオを おおいました。

「まっくら！ よるだ！」

ピオが かみの したから はいだして きました。かみは もう ウソンの ひざまで おおって います。ては おしりの したなので、くるくる まきあがる かどは あごで ぎゅっ ぎゅっ。ジソンは はんたいの かどを ひざで ぎゅっ ぎゅっ。

ウソンは さいごまで まちました。それから おしりの したから ゆびを いっぽんだけ だして、ちずの かたすみを さしました。

「これ、あの はなだよ。ウインク してる はな。さんかいも みた。」

「そうだよ。」

コンイが うれしく なって、ちずを もう ひとます ひろげました。こんどは ジソンの あたまの うえに かみが かぶさりました。

ヌルが ちずの はしっこに やって きて、しょっかくを ながく のばしました。

「ここは あめが ふると、みずたまりが できるよ。まいにち そこを とおるんだ。」

コンイが えんぴつで、あおい せんを すっすっと ひきました。

ヌルが いいました。「そこに 『ヌルの みち』って かいてね。あさから かかって とおる みちだもん。」

ウソンは はなの えの よこに、おおきな まるを かきました。さっき まちがえて まがった ところには、くねくねした ねっこを かきました。コンイが その よこに 『ねっこだけ』と かいて くれました。ジソンは やぶの すきまに、ちいさな やじるしを ひとつ かきました。

「それは なあに？」

「はなの ところへ いく みち。」

コンイが ちずを もちあげて、あっちこっちに かざして みました。

「まちがった みちまで のってる ちずは、はじめて かいたよ。」

ともだちは あたらしい ちずを もって、コンイの おうちを たずねて いきました。ピオが ウソンの かたの うえで 「みぎ！」と さけびました。ヌルは コンイの てのひらに のせて もらいました。もちろん、ちゃんと きいてから。

コンイの おうちの まえの かんばんは、きょうも さかさまです。

「ドゥドゥが たてて くれたの。なおしたら、ドゥドゥが さみしがるかと おもって、そのままに してるんだ。」

ともだちは まるく すわって、いった まめを ぽりぽり わけて たべました。ピオは まめを ひとつぶ、かばんに しまっておきました。また みちに まよったら たべようと おもって。

・

ひが かたむく ころ、ふたりは おうちへ かえりました。かえりみちに、あの きいろい はなが また でて きました。きょう いちにちで、もう よんかいめです。

ジソンは ちずの まるに ゆびを あてて、はなびらにも ゆびを そっと あてました。

「ちずに あると、ほんものみたい。」

ウソンは ちずを きちんと しかくく たたんで、ポケットにしまいました。

その よる、きみどりの おうちの まどの そとで、だれかがさけびました。

「ウソン、ここに いたよー！」

ピオでした。また つかうかも しれないから、れんしゅうして おくんですって。

ウソンは ふとんを あたまの てっぺんまで ひっぱりあげました。

「わかってる！ ぼく ここに いるよ。おうちだよ！」

じゅうよんばんめの おはなし

ゆうがたの かねは にかい なった



からん、からん。

ドゥドゥが きりかぶテーブルの よこで、ゆうがたの かねを ならしました。かねの おとが にわを とおって、あそびばの すべりだいまで ころころ ころがって いきました。

ボリは おおきな おなべの まえで スープを かきまぜ、ピオは テーブルの はしっこで パンの かけらを かぞえて いました。

「ひとつ、ふたつ、みっつ…… はじめから！」

かぞえる たびに ひとつずつ あじみを するので、いつまでも たりませんでした。ボリは みない ふりを して、なんこかこっそり たして あげました。

ともだちが ひとり、また ひとりと せきに つきました。ところが、モリの いすが あいて います。

「モリは？」

ラッコが ひざの うえの かごを みおろしました。かごの ひもの はしに、みた ことの ない むすびめが ひとつ できて いました。かたくて ころんと まるい むすびめです。

「さっき ひらたい いしに きたよ。ひもが また ほどけそうだからって、これだけ むすんで くれたの。」

そう いえば、ほかの ともだちの ものも みんな なおって いました。コンイの ぼうしの たれた つばは ぴんと、ドゥドゥの オーバーオールの ボタンは しっかり。ボリの ふろしきの やぶれた かども、あたらしいみたいに ぬって ありました。

みんなの めが ピオに あつまりました。ピオは いそいで たねいろの かばんを あけて みました。

「なんとも ない！」

それから、ちょっと さみしそうな かおで かばんを しめました。

ボリは スープを ちいさな おなべに うつして、ふろしきに パンを ふたつ つつみました。それから、いるかもって、ゆび くらいの ろうそくを いっぽん。

「だれか もって いって くれる？」

「ぼくが いく。」

ウソンが いすから おりると、ジソンも ついて おりました。ジソンの おわんには、まだ スープが いっぱい はいって いるのに。

「ジソンは たべてて いいよ。」

ジソンは くびを よこに ふって、おにいちゃんの ふくの すそを つかみました。

「ぼくも。」

ボリは ふたりの スプーンを にほん、ふろしきの むすびめに さして くれました。ウソンは おなべを もち、ジソンは ふろしきを かかえました。

「おにいちゃん、おもい？」

「ううん。」

ウソンの うでが ぶるぶる ふるえました。

ジソンは ふろしきを かたほうの うでに かかえなおして、あいた てで おなべの とってを かたほう つかみました。すると、おなべが あまり ゆれなく なりました。

テーブルを はなれて なんぽか いった ところで、ウソンが ふりかえりました。テーブルの まわりは、もう うすぐらく な

って いました。でも テーブルの かたすみの あいた せき、その まえの コップの うえにだけ、ゆうがたの ひの ひかりが まだ のこって いました。

ふたりは おなべを あいだに はさんで、カニみたいに よこあるきを しました。よこへ、よこへ、モリの のきしたまで。

のきしたには、みおぼえの ある ものが どっさり つんで ありました。ボタンの とれた チョッキ、とっての とれた かご、ウソンが あずけた アヒルの フード、えの まがった スプーン。

モリは その あいだに すわって、めを ほそく して、はりに いとを とおして いました。

「すぐ いくよ。これだけ。」

モリは かおも あげずに いいました。

「ひとつめ、ドゥドゥの かばんの ひも。ふたつめ、ラッコの かごの とって。みっつめ、この チョッキの ボタン……。」

ひは もう しずみかけて いました。はりの あなが くらくて、いとの さきが なんども あなの よこに それて しまいました。

ジソンが ふろしきを ほどいて、パンを とりだしました。

「モリ、パン。」

かたほうの てには はり、もう かたほうの てには いと。モリには パンを うけとる てが ありませんでした。

ジソンは ちょっと かんがえてから、パンを おやゆびの つめくらいに ちぎって、モリの くちの まえに さしだしました。

「くち あけて。」

モリは おもわず ぷはっと ふきだしました。その ひょうしに いとが すべって、いとまきが ころころ ころがって いきました。ウソンが かけて いって、いとまきを つかまえました。

「たべてから やって。ぼくたち ここに いるから。」

「うん、これだけ やったら。」

モリは また はりを もちました。はりの あなは、さっきより もっと まっくらに なって いるのに。

ウソンは いとまきを せなかの うしろに かくして かんがえました。モリは、こわれた ものを みると、そのまま とおりすぎられないのです。それなら。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ウソンが じぶんの おなかを りょうてで さすりました。

「モリ、ぼく ここが こわれちゃった。」

「どこ？」

モリが やっと かおを あげました。

「おなか。さっきから ぐうって なるの。ジソンも。」

ジソンが いそいで くちで おとを だしました。

「ぐううううう。」

モリは ウソンの おなかを のぞきこんで、ジソンの おなかにも みみを あてて みました。とっても まじめな かおで。

「これは、はりでは なおせないなあ。」

すると ジソンが、おなべの ふたを とんとん たたきました。

「スープで なおして。モリも いっしょに たべないと なおらないよ。」

モリは はりを ひざの うえに おいて、おなべの ふたを あけました。スープの においが ふわっと ひろがりました。ジソンが パンの かけらを モリの くちに すぽんと いれて あげました。

「おいしい。ボリの パンだね。これは きじを ながい ことこねるから、こういう すじが できるんだけど、そもそも パンって いうのは……。」

モリは はなしの とちゅうで、ジソンの かおを みました。ジソンは つぎの パンの かけらを もって まって います。

「そうだ、きみたちは？ きみたちは ばんごはん たべたの？」

ジソンが くびを よこに ふりました。ぐう。こんどは ほんとうに おなかから きこえた おとです。

その とき、きりかぶテーブルの ほうから、ゆうがたの かねが もう いちど なりました。

からんからん、からん！

さいしょより もっと ながく。

ところが、スプーンが にほんしか ありません。ウソンのが ひとつ、ジソンのが ひとつ。モリの スプーンは あそこ、えが まがった まま、なおす ものの やまの なかに ねて います。

ジソンが じぶんの スプーンを モリに さしだしました。

「これ、モリのに して。」

「じゃあ、ジソンは？」

ジソンは パンを もう ひとつ ちぎって、じぶんの くちに いれました。ほっぺを ふくらませた まま、にんまり。

しばらく すると、のきしたが にぎやかに なりました。せんとうは、かねを もった ドゥドゥ。その うしろに、おおきな おなべを かかえた ボリ、スプーンを ひとつかみ にぎった コンイ。いちばん うしろは、おわんの かごを もった ラッコ。ニョッキは おおきすぎるので、まどから ながい くびだけ にゅっと いれました。ピオは ヌルを むかえに いって、ならんで あるいて くる ところです。

のきしたは、すぐに まっくらに なりました。スープの ゆげだけが しろく みえます。

ボリが ふろしきの なかから、さっき いれて おいた あのろうそくを とりだしました。ひが つくと、のきしたが きいろく ぱっと あかるく なりました。ボタンが きらっ、はりが きらっ、みんなの スプーンが きらっ。

「ほらね。いるかもって いれた ものは、ちゃんと つかうんだから。」

モリは フードを ぬいで、ゆかに すわりました。

「のきしたが こんなに ひろいなんて しらなかった。ものを おいて おく ところだと ばかり おもってたよ。」

「ニョッキは はんぶんだけ すわってる。」

ジソンが まどを ゆびさしました。ニョッキは まどわくに あごを のせた まま、えへへと わらいました。

ウソンは モリの ひざの うえの はりを とって、たなの いちばん うえの たかい はこに いれ、ふたを しめました。

モリは ともだちを ひとりずつ みまわしました。ラッコの かごの あたらしい むすびめ、コンイの ぼうしの ぴんとした つば、ドゥドゥの しっかりした オーバーオールの ボタンが、ろうそくの ひかりで みんな みえました。

「みんな、わざわざ ここで たべる ことに なっちゃったね。」

「スープは どこで たべても スープだよ。」

ボリが おたまで おなべの ふちを とんとん たたきました。そして じぶんの ぶんに もって きた、かたほうが ぺちゃんこの パンを はんぶんに わって、モリに わたしました。

たべおわると、ドゥドゥが かねの もちてを みました。まきつけた ひもが、いとが なんぼんか やっと くっついて いるだけでした。かねを にかいも つよく ふったからです。

モリが すっと てを のばしました。

ドゥドゥは いそいで かねを せなかの うしろに かくしました。

「これは あした。」

「じゃあ、あしたの いちばん さいしょに。」

「ううん。あしたの いちばん さいしょは、あさごはんだよ。」

のきしたが わらいごえで いっぱいに なりました。その あいだに、ジソンが ゆびを さんぼん たてて みせました。

「あしたは スプーン みっつ。」

モリが なおす ものの やまから、まがった スプーンを とりあげました。あっちから みたり こっちから みたり して、おおきな おなべに すっと いれて、スープを すくいました。

「これは なおさない。まがった スプーンは、スープが ぐるっと まわって はいって くるから、もっと ながく おいしいんだ。」

そして ひとくち。スープの はんぶんは くちに、はんぶんは あごに はいりました。

じゅうごばんめの おはなし

クマタが いない あさ



きのうの ごご、ジソンは あおい ビーズクッションの うえで ぴょこん ぴょこんと とびはねました。ぼよん、ぼよん。それが おもしろくて、なんども なんども。その したに クマタが ねて いたのに。

クマタは、きみどりの おうちで いちばん ひょろりと ながい ちゃいろの クマです。いちにちじゅう、ほとんど ビーズクッションに ねころんで います。

「うーん。」

クマタは いちど ねがえりを うった だけで、めを あけませんでした。

ウソンが きて、クマタの まえあしを ゆさぶりました。

「クマタ、あそびばに いこう。すべりだい いっしょに すべろう。」

へんじが ありませんでした。ウソンは くさの はを いちまい ちぎって、クマタの はなの さきを くすぐりました。はなが ひくっ。それでも めは そのまま。

ウソンは わざと おおきな こえで いいました。

「クマタは いつも ねてばっかり。つまんない。」

クマタの みみが いちど ぴくっと うごきました。ウソンはそれを みたのに、そのまま あそびばへ かけて いきました。ジソンも ビーズクッションから とびおりて、おにいちゃんのあとを おいかけました。

ふたりが いって しまうと、クマタは かたほうの めを うっすら あけました。そして ながい あいだ、また とじませんでした。

すべりだいは、おもったほど おもしろく ありませんでした。ウソンは じっかい すべっても、なんども にわの ほうを ふりかえりました。ジソンは すべりだいの てっぺんに すわったまま おりても こないで、にわの ほうばかり みて いました。

モリは ときどき きみどりの おうちに あそびに きて、とまって いきます。その よる、モリは ふたりの へやで むかしば

なしを して いるうちに、そのまま ねむって しまいました。おはなしが おわる まえに、モリの ほうが さきに いびきを かきはじめました。

ウソンは ねむれませんでした。

「ジソン、ねた？」

「うん。ねた。」

ジソンも ねむれなかったようです。ふたりは ふとんの なかで、めを ぱっちり あけて てんじょうばかり みて いました。ウソンが まどの そとを のぞくと、クマタが ねころんだ まま、にわの むこうを ずっと ずっと みて いました。ほしが ぜんぶ でる まで。

・

あさに なりました。ウソンは にわの ほうを みないで かおを あらいました。ジソンも にわの ほうを みないで くつしたを はきました。かたほうずつ ちがう くつしたを。

あさごはんの とき、モリが パンを ひとつ べつに とりわけました。

「きょうは ふたりとも どうして そんなに しずかなの？ これは クマタの ぶん。だれが もって いって くれる？」

「ジソンが。」 ウソンが すぐに いいました。

「おにいちゃんが。おにいちゃんが いつも ねてるって いったんでしょ。」

「ジソンは その うえで とびはねたでしょ。」

ジソンの くちが とんがりました。モリは ふたりの かおを かわるがわる みてから、パンを はんぶんに わって、ひとつずつ にぎらせて くれました。

「じゃあ、ふたりで はんぶんこ。」

ジソンは じぶんの はんぶんに、いちごジャムを たっぷり たっぷり ぬりました。パンが みえなく なるくらい。

「どうして そんなに たくさん ぬるの？」

「ごめんねの ぶんだけ。」

ふたりは パンを はんぶんずつ もって、にわへ でました。そろり そろり。ふたりとも ビーズクッションの ほうは みないで、じぶんの つまさきだけ みて あるきました。

「おにいちゃん、なんて いうの？」

「わかんない。ジソンは？」

「ぼくも わかんない。」

ジソンは おにいちゃんの せなかに、はんぶん かくれました。パンを にぎる てに つい ちからが はいって、いちごジャムが ゆびの あいだから にゅるっと はみだしました。ビーズクッションが だんだん ちかづいて きました。あと さんぽ、にほ、いっぽ。

ウソンが めを ぎゅっと つぶって、パンを ぐいっと さしだしました。

「クマタ、これ……。」

＊＊＊

へんじが ありませんでした。ウソンが かたほうの めを あけました。

ビーズクッションが、ながーく へこんで いました。

あたまの ところは まるく、せなかの ところは ながく、あしの ところは ずっと はしっこまで。クマタが ひとばんじゅう ねて いた かたち そのままです。でも、クマタが いません。

「こんなに あとが あるのに、クマタは いないね。」

その とき、モリが かみを いちまい もって かけだして きました。

「かいだんの したに これが あったよ。」

かみには おおきな じが にぎょう。モリが よんで くれた ことばは、こうでした。

『ちょっと いって くるね。クマタ』

「どこに？」

モリが かみを うらがえしました。うらは まっしろでした。

ふたりは てに もった はんぶんの パンばかり みおろしました。

モリが かみを おりたたんで、ポケットに いれました。

「それはね。クマは ひかげが すきで、ひかげは きの したに あるから……。」

「みずを のみに いったんだよ。クマタは おきたら まず みずを のむもん。」

ウソンが モリの はなしを さえぎりました。

「じゃあ、だれが さきに みつけるか、さがして みよう。」モリが いいました。

あかい テントウムシには ウソンが、きいろい テントウムシには モリと ジソンが のりました。ふたつの テントウムシは にわを ぬけて、べつべつの みちへ わかれて いきました。

ウソンは みずべへ はしって いきました。となりが がらんと して います。いつもは きいろい テントウムシが ならんで はしって、その うえで ジソンが あれこれ ゆびさして いた ところです。

みずべに、おおきな ちゃいろの せなかが みえました。まるっこくて、ながい せなか。

「クマタ！」

ウソンは とびおりて かけより、てを のせました。つめたくて、かたいです。

いわでした。

ウソンは いわの まえに たって、えへんと のどを ととのえました。

「クマタ。いつも ねてるって いって……。」

ことばが のどに つかえました。いわに いって いるのに。ウソンは さいしょから いいなおしました。

「クマタ。きのう、いつも ねてるって いったの、ごめんね。」

さんかいめは、クマタの みみが ありそうな ところに むかって、ちいさな こえで いいました。そのうち、ふしぎに おもう ことが ひとつ できました。いつも ねころんで ばかりいた クマタは、どこへ そんなに いって みたかったんだろう？

・

その ころ、モリと ジソンは こかげに つきました。なつの おわりの ひるまでも、すずしい ところです。こかげの まんなかで、ニョッキが ながい くびを まげて、じぶんの あしを みおろして いるでは ありませんか。

「ニョッキ！ クマタ みなかった？」

「みなかったよ。じぶんの あし みてたの。きょうは なんだか とおく みえて。」

ジソンは こかげに ぺたんと すわって、きの えだで じめんに おおきな まるを かきました。その なかに ながい クマタを、その うえに ぴょこんと とびあがった ちいさな あしを ふたつ。まるの よこには てを ひとつ かきました。ゆびが いつつより ちょっと おおい てです。

ジソンが えの なかの てを ゆびで さしました。

「おこしちゃったなら ごめんね。こんどは きいてからに する。」

わかれみちで、ふたつの チームが あいました。ニョッキも のっし のっしと ついて きました。だれも クマタを みつけられませんでした。

ジソンが モリの ポケットから てがみを とりだして、たかく かかげました。

「いって くるって かいて あったでしょ。ぼくたちも おうちに かえって みよう。」

・

きみどりの おうちの にわに はいると、きいろくて まるっこい なしが、ビーズクッションの まえに ころころ ちらばって います。

そして ビーズクッションには、クマタが いました。あさのへこみに からだを ぴったり あわせて、ながながと ねそべって。

クマタが めを かたほうだけ あけました。

「おかえり。こかげの ほうの なし、あまかったよ。」

「ぼくたちが いなく なったのは、さがさなかったの？」

ウソンが くちを とがらせました。クマタは のろのろと あくびを しました。

「てがみが なかったから、すぐ かえって くると おもったんだ。」

ジソンは じぶんの からっぽの てを みおろしました。

「ぼくたち…… てがみ かかなかった。」

ウソンが ビーズクッションの はしっこに すわりました。そして、いわの まえで さんかい れんしゅうした ことばを いいました。

「きのう、いつも ねてるって いったの、ごめんね。」

ジソンも おにいちゃんの となりに ぴったり くっついて すわりました。

「ぼくは うえで とびはねた。」

「うん。ちょっと びっくりしたよ。こんどは よこから よんでね。」

ふたりは いちにちじゅう にぎりしめて いた はんぶんの パンを さしだしました。どちらも ぺちゃんこ。クマタは ふたつを くっつけて ひとつに して、ひとくちで たべました。あごに いちごジャムが ついて、きらきら。

「クマタ、どこ いってたの？」

「なし とりに。」

ジソンが じぶんの おなかを ぽんぽん たたきました。

「おなかの なかは、なんにも なしだよ？」

「その なしじゃ なくて。」

「ひとりで？」

「うん。ねころんで みると、いつも あの きが みえたんだ。ぼくも いちど いって みたかったんだ。」

ウソンは クマタの となりに せなかを つけて ねころんで みました。ほんとうに、にわの むこうに なしの きの てっぺんが ちいさく みえます。

「でも、なしは どうして もって きたの？」

「いっしょに たべようと おもって。」

クマタが めを とじました。ぐう ぐう。

ジソンは なしを ビーズクッションの まえに いちれつに ならべました。ウソンが ゆびで ひとつずつ さしました。

「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、いつつ。」

ウソンは ともだちも かぞえました。ジソン、モリ、ニョッキ、クマタ、そして じぶん。

「ぼくたちも ごにんだし。」

ジソンは なしを いちど みて、ともだちを いちど みました。

「どっちも たくさんだね。」

ウソンが クマタの となりの あいた ところを、てのひらで ぎゅっ ぎゅっと おして ひろげました。

きょう、森は こんなふうに すごしました



その 日は、なつの おわりの あさの ひざしが、とびきり きもちの いい 日でした。ビーズクッションも ぽかぽか、すべりだいも ぽかぽか、きみどりの おうちの かいだんの てすりまで ぽかぽか ぽかぽか。

ドゥドゥが きょうは しょうたいじょうを ひとたばも かかえて、にわに かけこんで きました。

「きょう ゆうがた、きりかぶテーブルで ひが しずむの みる ひと？ きみ？ きみも？ でも おくれたら どうする？ ひはまって くれないでしょ！」

ふたりは ドゥドゥに ついて、しょうたいじょうを くばりにでかけました。ピオが みちばたの いしの うえから、さきにさけびました。

「おしえて あげる！」

そして みじかい はねを ぱたぱた させて、しげみの したへひくく とんで いって しまいました。なにを おしえて くれるのかは、だれも しりません。

さいしょの おうちは ヌルの はっぱの にわです。ヌルは しょうたいじょうを うけとるなり、つのを ぴんと のばしました。

「ひが しずむ ころ？ じゃあ、いま でなくちゃ。ぼくの あしなら、あしたの あさごろ つくかな。」

ヌルは ほんとうに その ばで しゅっぱつしました。ジソンが いそいで しゃがんで、てのひらを さしだしました。

「のせて あげる。」

「ううん。きょうは じぶんの あしで いく。」

ジソンは くちを とがらせました。

かわべの ひらたい いしには、ラッコが ちょうど あがってきた ところでした。

「きょうは かわの みずが なんども はなを おすから、おそく なっちゃった。」

ラッコは かごから いしを ひとつずつ とりだして、ぬれたすなの みちに いちれつに ねかせました。もこりん、かぜあな、まるぺたりん、それから まだ なまえの ない すえっこ。

「どうして いしを みちに おくの？」

「ひなたぼっこ させるの。みずから きたから、みんな しめってるんだ。」

ラッコが いしの なまえを ひとつずつ よんで いる あいだに、ドゥドゥは しつもんを とおも しました。

モリの のきしたでは、ニョッキが くびを おさえて たっていました。アリの ぎょうれつを みおろして いたので、くびがかちかちです。モリが ゆびを いっぽん ぴんと たてました。

「それはね。ひとつめ、くびを かたほうにだけ まげると、ほねたちが 『おい、ちょっと どいて』って けんかするの。ふたつめ、だから まっすぐ のばして、たいらな ところに おくの。みっつめ、そうすると ほねたちが いちれつに ならんで、じゅんばんに……。」

ウソンは あくびを しました。ドゥドゥは その あいだに、しょうたいじょうを ニョッキの あしの ゆびの あいだに はさんで あげました。

「……だから、たいらな ところに まっすぐ。わかった？」

「うん。でも ねむい。」

コンイは ふたまたの いりぐちの まえで、ちずを かいて いました。テーブルまで いく みちを えんぴつで ふとく ひいて、あとが かわくように くさの うえに ひろげて おきました。

さいごは ボリの だいどころです。ドアを にかい おすと、パンの においが ふわっと あふれだしました。ボリは ゆうがた もって いく かごを つめて いる ところでした。

「パン ひとつ。それから、いるかも しれないから……。」

レタスが ひとたま まるごと はいりました。おたまも はいりました。

「おたまは どうして？」

「だれかが スープを つくりたく なるかも しれないでしょ。」

かごは ふたが ちゃんと しまらないくらい、ぱんぱんに ふくらみました。いちばん うえには、レタスの はっぱが ぴょこん。

おひるに、ふたりは きみどりの おうちへ かえって きました。ジソンが ごはんの おちゃわんを さしだしました。

「ごはんに きらきら かけて。たくさん たくさん。」

きらきらは、ごはんの うえにも、テーブルの うえにも、ジソンの ひざの うえにも こぼれました。ウソンは いちごジャムを ぬった パンを みっつ たべて、よっつめは ジソンの おさらに そっと のせて あげました。それから ふたりとも クマタの となりに ねころんで、おひるねを しました。

ヌルの ことは、すっかり わすれて しまいました。ふたりも、ドゥドゥも、ピオも。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ひが かたむくと、みんな きりかぶテーブルに あつまりました。ボリは かごを かかえて、よたよた やって きました。とちゅうで ドゥドゥに あって、かごを おろして、しばらく おしゃべりしてから きました。

ピオが テーブルの まんなかに ぴょこんと とびのりました。

「ヌルが いない！ きいた？」

ジソンが ぱっと たちあがって、あしを どん どんと ふみならしました。

「ぼくが むかえに いく。いますぐ。」

その とき、ボリの かごの なかから ちいさな こえが しました。

「ぼく、あさから ずっと こっちに むかってたんだよ。」

ボリが ふたを あけました。レタスの はっぱの まんなかに まるい あなが あいて いて、その あなの なかに ヌルが すわって います。

「ヌル！ どうやって きたの？」

「ぜんぶ じぶんの あしで きたよ。」

ヌルが レタスを もぐもぐ しながら いいました。

「かわべの すなの みちが ぬれてて、すべったんだ。でも あったかい いしが ずらっと ねて いてね。ひとつずつ わたって きたの。」

ラッコが かごを ぎゅっと だきしめました。

「ぼくの いしたちが やすんで いたのに？ じゃあ、まるぺたりんが ヌルを おんぶして あげたんだね。」

「みぞには はしが あったよ。ながくて、ふわふわで、ときどき もぞもぞ うごく はし。」 ヌルが いいました。

ニョッキが くびを なでました。

「どうりで、おひるね してたら くびが くすぐったかったんだ。モリの いう とおり、まっすぐ のばして みぞの うえに おいてたの。」

モリは むねを はりました。

「ほらね。くびって いうのはね、ほねが ずらっと……。」

「モリ、それ あさ きいたよ。」

「わかれみちでは、どっちか わからなかったの。でも じめんに おおきな かみが しいて あって、ふとい せんが テーブルの ほうへ のびてたんだ。その せんだけ たどって きたよ。」

コンイが ちずを ひろげました。えんぴつの せんの うえに、きらきら ひかる すじが もう いっぽん かさなって います。ヌルが とおった あとです。

「その つぎは、みちばたに かごが あったの。レタスの においが ふんわり してね。はいって ちょっと たべてたら、かごが きゅうに あるきだしたんだよ。」

「ドゥドゥと おしゃべりしてて、おろした ときね！」

ボリが てを ぱちんと たたきました。ドゥドゥは めを きらきら させました。

「ぼくの おしゃべりの おかげ？ ほんと？ じゃあ、あしたは もっと たくさん しゃべろうか？」

みんな、どっと わらいました。ウソンは ゆびを いっぽんずつ おって かぞえて みました。

「ラッコの いし、ニョッキの くび、コンイの かみ、ドゥドゥの おしゃべり、ボリの かご。」

ゆびが いつつ ぜんぶ おれました。ウソンは まるく なった げんこつを みおろして、ひとりで にんまり わらいました。

・

ひが やまの てっぺんに かかりました。テーブルの うえに、きいろい ひかりが ながく ねそべりました。ボリが やかんを もって コップに じゅんばんに おちゃを つぐと、コップが ひとつずつ きらっ、きらっ。

ウソンが いすから おりて、くさの うえに すわりました。ジソンも おにいちゃんの となりに すわりました。ひかりが ふたりの ひざまで おりて きました。ウソンは お日さまの ほうへ かおを むけました。

「お日さま、ぼくたちの 森は きょう、こんなふうに すごしました。」

ドゥドゥが いいかけて いた ことばを とめました。ピオも くちばしを とじました。

「あさ、ドゥドゥが しょうたいじょうを くばりました。ピオは はんぶんだけ いって とんで いきました。ヌルは ひが のぼると すぐ しゅっぱつしました。ラッコは かわの みずが はなを おしたから、おくれたそうです。」

「いしの なまえも よびました。」

ジソンが くちを はさみました。

「もこりん、かぜあな、まる…… まる なんだっけ？」

「まるぺたりん。」

ラッコが ちいさな こえで おしえて くれました。

「モリは くびの はなしを ながく しました。ぼくたちは あくびを しました。コンイの ちずは また おおきく なりました。ボリは おたまを つめました。スープは だれも つくりませんでしたけど。」

ボリが ほっぺたを ぽりぽり かきました。

「おひるに ぼくは いちごジャムの パンを みっつ たべました。よっつめは ジソンに あげました。」

「ぼくは きらきら ごはんを たべました。ひざに こぼしました。」

「クマタは ねて いました。ずっと。」

くさの うえに ねころんだ クマタが、めを とじた まま こたえました。

「そうだよ。」

「それから、ヌルが きました。みんなで つれて きました。でも、みんな しりませんでした。」

ウソンは ことばを とめて、もっと はなす ことが ないか かんがえました。

「……おしまい。」

お日さまの こえは しませんでした。ヌルが きゅうに はやく なる ことも なかったし、コンイの ちずが ちいさく なる ことも ありませんでした。ただ その 日の ゆうがた、お日さまは やまの てっぺんで、ながい ながい あいだ しずまずに いて くださいました。

「あさ、ぼく、ひは まって くれないって いったよね。まちがえちゃった。」

ドゥドゥが いいました。ボリは かごから おたまを とりだして、くるくる まわして みました。あしたは きっと、その おたまで また スープを つくるでしょう。

その よる、パジャマを きた ジソンが、ふとんの なかで もう いちど やりました。

「きょう、ぼくの くつしたは こんなふうに すごしました。あさ、かたほう なく なりました。ビーズクッションの したに ありました。おしまい。」

　となりで ウソンが ふとんを かぶって、くすくす わらいました。

　（みんなの くつしたは、きょう どんなふうに すごしましたか？）

みっつめの にわ

お月さまが てらす よる

じゅうななばんめの おはなし

いすを かたづけなかった よる



ウソンが お日さまに いちにちの ことを ぜんぶ おはなしして、「……おしまい。」と いった あの ゆうがたが すぎました。

それから なんにちも、森の ともだちは それぞれ いそがしく すごしました。コンイは ちずを かいて、ドゥドゥは しょうたいじょうを はこびました。ボリは あの おたまで また スープを つくって、ふたりは すべりだいを すべりました。

ボリは、いつも いちばんめに おちゃを ついで いた コップを、うっかり わすれて いました。だれも その コップを のぞきこみませんでした。

コップには、きいろく いろづいた はっぱが いちまい おちて いました。

ある あさ、ひが のぼって、きみどりの おうちの やねを あたため、ビーズクッションに ねころんだ クマタの おなかまで ぽかぽかに あたためました。

ボリが あさの パンを もって、きりかぶテーブルへ いきました。ふたりも ちょこちょこ あとに ついて いきました。

テーブルの うえには、ひかりが おりて きて いました。ボリの いすにも、ラッコの コップにも、ジソンの やまみたいな いすにも。でも テーブルの かたすみ、ひじかけが つるつるに すりへった あの いすだけが、かげの なかに あるでは ありませんか。

「ひなたの ところ、ない。」

ジソンが その まえの コップを りょうてで もって、ひの あたる ほうへ うつしました。コップが すぐに きらっ。もとの ところに もどすと、コップは また かげの なかへ。

ジソンが そらを ゆびさしました。

「お日さまは あそこに いるのに、テーブルには きて くれない。」

ウソンも そらを みました。お日さまは、いつもの ところに いつもの とおり いました。

「お日さま、いそがしいの？」

ジソンが ききました。

ボリは だまって パンを おきました。あの せきの まえにも ひとつ。

・

その 日の ゆうがた、ひが やまの むこうに しずむと、ともだちは ひとり、ふたりと おうちへ かえって いきました。ラッコは かわへ、コンイは あなへ、ドゥドゥは おうちへ。テーブルには よにんが のこりました。ウソンと ジソン、モリと ボリ。

ばんごはんの あと、コップを あつめるのは ジソンの しごとです。とっての とれた ラッコの コップ、ふちの かけた モリの コップ、そこの ひろい ボリの コップ。ジソンは コップを ひとつずつ もって、おぼんの うえに かさねました。ひとつ、また ひとつ。

さいごの コップの まえで、てが とまりました。

あの いすの まえの コップでした。ほかの コップより おおきくて まるいので、ジソンが いつも りょうてで もつ コップ。ジソンは コップを りょうてで つつみこんでから、ぱっと てを はなしました。

「つめたい。」

その コップの みずは、いつも ほんのり あたたかかったのに。

そらに お月さまが のぼりました。けれど、みちは すぐには あかるく なりませんでした。うすい くもが、お月さまの まえを ゆっくり とおって いる ところだったのです。

ウソンが おとうとの そばに きました。おとうとが おぼんの ほうへ ひきよせかけて いた コップを、ウソンは そっと うけとって、いすの すぐ まえの もとの ところに、もう いちど おきました。コップの そこが テーブルに ついて、ことん。

「これは ここに いようね。」

ジソンは おぼんの うえの コップを みおろして いましたが、そのままに して おきました。

ボリが やかんに あたたかい おゆを いれて もって きました。あるく たびに ふたが かたかた、かたかた。

ボリは テーブルの まえに たって、コップを みまわしました。いつも いちばんめに あの コップへ つぐのは、ボリでした。ボリは やかんを もった まま、しばらく うごきませんでした。

モリは テーブルを まわって、いすを ひとつずつ おしこみました。モリは、いすが テーブルに ぴたっと くっつく おとが すきです。その おとが すると、いちにちが おわるのです

。ラッコの いす、コンイの いす、ドゥドゥの いす。ずずっ、ずずっ。

あの いすの まえで、モリの てが とまりました。

モリは せもたれに てを のせた まま、たって いました。おしこみも せず、てを はなしも せずに。それから、はりを おく ときのように、そっと てを ひっこめました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

くもが よけると、ウソンが そらに むかって ききました。

「お月さまは きょう、どこに いくの？」

お月さまは まいばん、森の うえを とおって、とおくまで いきます。けれど きょうは、つきあかりが テーブルの はしに とどくと、コップ ひとつの ふちまで きて、そこで とまりました。

ウソンは、なんと いったら いいのか ことばを さがしました。

コンイと いっしょに かいた あたらしい ちずが、うかんできました。あおい せんも あって、ゆがんだ まるも ある ちずです。

ポケットに てを いれると、しかくく おりたたんだ かみが ゆびさきに ふれました。ウソンは かみの かどを なんども いじって いましたが、とりだしませんでした。

ジソンが テーブルの よこの くさの うえに、ぺたんと すわりました。ウソンも おとうとの となりに すわりました。つゆで ぬれた くさの せいで、おしりが つめたく なりました。

「おにいちゃん。」

「うん。」

ジソンは おにいちゃんの かおを みて いましたが、くびを よこに ふりました。

「……なんでもない。」

ウソンは それいじょう きかないで、おとうとに ぴったり くっついて すわりました。かたと かたが、こつん。

モリは テーブルの したを のぞきこみました。くさの あいだに、ちいさくて まるい きの ボタンが ひとつ おちて いるでは ありませんか。のきしたに つんで ある ものなら、どれが だれの ものか、モリは ぜんぶ しって います。でも このボタンの もちぬしは、きょうに かぎって おもいだせませんでした。

モリは さいほうばこを あけて ボタンを いれ、ふたを しめました。

ぱちん。

ジソンが たちあがって、あの いすの ところへ いきました。そして すわる ところに、てのひらを ひろげて のせました。きが ひんやりして います。

「ここ、いつも あったかかったのに。」

ジソンは てを はなしませんでした。

「あいたい。」

とても ちいさな こえ。ウソンが ちかづいて、その てのよこに じぶんの てを おきました。おにいちゃんの ゆびは、おとうとの ゆびより ひとふしぶんくらい ながいです。ふたつのてが ならんで、いすの うえに。

お月さまは、こたえを いそぎませんでした。テーブルの はしに あった つきあかりが、ゆっくり、とても ゆっくり あのいすまで すべって きました。ひかりは ひじかけを こえ、すわる ところを こえて、こどもたちの てのこうの うえに そっと おりました。

「わたしも、とても あいたいよ。」 そんな こえが、しずかに しました。

ボリが、それまで もって いた やかんを おきました。とってを はなす てが、とても しずかでした。

かぜが ひとすじ ふいて きます。テーブルクロスの はしがばさっと めくれて、おぼんの うえの コップが かたかた なって、いすの まえの コップも ぐらっ！

モリが いそいで テーブルクロスの はしを つかみました。ウソンは はんたいがわの はしを。ジソンは りょうてで いすの まえの コップを つつみました。たおれないように、ぎゅっと。

かぜは すぐに おさまりました。

みんな また すわりました。ボリは かごの そこに のこった パンを ひとつ、よっつに わけて くばりました。ジソンは パンを にぎった まま みつめて いましたが、たべないで ポケットに いれました。ポケットが パンの かたちに ぷくっ。

お月さまは、やまの むこうへ つづく みちを みて いました。つきあかりが その みちに そって、とおくまで しろく しかれて います。森の そと、まだ だれも いった ことの ない ところまで。

ボリが やかんを また もちあげました。もう まよいませんでした。あの いすの まえの コップから はっぱを そっと とりだして、さいしょの いっぱいを そこに つぎました。のこりの おゆは、コップ ごとに わけて つぎました。

ウソンは じぶんの コップを りょうてで つつみました。てのひらより あたたかい コップです。ジソンも、モリも、ボリも、りょうてで コップを つつみました。

おゆが さめる まで、よにんは そうして すわって いたのでした。

・

おうちに かえる じかんです。

ウソンは ジソンの てを ぎゅっと にぎりました。

「あしたの あさ、パンを やくよ。はやおきして。」

ボリが いいました。ジソンは ぷくっと ふくらんだ ポケットを ぎゅっと おして みました。

モリが あの いすを みつめました。まいばん さいごに おしこんで いた いすです。

モリは その いすを おしこみませんでした。

いすは テーブルから てのひら ひとつぶんくらい はなれたまま、だれかが いま たちあがった ばかりの ように おいてありました。その うえに、つきあかりが すわって いました。

モリと ボリが、きみどりの おうちの かいだんまで おくって くれました。もう くもは ありませんでした。ほんの すこしの みちが、きょうは しろく あかるく みえました。

ウソンは あるきながら、ポケットの なかの かみを また さわりました。そして そらに むかって、ちいさな こえで いいました。

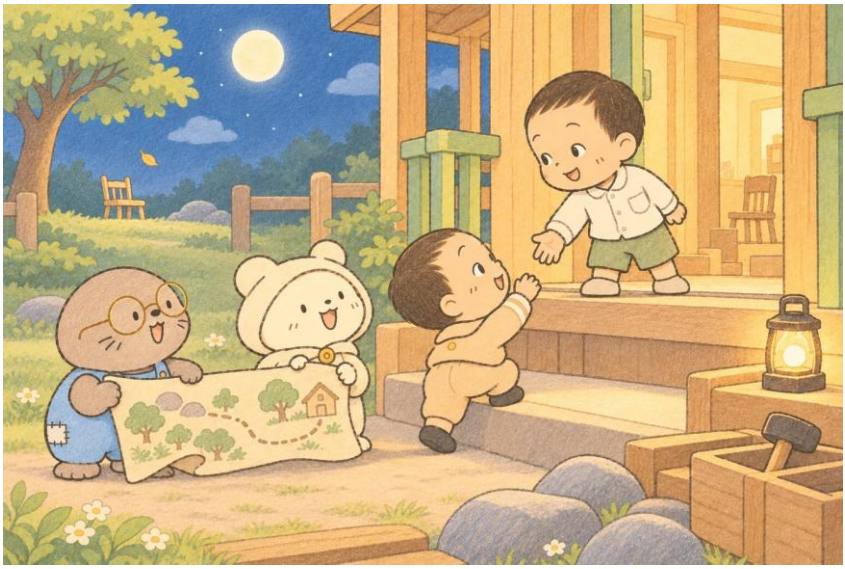
「ちずは、あした みせますね。」

お月さまは、ウソンの あしもとの みちを、てのひら ひとつぶん もっと あかるく てらして くださいました。

かいだんの まえで、ジソンが ふりかえりました。テーブルの ほうに てを ふりました。

コップは、その ばしょに のこりました。

お月さまが また みちを てらした よる



ばんごはんの あと、ドゥドゥが きみどりの おうちの かいだんを にだんずつ かけあがって きました。てには いつもの ように しょうたいじょうが にまい。いちまいは ふたりに さしだして、もう いちまいは また ポケットに しまいました。その いちまいを だれに あげるか、ドゥドゥにも まだ わかりませんでした。

「こんや つきが でたら、コンイの おうちの おかに いく ひと？ コンイが よるの ちずを かくんだって！ うわぎ、ぜったい きて きてね！」

ふたりは もう パジャマすがたでした。あきの よるなので、ジソンは パジャマの うえに けいとの ベストを かさねて きて、ウソンは うわぎの ポケットに ちずを いれました。ゆうべ お月さまに みせると いった、あの ちずです。

コンイは、きみどりの おうちの かいだんの したで まっていました。くるくる まいた かみは わきに、えんぴつは みみに。

お月さまが のぼって くると、よにんは でかけました。つきあかりが せなかの ほうから てらすので、かげたちが いっぽ さきを あるきました。

「ぼく、しってる。コンイの おうちは こっちだよ。」

ウソンが せんとうに たちました。コンイは じぶんの おうちへ いく みちなのに、だまって ついて きました。よるの みちは ほんとうに ひるとは ちがいました。すべりだいの かげが ながく ねそべって いました。ウソンは それを おおきな けものの しっぽだと おもって、いっぽ さがりました。

（森の すべりだいは、よるに なると かげを にばいも ながく のばします。ひるま こどもたちを たくさん のせすぎたので、よるは あしを うーんと のばして やすむのだそうです。）

「すべりだいだよ。」

コンイが いいました。

「しってる。ぼくも わかってたもん。」

コンイの おうちの いりぐちは ふたまたです。その まえに、ドゥドゥが たてた ひょうしきが たって いました。おうちの え ひとつ、スコップの え ひとつ。じは よめなくても、えなら ジソンにも よめます。

「おうちの えは こっち！」

「ジソン、そっちじゃ ないよ。その ひょうしき、さかさまなんだ。」

「ちがうもん。えは こっちだって。このまえは おにいちゃんが えを みまちがえたんだよ。えは まちがえないもん。」

「おにいちゃんが しってるの。」

「えが しってるの！」

ジソンは あしを ふんばって たちました。ドゥドゥが ほっぺたを かきました。

「ぼくが たてたんだけど。たてた ときは あってた きが するけど……。」

ジソンは とうとう おうちの えの ほうへ いきました。なんぽか いくと、あしもとが ふかふかに なって、ジソンが つちの やまの なかへ ずぼっ！ ひざまで はまりました。

「ここは ぼくの つちの ものおきだよ。」

コンイが めがねを かけなおしながら いいました。ジソンのパジャマの ズボンの すそが どろだらけに なりました。

「……えが うそ ついた。」

ところが、ジソンの つまさきに なにかが ひっかかって でて きました。どろの ついた けいとの マフラーの はし。

「ぼくの マフラーだ！ この まえの ふゆに なくした やつ！」

コンイが マフラーを ぱんぱんと はたいて くびに まくと、ジソンの あたまを なでました。ジソンは どろの ついた かおで、にっと わらいました。

コンイの おうちの あなの うえは、まるっこい おかです。よにんが おかを のぼって いくと、くもが お月さまを かくしました。みちが きゅうに まっくらに なりました。すぐ となりの ともだちの かおも みえません。

ジソンが おにいちゃんの そでを ぎゅっと つかみました。ウソンも ほんとうは こわかったのです。その とき、ドゥドゥが はなしはじめました。

「ぼく ここに いるよ。ぼくの こえ きこえる？ ジソン、きょうの ばんごはん なに たべた？ じゃがいも？ いくつ？」

ドゥドゥは やすまずに ききつづけました。きいて いる あいだは、ドゥドゥが どこに いるのか ちゃんと わかります。コンイが こえの ほうへ てを のばして、ドゥドゥの オーバーオールの ひもを つかみました。ウソンは コンイの ズボンの うしろの ポケットを、ジソンは おにいちゃんの そでを。よにんは きしゃみたいに、ずらっと つながりました。

「ドゥドゥ、ずっと しゃべってて。」

「まかせて。ぼく これ いちばん とくいなんだ。おおきい じゃがいもだった？ ちいさい じゃがいもだった？」

ドゥドゥの こえを たどって、いっぽ、また いっぽ。くもが とおりすぎて みると、よにんは おかの てっぺんに たって いました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

おかから みおろすと、かわが つきあかりを うけて、しろく ひかって いました。よるには ぎんいろの すじに なって、森の そとまで、やまの むこうまで、くねくねと つづいて います。

「かわって、あんなに ながかったの？」

コンイが くさの うえに おおきな かみを ひろげました。えんぴつを みみから とって、きょう きた みちを かきました。きみどりの おうち、すべりだい、さかさまの ひょうしき、つちの ものおき、そして おか。それから ぎんいろの すじに そって、えんぴつを うごかしました。かみの はしまで いっても、かわは おわりません。

「ここまでは あってる。でも、かみが たりない。」

ちずの そとがわの かどは、からっぽでした。ジソンが パジャマの ポケットから ちびた いろえんぴつを とりだして、その あいた ところに ともだちを ひとり かきました。かおは

まるくて、めは ちょん ちょんと てんが ふたつ、くちは わらって いる せんが いっぽん。

「ここに くる ひと。」

「だれ？」

ドゥドゥが ききました。

「わかんない。」

「じゃあ、なまえ つけよう。まるっこは どう？」

ウソンが いうと、ジソンが くびを ぶんぶん よこに ふりました。

「だめ。その ひとが おしえて くれるの。」

つきあかりが ちずの かどへ うつって いって、まるい かおの うえに しろく おりました。かおが、まるで わらって いるみたいに あかるく なりました。

ジソンは いろえんぴつを ぎゅっと にぎって にっと わらうと、まるい かおの よこに、まるを もう ひとつ かきました。

「これ なあに？」

「この ひとの コップ。」

コンイは その まるい かおまで いく みちに、あめが ふると ぬかるむ ところごとに、ちいさな てんを うちました。

「はじめて くる ともだちは、わからないだろうから。」

ドゥドゥが ポケットに しまって おいた しょうたいじょうを いちまい とりだしました。ひとつずつ こえに だして ききながら かきました。

「どこで？ いつ？ だれと？ それと、その まえに もう ひとつ！」

きりかぶテーブル、ひが かたむいたら、みんなで。そして いちばん したに、もう ひとこと かきたしました。『おそく きても いいよ。』

「おうちが どこか わからないから、かぜに まかせるよ。」

ドゥドゥが しょうたいじょうを たかく かかげると、よるの かぜが さっと さらって いきました。しょうたいじょうは ひらひら、ぎんいろの かわの ほうへ とんで いって、すぐに みえなく なりました。

・

かえりは コンイも、ちずを くるくる まいて もって ついて きました。きみどりの おうちへ かえる みちも かかなくては いけないからです。

「くる ときは かげが まえに あったよね。じゃあ、かえる ときは うしろに なくちゃ。」

ウソンは、かげが ちゃんと うしろに あるか みようと うしろを むいて、うしろむきに あるきはじめました。みんなも まねして うしろを むきました。

そのうち、ウソンの おしりが なにかに どすんと ぶつかりました。かたくて、まるくて、つるつるした もの。

きりかぶテーブルでした。きみどりの おうちの にわの はしまで、ちゃんと かえって きて いたのです。

「ほらね。ぼく、わかってたって いったでしょ。」

テーブルの うえは、しろく あかるく てらされて いました。ウソンが ポケットから ちずを とりだして、ひじかけの すりへった あの いすの まえに ひろげました。

「お月さま、これです。きのう いった ちず。」

あおい せんも、ゆがんだ まるも、つきあかりの したで ぜんぶ みえました。ウソンは、それで じゅうぶんと いう かおで、ちずを また たたみました。

コンイは テーブルの うえに よるの ちずを ひろげて、おかから テーブルまで きた みちを かきこみました。

「うしろむきの みちは どう かくの？」

「あしあとを さかさまに かけば いいよ。」

ジソンが いいました。コンイは ほんとうに、つまさきが うしろを むいた あしあとを かきました。

ひろげた よるの ちずは、テーブルを すっかり おおっても あまるくらい おおきかったです。コンイは えんぴつの あとが かわくように ちずを ひろげた まま、よすみを コップで ひとつずつ おさえて おきました。あしたの あさ とりに くる ことに して、ドゥドゥと ふたりで コンイの おうちへ かえっていきました。ドゥドゥが ずっと しゃべって いるから、みちに まよう しんぱいは ありません。

テーブルから きみどりの おうちの かいだんまでは、ほんの なんぽかです。ジソンは その なんぽかも、うしろむきで あるきました。

「おにいちゃん、あしたの よるも うしろむきで あるく？」

お月さまが にもつを つつんで くれた 日



つぎの 日の あさ、コンイが よるの ちずを とりに、きりかぶテーブルへ いきました。ふたりも コンイの うしろを ちょこちょこ ついて いきました。

ところが、ちずが ありません。よすみを おさえて いた コップ よっつだけが、テーブルの はしに ならんで たって います。そして テーブルの まんなかに、つつみが ひとつ。つきあ

かりみたいに ほんのり しろい ぬので、よすみが ウサギの みみみたいに ぴんと むすんで ありました。

「あれ？ ぼくの ちずは？」

ウソンが ウサギの みみを ひとつ ひっぱると、つつみが するすると ほどけました。いちばん うえに、コンイの ちずが きちんと しかくく たたまれて はいって いました。

「だれが たたんだの？ ぼく、こんなに きちんと たためないのに。」

ちずの したには、コップが ひとつ ありました。とってが なくて、そこが ひらたくて、よこに ちいさな くぼみが ひとつ ある コップ。

「これ、だれの コップ？」

ジソンが コップを みみに あてて みました。しーん。

テーブルの よこの くさの うえに ねころんで いた クマタが、かたほうの めを あけました。

「よる、つきあかりが あの いすに ながいこと すわって いたよ。ぼくが しってるのは それだけ。」

ジソンは コップを りょうてで ぎゅっと だきしめました。

「ぼくのに する。」

「ジソンのじゃ ないでしょ。」 ウソンが いいました。

「ぼくが いちばん さいしょに もったもん。」

「でも、もちぬしが ほかに いるよ、きっと。」

「じゃあ、もちぬしが みつかる まで ぼくの。」

ジソンは コップを もつ ところを さがして いて、よこの くぼみに ゆびを あてて みました。ゆびが ずんぐりしすぎて はいりません。こゆびも。

「おにいちゃん、ここ ゆびの ところじゃ ないよ。とがった ものの ところだよ。」

「とがった もの？」

「うん。つめ みたいな もの。」

ジソンは コップを うわぎの むねポケットに すぽんと いれました。ポケットが コップの かたちに ぷくっ。

ドゥドゥが しょうたいじょうを にまい ふりながら かけてきました。

「コップの もちぬし、みつけたら しょうたいする？」

ジソンが ポケットから コップを また とりだして、なかを のぞきこみました。そこに、かれた はっぱが いちまい くっついて いました。ながほそくて、ふちが のこぎりの はみたいに ぎざぎざ とがった はっぱ。

「おにいちゃん、これは まだ みて なかったでしょ。」

コンイが めがねを はなの うえに おしあげて、はっぱを のぞきこみました。

「くりの はっぱだよ。くりのきは、かわが おおきく まがる ところに あるんだ。ぼくの ちずで いうと…… ここ。」

コンイが ちずを ひらきました。いっかい、にかい、さんかい。ゆびが かわの せんを たどって おりて いって、かみの

はしで とまりました。かわが おおきく まがる ところ、かみの そとへ いまにも でて いきそうな ところです。

ドゥドゥは えんぴつを くちに くわえたり はなしたり しながら、しょうたいじょうを いちまい うめました。『コップのもちぬしさまへ。ぼくたちと いっしょに おちゃを のみましょう。』

よにんは かわに そって でかけました。ジソンの ポケットの なかでは、コップが かたかた、かたかた。

ひが あたまの うえを すぎると、かわが おおきく まがりました。まがった ところに、いがぐりを ぶらさげた くりのきが いっぽん、その したに ちいさな おうちが いっけん。ドアが ゆび いっぽんぶんだけ あいて いました。

（アナグマは、森で いちばん すこしだけ ドアを あける どうぶつです。その すきまから まず かぜの においを かいで、おきゃくさんの かおは そのあとで みるのだそうです。）

「だれだい？」

ドアの すきまから、ちいさな めが ひとつ みえました。アナグマの おばあさんでした。ドアの ふちを、とがった つめが よっつ、しっかり つかんで いました。

ジソンが おにいちゃんの そでを つんつん ひっぱりました。

「おにいちゃん、とがった もの。」

ドゥドゥが ドアの まえに ぐっと ちかよりました。

「こんにちは！ この コップ しってますか？ おばあさんのですか？ どうして つつみに はいってたんでしょう？ あ、その まえに もう ひとつ きいても いいですか？」

おばあさんは ドアを しめかけて、てを とめました。しつもんが どこまで つづくのか、きに なったのです。ドアの すきまが ゆび いっぽんから にほんに、にほんから さんぼんに なりました。ドゥドゥが いきを すおうと ことばを きると、おばあさんが ききました。

「それで、なんの あつまりだい？」

ドゥドゥには、ききたい ことが まだ とおくらい のこっていました。ドゥドゥは くちびるを もぐもぐ させて いましたが、にっと わらいました。

「えっと…… いっしょに すわる あつまりです。」

ドアが ぱっと ひらきました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

おばあさんの おうちは、ちいさな おうちでした。いすは なくて、ざぶとんが ふたつ。おばあさんは ざぶとんを ひとつ ジソンの ほうへ おしやって、じぶんは ゆかに じかに すわりました。みんな ゆかに まるく すわりました。

たなには、コップが たった ひとつ ありました。おばあさんは その コップに あたたかい はなの おちゃを ついで さしだ

しました。でも おきゃくさんは よにんで、コップは ひとつ。おばあさんは コップを もった まま、あたまを かきました。

ジソンが ポケットから コップを とりだしました。

「ぼくの コップで のんでも いいよ。ぼくから。」

ジソンは じぶんの コップに はなの おちゃを もらって、ごくごく のみました。ウソンも、ドゥドゥも、コンイも、そのコップで じゅんばんに まわして のみました。さいごの ばんで、ジソンは くぼみが おばあさんの ほうを むくように、コップを くるっと まわして さしだしました。

「おばあさんは ここ もって。」

おばあさんが コップを うけとると、よこの ちいさな くぼみに、つめが ひとつ すぽっと はいりました。

ぴったりでした。

おばあさんは コップを あちこち まわして みて、はっはっと わらいだしました。

「この こったら、この まえの まんげつに つきを みに でて、おかに おいて きた ものなんだよ。どこを ほっつき あるいて きたんだい？」

ジソンは その コップを たなの うえ、おばあさんの コップの となりに ならべて おきました。

「ここに おいといて。こんど きたら、また これで のむから。」

ウソンが おとうとの みみもとで ささやきました。

「ジソンのって いってたじゃない？」

「うん。ぼくのだけど、ここに すんでるの。」

おばあさんが、たなの うえの コップ ふたつを つめで こつん、こつんと たたいて みました。

「これで うちにも、おきゃくさんの コップが できたねえ。」

ドゥドゥが しょうたいじょうを おばあさんの てに にぎらせました。おばあさんは からっぽに なった ジソンの ポケットに、おにぎりを ひとつ いれて くれました。

「とちゅうで おなかが すいたら おたべ。」

・

かえりみちで、お月さまが のぼりました。テーブルに つくと、つきあかりが あの いすの うえに しろく すわって いました。

テーブルの はしには、ヌルが くっついて いました。

「つつみ どこ いったの？ ぼく、あさから みに くる とちゅうだったのに。」

ウソンが からっぽの つつみの ぬのを ひろげて みせました。ヌルは からっぽの ぬのを ながいこと じっと みつめました。

「ぜんぶ みた。」

ウソンは ぬのを きちんと たたんで、あの いすの うえ、つきあかりの すわって いる ところに のせて おきました。それ

から コンイの ちずを ひろげました。くりのきの おうちを かきこむ ばんです。

ところが、かわが まがる ところからは かみが ありません でした。そとがわの かどは、ジソンが かいた まるい かおが もう とって いました。

「かみを もう すこし ひろげれば いいよ。」

コンイが いいました。でも、もう ひろげる ところが ありません。

ウソンが てを ぱちんと たたきました。

「じゃあ、はれば いいよ！ ジソン、のり！」

ジソンが きみどりの おうちの ほうへ びゅーんと はしっていきました。かいだんの まえまで いくと、びゅーんと もどって きました。

「のり、どこに あるの？」

ウソンも しりませんでした。コンイも、ドゥドゥも。ジソンが ポケットを ごそごそ さぐって、おにぎりを とりだしました。

「のりは ないけど、ごはんは ある。」

コンイが ズボンの ポケットから、どろの ついた ほそながい かみを いちまい とりだして くれました。ウソンは ごはんつぶを いくつか ゆびで ぎゅっ ぎゅっと つぶして ちずの はしに ぬり、ほそながい かみを あてて こすりました。ちずがてのひら ひとつぶん ながく なりました。

ウソンは あたらしい ほそい かみの うえに、くりのきを いっぽんと ちいさな おうちを かきました。おうちの なかには、コップを ふたつ ならべて。それから ポケットの なかの しかくい ちずも とりだしました。その ちずは、よるの ちずの うちがわの はし、つちの ものおきの えの よこに、ごはんつぶで ぎゅっ ぎゅっと つなげて はりました。

コンイが ながく なった ちずを くるくる まいて、ウソンの うでに だかせて くれました。

「これからは、これ きみたちが もって あるいて。いく ところ ごとに かいて きて。ぜんぶ かいたら、ぼくに みせてね。」

ウソンは ちずを かばんに さしました。ちずの はしが、かたの うえに にゅっと とびだしました。

ジソンは のこりの おにぎりを、おおきな くちで かぶりと たべました。

「のり、おいしい。」

よっつめの にわ

とおくから きた ともだち

アルの ふね



なんにちか たった あさ、きりかぶテーブルの うえに、あの つつみが また おいて ありました。よすみが ウサギの みみみたいに ぴん。

ドゥドゥが ウサギの みみを ほどきました。なかには、しらない ひとからの てがみが ふたつ。

「だれが かいたの？ だれに？ ぼくたちに？」

ひとつには、しろい はねが いっぽん はさんで ありました。モリが よんで くれました。

『とちゅうで なんにちか やすんで いっても いいですか？もうすぐ たずねて いきます。セオン』

もう ひとつからは、おがくずの においが しました。そこには たった にぎょう。

『くぎが ごじゅっぽん いります。かわしもの すなはま、だいくの アル』

どちらも、ちずに まだ ない ところから きた てがみでした。

くぎなら、モリの のきしたに かんごと あります。ふたりは えんがわに くぎを じゃらじゃらっと あけました。かぞえるのは ウソン、ならべるのは ジソン。

「いち、に、さん…… じゅういち、じゅうに、じゅう……」

ウソンの ゆびが、くうちゅうで とまりました。

「どこまで かぞえたっけ？」

「おにいちゃん、これは まだ かぞえて ないでしょ。」

ジソンが えんがわの すきまに はさまった くぎを いっぽん、すぽっと ぬきとりました。さんかい かぞえて、やっと ごじゅっぽん ぴったりに なりました。かぞえのこった くぎ なんぼんかは、こっそり ジソンの ポケットに はいりました。

ボリは しらせを きくなり、ふろしきを ひろげました。

「いるかも、いるかも、もう ひとつ いれよう。」

もうふが はいって、おなべが はいって、ちいさな いすまで はいりました。つぎの 日の あさ、つつみは ふたつに なって いました。

ドゥドゥが うんてんする バスは、すなはまへ いく せまい みちには はいれませんでした。それで、みんなで つつみを わけて もって、すなはままで あるいて いきました。

かわしもの すなはまには、おおきな ふねが ひっくりかえった まま よこたわって いました。その よこで、ビーバーが いっぴき、とんかちを たたいて いました。カン、カン、カン。

「アルです。くぎ、とどきました？」

アルは あいさつを しながらも、とんかちを おきませんでした。ウソンが かんから くぎを つまむと、ジソンが アルの てのひらに のせて あげました。カン、ひとつ。カン、ひとつ。さんにんで ちょうしを あわせると、まるで うたみたいでした。

「ふねは どうして つくるの？」

ジソンが きくと、アルは しっぽで すなを ぱたん ぱたんと たたきました。

（すなはまの ビーバーたちは、ことばの かわりに しっぽで こたえる ことが よく あります。ぱたん、なら『うん』で、ぱたん ぱたん、なら『あとでね』だそうです。）

その 日の ゆうがたから、あきの あめが ふりだしました。ひとばんじゅう ふって、つぎの 日の ひるまも やみませんで

した。ふたりと ともだちは アルの きの こやに あつまって、あめの おとを ききました。アルは その あいだにも、ふねのそこに さいごの いたを はりました。

ボリが つつみの いちばん したから、ちいさな レインコートを ふたつと、ながぐつを ふたそく とりだしました。

ひが くれると、あめの おとが かわりました。ぽつぽつ ふって いた あめが、ざあああと ふりだしました。こやの しきいの したから、みずが ゆび いっぽんぶん はいりこんで きました。

アルが しっぽで ゆかを たたきました。

ぱたん。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

その よる、みずが あふれて きました。すなはまの みずが てのひら ひとつぶん、また ひとつぶん。ごきんじょの みんなのおうちの しきいまで、みずに つかりました。

まっくらな なかで、みずの おとばかり どんどん ちかづいて きます。ジソンが ウソンの てを ぎゅっと にぎりました。ウソンも ジソンの てを ぎゅっ。どっちが さきに にぎったのかは、ふたりとも わかりません。

アルが ランプを たかく かかげて、ふねを まっすぐ おこしました。たちあがった ふねは、ごきんじょの おうちの やねくらい おおきかったです。

「のって ください。」

ごきんじょの みんなが、ふとんやら かごやらを かかえて のりこみました。ボリは つつみ ふたつを いっぺんに だきかかえて、ふねの いりぐちから はいろうと して……

ぎゅうっ。

つつみ ふたつが ならんで、いりぐちの わくに はさまって しまいました。まえにも うしろにも、びくとも しません。

「いるかも しれないでしょ。もうふも あるし、おなべも あるし、ちいさな いすも あるし……」

つつみの うしろから、ボリの こえだけが もごもご ひびきました。

ジソンが ボリの あしの あいだから、ひょこっと かおを だしました。

「ぜんぶ きれば いいよ！」

もうふは ジソンの かたに まかれて マントに なり、おなべは ボリの あたまに のって かぶとに なりました。ちいさな いすは ウソンの せなかに さかさまに おんぶされて、まるで カタツムリの からみたいでした。ほっそり した つつみ ふたつは、やっと いりぐちを するっと ぬけました。

「ぜんぶ はいったね。ひとつも おいて こないで。」

おなべの かぶとの したで、ボリが いいました。

アルは あめの なかで ロープを にぎって、さいごの ごきんじょさんまで まちました。いそいでとは、さいごまで いいま

せんでした。みずが ふねの したまで くると、ふねが ぷかりと うきあがりました。

・

ふねの なかは せまくて、ががやや にぎやかでした。ごきんじょの こどもたちは、もうふの なかで めだけ ぱっちり。あめつぶが やねを たいこみたいに たたきました。

ぽたっ。

ジソンの はなの さきに、みずの しずくが おちました。ぽたっ。また ぽたっ。いたの すきまから、みずが ひとしずくずつ しみこんで いました。アルが くぎの かんを のぞきこみました。からっぽでした。

ジソンが ポケットを さぐりました。ちゃりん。

「これ。」

かぞえのこった くぎです。カン、ひとつ。カン、ひとつ。ジソンが くぎを あてて、アルが うちました。くぎの あたまは ゆがんで いましたが、アルは なおしませんでした。しみこんで いた みずが、ぴたりと とまりました。

ジソンは ねむれなくて、まるい まどに はなを くっつけました。くもが あつくて、お月さまが どの あたりに いるのかも わかりませんでした。

「お月さま、ぼくにも ふねを ひとつ ください。ちいさいの。ぼくが のるの。」

となりに ねて いる ウソンが、ひそひそ いいました。

「お月さまは ふねなんか つくらないよ。」

「それでも。ちいさいの ください。」

ジソンは いきで くもった まどに、ゆびで ちいさな ふねを かきました。

その よる、ふねなんて きませんでした。やねを たたく あめの おとだけでした。

つぎの 日の あさ、ふたりは まるい まどの まえで、やねの はしから おちる あめつぶを かぞえました。ぽたっ、いち。ぽたっ、に。くぎを かぞえた ときより、ずっと じょうずに かぞえられました。あめつぶは、えんがわの すきまに かくれたり しないからです。

「……じゅうろく。じゅうなな。」

その つぎの しずくが、おちて きませんでした。

「おにいちゃん、あめが しずかだよ。」

みずが ひくに つれて、ふねは ゆっくり おりて いきました。どすん！ ふねの そこが、はじめに ふねを つくった あの すなはまに、また つきました。

ごきんじょさんの ひとりが、ふねを ぽんぽん たたきました。

「もう この ふねは すてても いいね。」

「また だれかが のるかも しれません。」

アルは ふねを その ばしょに たてて おきました。ゆがんだ くぎの あたまも、そのままに して おきました。

きみどりの おうちに かえった ふたりは、ながぐつを ぬぐなり、きりかぶテーブルに コンイの ちずを ひろげました。ウソンが ほそい かみの うえ、くりのきの おうちの よこに すなはまを かいて、ふねを かきました。

ジソンは えんぴつを うけとって、ふねの よこに てんを ふたつ、ちょん、ちょんと うちました。わざと ゆがめて。じぶんが あてて あげた くぎの ところです。

ぼく、わざと おそく はいったんだ



アルの ふねから かえって みっかめの ゆうがた、しろい はねの てがみを くれた おきゃくさんが、にわに まいおりました。あしが ながくて くびの ほっそりした、しろい ツル、セオンです。

「さきに てがみを おくったの。おおきな とりが きゅうに おりて きたら、みんな びっくりするでしょ。」

セオンは、きみどりの おうちの にわに みばん とまりました。ねるのは、あおい ビーズクッションの うえでした。クマ

タは セオンの した、ビーズクッションの なかに すっぽり うもれて ねて いました。セオンが とても かるいので、うえで だれかが ねて いるとは きづきませんでした。

（ツルは かたあしで ねます。おりたたんだ あしは ひとばんじゅう ゆめを まもって、あさに なると もう いっぽうの あしと こうたいするのだそうです。）

セオンは、やまの むこうの いけへ いく とちゅうでした。そこには、ちいさい ころ となりの すで いっしょに そだった、ちいさな みずどりが すんで います。

「ずっと まえに、あの こに わたす ものが あるって やくそくしたの。」

セオンの はねの したには、くさの くきで しっかり むすんだ きの はこが はさまって いました。

「その なかに なにが あるの？」

「あったら あけるの。」

ドゥドゥが しょうたいじょうを にまい ふりました。

「いつ いくの？ だれと？ ぼくたちも？」

よっかめの あけがた、もんを でようと した とき、セオンが ビーズクッションへ あるいて いって、じぶんの へこみのうえに もう いちど すわりました。

「ここ、いい ばしょだった。」

「また くれば いいよ。」

ジソンの ことばに、セオンは はねを いっぽん ぬいて、ビーズクッションの わきに さしました。それで やっと たちあがりました。

セオンは とばないで、ふたりと ならんで あるきました。かわの とびいしも、いっしょに ぴょこん ぴょこんと わたりました。わかれみちごとに、はねを いっぽんずつ のこして いくためでした。

「どうして さすの？ ぼくたち、もう とおって きたのに。」

「つぎに だれが くるか、わからないでしょ。」

はこだけは、ドゥドゥが もって あげると いっても、はねのしたに しっかり はさんで いきました。

おかの てっぺんは、かぜが つよかったです。セオンの おおきな はねが、なんども ぐらぐら ゆれました。りょうほうのはねを ひろげないと たえられないのに、かたほうの はねのしたに はこが あるのですから、しかたが ありません。セオンは なんぽも いかないうちに、はこを ぐいっと さしだしました。ちょうど ジソンの まえでした。

ジソンは りょうてで はこを うけとって、むねに ぎゅっとくっつけました。ウソンは うしろから ジソンの こしを ぎゅっと だきしめました。セオンは りょうほうの はねを おおきく ひろげて、かぜに のりました。おかを こえきると、ジソンは はこを かえしました。

「ありがとう、ジソン。」

おかの したには、ヨシが ぐるりと とりかこむ まるい いけが ありました。いけの ほとりの ちいさな すの まえで、みずどりが いちわ さかなを あらって います。セオンより ずっと ちいさくて、あしも みじかい みずどりです。

セオンは ヨシの かげで たちどまりました。ながい くびを ぐうっと のばしたかと おもうと また ひっこめて、はねを はんぶん ひろげました。いまにも とんで いって しまいそうでした。

その とき、ドゥドゥが ヨシの しげみを かきわけて とびだしました。

「こんにちは！ どこでって？ きみどりの おうちの にわ！ いつって？ それは あけて あるよ！ だれとって？ あそこの あの ツルと！」

ドゥドゥが 『ツル』と いう たびに、ゆびが ヨシの うしろを ちょん ちょんと さしました。だから セオンは とんで いけませんでした。だれかが なんども ゆびさして いるのに、そこから さっと きえたら、どう かんがえても へんですよね。

ちいさな みずどりは、ゆびの さきを たどって ヨシの うしろを ながいこと みて いましたが、セオンでは なく、ふたりに はなしかけました。

「あの おねえちゃん、ぼくの うどん たべたんだよ。」

「うどん？」

「むかし。ぼくが はいる まえに、ぼくの おわんに はいってたの、ぜんぶ たべちゃったの。それで つぎの 日、とおくへいっちゃった。」

ジソンが ぱっと たちあがりました。

「セオン ひどい！ おねえちゃんが おとうとのを たべちゃだめなんだよ！」

「ジソン、それは……」

ウソンが いいかけましたが、ジソンの みみには はいりませんでした。ジソンは ちいさな みずどりの となりに ぴったり くっついて すわると、うでぐみまで しました。

「ぼく、セオンとは あそばない。ぼくも おとうとだもん。」

ごごの あいだ ずっと、ジソンは セオンの ほうに せなかを ぷいっと むけて すわって いました。セオンは ヨシの うしろから でて こられませんでした。ながい くびが、さっきより もっと ひくく さがって いました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ゆうがたに なると、ちいさな みずどりが うどんを ゆでました。おきゃくさんに だす うどんです。おわんを ならべると、ひとつ たりません。ちいさな みずどりは じぶんの おわんを セオンの まえに おいて、じぶんは おなべの ふたを もちました。

だれも おはしを もちませんでした。うどんの ゆげだけが ひとりで いそがしそうです。

「あの 日、わたしが さきに たべたの。」

セオンの こえは ちいさかったです。

「おなかが ぺこぺこだったの。きみのだって わかってて たべたの。それから、ごめんねも いえないで、いって しまったの。」

ちいさな みずどりは おなべの ふたばかり みおろして いましたが、ゆげが すっかり きえる ころに なって、やっと くちを ひらきました。

「ぼく、わざと おそく はいったんだ。ぼくも いじわる したの。おねえちゃんが たべるの、ドアの すきまから ぜんぶ みてたんだ。」

ジソンの めが まんまるに なりました。うでぐみも するすると ほどけました。ジソンは セオンの ほうへ、よつんばいで のそのそ はって いきました。

「ぼく、はんぶんだけ きいてた。」

「え？」

「はんぶんだけ きいて、ひどいって いったの。ごめんね。」

セオンが ながい くびを まげて、ジソンの あたまの てっぺんに くちばしを そっと あてました。

それで やっと、セオンは はこの くさの くきを ほどきました。なかから でて きたのは、ちいさな きの おわん ひとつ。

そこに、あしの みじかい みずどりが いちわ ほって ありました。

「きみの おわんだよ。この おわんは、きみが いちばん はじめに つかうの。」

ちいさな みずどりは おわんを りょうほうの はねで うけとりました。そして おなべの ふたに あった うどんを その おわんに よそって、セオンの まえへ すっと おしだしたでは ありませんか。

「だれが さいしょに つかうかは、ぼくが きめるの。」

セオンは うどんを たった いっぽんだけ つまんで たべて、おわんを また おしかえしました。おわんは ふたりの あいだを、なんども なんども いったり きたり したのでした。

ドゥドゥが のこりの しょうたいじょうを とりだしました。

「じかんの ところは、わざと あけて おいたよ。ふたりで いっしょに きめてね。」

ちいさな みずどりは、しょうたいじょうを はねの したに はさみました。セオンが はこを はさんで あるいて いた、ちょうど その ところです。

ウソンは かばんから コンイの ちずを とりだしました。すなはまの ふねの よこに、ぎざぎざの やまを ひとつ かいて、やまの むこうに まるい いけを かきました。ジソンは いけの ほとりに、とりの えを ふたつ かきました。ひとつは くびが

ながくて、ひとつは あしが みじかくて。ふたりの あいだには、おわんが ひとつ。

「おわんは だれの？」 ウソンが ききました。

「いったり きたり する やつ。」

セオンは いけに もう なんにちか とまる ことに しました。ふたりと ドゥドゥは、くる ときに のこした はねを いっぽんずつ たしかめながら かえって きました。ウソンは ちずを いちども とりだしませんでした。

かわべに つくと、くる ときに ふんだ とびいしが、みずに しずんで います。ウソンと ドゥドゥは ズボンを まくりあげれば わたれますが、ジソンの あしでは わたれません。

「ぼく、わたれない。」

その とき、うみへ かえる とちゅうの ラッコが、みずの なかから ひょっこり でて きました。

「どうして そこに たってるの？」

「ふねが ないから。」

ラッコは みずの うえに せなかを つけて、まるく ねころびました。おなかが そらを むくように。

「ぼくは ねころぶと、ふねに なるんだよ。」

ジソンは ラッコの おなかの うえに、そろそろと のっかりました。ラッコが しっぽで みずを かきます。ジソンの つまさきに、かわの みずが ちゃぷ ちゃぷ。かわの うえに、お月さまが しろく のぼって きました。

「おにいちゃん、ぼく ふねに のったよ。」

ジソンが ラッコの おなかを てのひらで ぽんぽん たたきました。

「お月さまが ふね くれたよ。ちいさいの。」

「それ、ラッコでしょ！」

ウソンが かわの まんなかで さけびました。ラッコが ねころんだ まま いいました。

「きょうは ふねだよ。でも、ぼくの ふねには、もともと かいしか のらないんだ。」

「じゃあ、ぼく きょうは かい。」

ラッコが わらって、かわの みずを ひとくち ごくんと のんで しまいました。

ジソンは かいみたいに、まるく からだを まるめました。ちいさな ふねは つきあかりに そって、ゆっくり、とても ゆっくり かわを わたりました。

かねだってば、おなべだってば



セオンを いけに のこして きた つぎの 日の あさ、おかの むこうから からん からんと いう おとが きこえて きました。

「あれは かねだよ。」

「おなべだよ。」

「かねだってば。ぼく、しってるもん。」

「おなべ。おおきい おなべ。」

ジソンは くちを ぎゅっと むすびました。いちど おなべと いったら、ひが しずむまで ずっと おなべの 日が あります。きょうが ちょうど そんな 日でした。

ピオが まどべに ぴょこんと とびのりました。はねが ぜんぶ ぼさぼさでした。

「きいた？ かね！ りんご！」

それだけ いうと、ピオは もう おかの ほうへ ぱたぱたっと、ひくく とんで いって しまいました。りんごを とる 日だから、みんな おいでと いう かねでした。

「ほらね、かねでしょ。」

「……おおきい おなべみたいな かね。」

ジソンが とても ちいさな こえで つけたしました。ウソンは それなら じぶんの かちと いう ことに しました。

わかれみちの くさの はさきから、ほそい こえが きこえてきました。

「ぼくも かねの おとを きいて、いく ところなんだ。」

ヌルでした。おかの ほうへ、あるいて みっつぶんぐらい すすんだ ところでした。ジソンが てのひらを さしだすと、ヌルは つのを ちょこんと うごかして のりました。

おかの てっぺんの おおきな いえの うしろに、りんごの 木が ならんで たって いました。あきが りんごの ひとつ ひとつに、ほっぺを あかく ぬって いました。にわの はしらの てっぺんには、おおきな かね。

かねの ひもを にぎって いたのは、しっぽの さきが しろい、あかい キツネでした。

「いらっしゃい！ わたしは ロア。この かねは わたしが ならすの。わたしの おとうとも どこかで きいてる はずよ。」

ロアは へんじも またずに ひもを ひきました。

からん、からん、からん、からん！

「りんごとり、はじめ！」

（かねは いちど なると、かならず もう いっかいだけ ならしてと ねだるそうです。ロアは その おねがいを ことわった ことが いちども ありません。）

からーん。

いちばん おおきな りんごの 木の したには、おおきな かごが おいて ありました。おかの きんじょの みんなは はしごを のぼったり おりたり、ウソンと ジソンは ひくい えだの かかりに なりました。

ピオは はしごの いちばん うえの だんを とりました。たかくは とべないので、ひとだんずつ ぴょこん ぴょこんと とびあがって。

「きいた？ かごが……」

からん、からん！

「みんな、もう ひとれつ！」

ピオの ことばの つづきは、かねの おとの したに すぽんと かくれて しまいました。ピオは くちばしを あけた まま、めを ぱちくり ぱちくり。

ロアは かねを とても よく ならします。はしごを うごかすときも、だれかが りんごを ひとくち かじった ときも。

ヌルが ジソンの てのひらの うえから、かごの そこの ほうを みおろしました。

「ジソン、あのね…… かごの…… したに……」

からん、からん、からん！

「おみずの じかん！」

ヌルは はじめから いいなおさなければ なりませんでした。「ジソン……」すると また からん。

ジソンが ウソンの そでを ひっぱりました。

「おにいちゃん、りんごが あるいて いっちゃった。」

「りんごに あしは ないよ。」

「あるいて いったもん。ころころって。」

「それは ころがって いったんだよ。」

ふたりが いいあって いる あいだに、りんごが また ひとつ さかを おりて いきました。

おひるに なると、ロアが はしらの したから てまねきしました。

「おきゃくさん、いっかい ならして みる？」

ウソンは へんじより てが さきに でました。りょうてで ひもを ぎゅっと にぎって、からだごと ぶらさがりました。

からーん！

おなかの なかまで ずしんと ひびく おと！ ウソンの くちが ひとりでに ぽかんと あきました。

「もう いっかい！」

からん！ からん！ からん！

「おにいちゃん、おしっこ したい。」

からーん！

「おにいちゃーん、おしっこ。」

からん、かん、からん！

ところが ひもを はなして ふりかえると、ジソンが いません。しばらくして、ジソンが りんごの 木の うしろから、ズボンを ひっぱりあげながら でて きました。

「ぼく、ひとりで いって きた。」

「いつ そう いったの？」

「さんかいも いったよ。」

ウソンは てのひらを ひらいて みました。かねの ひもの あとが、まっかに。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ひが かたむく ころ、ロアが さいごの かねを ならしました。

「りんごとり、おしまい！ かごを みて みよう！」

ところが おおきな かごの なかには、りんごが たった いつつしか ありませんでした。ロアの みみが しゅんと さがりました。

「りんごが あるいて いっちゃったんだよ。」

ジソンが また いいました。さっきより おおきな こえで。

ウソンは そこで やっと、さかの したを みおろしました。くさはらが おがわまで、すべりだいみたいに ながく つづいていました。

「よし。ぼくが りんごに なって みる。」

とめる ひまも なく、ウソンは くさはらに よこに ねころびました。

ころ、ころ、ころころころ。

ウソンが さかを ころがって いきます！ ジソンは ヌルを てのひらに のせて、よちよち あとを おいかけます。ピオは はしごの てっぺんから、ありったけの こえで さけびました。

「おにいちゃんが ころがってくー！」

かねが しずかなので、その こえは たにの おくまで、ロアの みみにも よく きこえました。

おがわの そばの くさむらで、ウソンが とまりました。ぐるぐる まわって いた そらが もとの ところに もどると、りんごが みえました。とても、とても たくさん。

ひらたい いしの うえに、あかい りんごが ちいさな やまのように つみあがって いました。その てっぺんに、子リスが

りょうてを こしに あてて すわって いました。ロアの おとうとです。

「やっと だれか きた！ さっきから よんでたんだよ。かごの そこに あなが あいてるって。でも うえは からん からんばっかりでしょ。だから ぼくが つんで おいたの。」

「ぼくも…… いったよ。かごの そこに…… あな。」

ヌルが ジソンの てのひらの うえで、おひるに はじめた ことばを やっと いいおわりました。

ピオも ぴょこん ぴょこんと とびおりて きました。

「ぼくも いったよ！」

「ぼくは おしっこ したいって いったよ。」

ジソンまで ひとこと つけたすと、ウソンは くすくす わらって いるうちに、みみが あかく なりました。

さいごに ロアが おりて きました。しろい しっぽの さきが、じめんに つくほど たれさがって いました。

「みんな、いって くれてたのね。わたしの おとうとまで。うえでは ひとつも きこえなかった。」

「かねを ならしてる ときは、かねの おとしか きこえないんだよ。ぼくも さっき ならして みたから わかる。」

ウソンが ひりひりする てのひらを こすりながら いいました。

「それでも わたし、かねを ならすの、ほんとうに すきなの。」ロアが いいました。

子リスは へんじの かわりに しっぽで じめんを ぽんと たたくと、りんごの やまの うえに はらばいに なって、いしに かたほうの みみを あてました。ロアは それを じっと みて いましたが、くさはらに ぺたんと はらばいに なって、かたほうの みみを じめんに ぴったり つけました。

「ならす まえに、まず みみを あてて みる。いち、に、さんって かぞえる あいだ。」

ジソンも まねして はらばいに なり、じめんに みみを あてました。

「おにいちゃん、じめんが ごろごろ いってる。」

「それは おがわだよ。」

「じめんだもん。」

かごの あなは 子リスの かかりに なりました。ふさふさの しっぽを すぽんと はめて すわると、ぴったりでした。きんじょの みんなが りんごを いれると、子リスは りんごに うもれて、あたまだけ だして けらけら わらいました。

「ロアは キツネなのに、どうして きみは リスなの？」ジソンが くびを かしげました。

「おねえちゃんに くっついて まわるから、おとうとなんだよ。」

ジソンは へんじの かわりに、ウソンの そでを ぎゅっと つかみました。

ゆうがた、ウソンは コンイの ちずを だしました。やまの むこうの いけの となりに おかを かいて、てっぺんに かねを かきました。かねを あんまり おおきく かいたので、おかが ぼうしを かぶって いるみたいでした。ロアが えんぴつを うけとって、かねの まわりに きょう きた ともだちの なまえを かきました。いちばん さいしょに、いちばん おおきく、おとうと。

ふたりを みおくる ロアの こしひもで、ちりん、ちりん。おがわの おとより ちいさな、ちいさな ベルです。

その よる、ピオと ヌルは きみどりの おうちに とまって いきました。よにんで まどべに ならんで ねころぶと、おかの うえに まるい お月さまが みえました。

ウソンが りょうてを あわせました。

「お月さま、きょう、ちいさな こえが ひとつも きこえませんでした。ぼくも かねを ならして いる とき、ジソンの こえが きこえませんでした。」

「おしっこ したいって いったのに。」

ふとんの なかから ジソンが くちを はさむと、ピオが ぷっと わらいを のみこみました。

ウソンは ゆかに かたほうの みみを ぴったり つけました。めも ぎゅっと つぶりました。いち、に、さん。へやの なかが とても しずかに なりました。

ぎゅるるるるる。

「お月さま、いまのは ジソンの おなかです。」

ピオが ころころ ころがって わらいました。ジソンは おなかを かくして けらけらけら。

わらいが やっと おさまった とき、おかの むこうで かねが なりました。

からーん。

たった いっかい。なる まえに、いち、に、さんと かぞえる くらい しずかでした。

「ロアだ。」ウソンが ささやきました。

「みみ、あててたね。」

ジソンが もっと ちいさな こえで ささやきました。それから ふとんの なかで もぞもぞ。

「おにいちゃん、おしっこ したい。」

ウソンは ふとんを けとばして、がばっと おきあがりました。

スープが エプロンを きたんだって



ロアの かねが なった つぎの 日の あさ、ウソンと ジソンは パンを もらいに ボリの おうちへ いきました。ボリは かぜを ひいて いました。

「はっくしょん！ だいじょうぶ。はっくしょん！ ちっとも いたくないよ。はっ、はっくしょーん！」

ボリは ふとんを ぐるぐる まきつけた まま、まず パンを こねる ボウルを さがしました。ウソンが その ボウルを せなかの うしろに かくしました。

「ボリは いつも ぼくたちの ごはんを つくって くれるでしょ。きょうは ぼくたちが ボリの スープを つくるんだ。」

ふたりは ボリを ふとんごと ねかせて おいて、きみどりの おうちへ はしって かえりました。そして きみどりの おうちの だいどころで、はじめて ふたりだけで スープを つくりました。火は つけませんでした。みずを いれて、じゃがいもを いれて、にんじんを いれて。ウソンが しおの つぼを えいっと もちあげました。

「ぼく、しってるよ。しおは たくさん いれるほど おいしいんだ。」

ぱらぱら、ぱらぱら、どさーっ。

ジソンは じゃがいもを かわごと ぽちゃんと いれて、みずを じぶんの シャツに はねかしました。スープを ひとくち すくって のむと、したを べーっと だしました。

「うえー。これ、なみだの あじ。」

シャツは しみだらけ、おなべの なかは しょっぱい みず。

その とき、ながい みみが ふたつ、まどの そとに にゅっとでて、きえました。あっと いう まに、ノウサギが いっぴき、だいどころの いりぐちに きて いました。かたほうの みみには、ボリの おうちの ものほしの くつしたまで ひっかかっていました。

「ぼく、タル！ おしらせを はこぶ ウサギだよ！」

タルは くつしたも とらずに、いっきに しゃべりだしました。

「かわべに シカが きたんだって。エプロンを きた シカ。スープを にるんだって。ちがう、スープを こぼしたんだって。ちがう、スープが エプロンを きたんだって。」

「スープ？」

ふたりは しょっぱい おなべを ふたりで もって、かわべへ いきました。タルも ぴょんぴょん ついて きました。

シカは やなぎの 木の したに いました。みんなが あまり いかない ところです。かぜが いつも そっちにだけ ふきます。

（やなぎの 木が あさと ゆうがたに、かみの けを そっちへ とかすから だそうです。）

それに そこには、ちいさな スカンクが よく ひとりで すわって います。スカンクは びっくりすると、においが でます。

その スカンクの すぐ となりで、はじめて みる シカが おなべを かけて すわって いました。あちこち つぎはぎした、ふるい エプロンを つけて。

「いらっしゃい。ぼくは イデン。」

イデンは ジソンの シャツを みると、にっこり わらいました。

「きみも エプロンを きてるね。」

おたまを もって たちあがろうと した イデンが、エプロンの ひもを ふんで よろっ！ スープが ぴちゃっと はねて、エプロンに しみが ひとつ ふえました。ジソンは しみの ひとつひとつを、ゆびで つんつんと さしました。

「これは？」

「きのう こぼした スープ。」

「これは？」

「おととい こぼした スープ。」

「これは？」

「それは いまの。」

ジソンが おなかを かかえて わらったので、スカンクが びっくりして しっぽを ぴんと たてました。

ぷうっ。

においが やなぎの 木の したを まあるく つつみました。イデンは めを ぱちくり させた だけでした。

「きょうは かぜが こいね。」

ウソンが はなを つまんだ まま、しょっぱい おなべを さしだしました。

「ボリの スープなんだけど、しっぱいしちゃった。」

イデンが ひとさじ すくって のむと、めを ぎゅっと つぶって、また あけました。

「しょっぱいね。じゃがいもを もっと いれれば いいよ。しょっぱいのは じゃがいもが たべて くれるから。」

イデンは しょっぱい スープを じぶんの おなべに あけて、かわの みずを ひしゃくで いっぱい たして、じゃがいもを どっさり とりだしました。

「火は ぼくが みて いるね。きみたちは 火から ふたあしはなれて、じゃがいもを あらって くれる？」

イデンは おたまを にぎって、火の そばに ぴったり すわりました。ふたりが じゃがいもを あらうと、イデンが うけとって ぽちゃん。ジソンが あらう みずを ばしゃっと させる たびに、シャツの しみが ひとつずつ ふえました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

スープが ぐつぐつ にえる ころ、どての うえから だれかが タルを よびました。おかに すむ ノウサギの ともだちでした。

「タル、そこで なに してるの？ その シカ、だれ？」

タルの みみが ぴくっと しました。かたほうの みみが はんぶん おれて、また たちました。

「ぼく？ ぼく、あんな こ しらない。」

タルは ともだちに ついて、おかの ほうへ ぴょんぴょん いって しまいました。

「さっき いっしょに きたのに。」ウソンが いいました。

「くつしたも ひっかけてた。」

ジソンが つけたしました。イデンは なにも いわずに、おたまを おなべの ふちに かけて おきました。

スープが できあがりました。じゃがいもを たくさん いれすぎて、おなべが あふれそうなほど いっぱいでした。

「おおすぎるよ。ボリ ひとりじゃ たべきれない。」

「だいじょうぶ。スープは おきゃくさんの かずを かぞえないから。」

イデンは 火に つちを ぎゅっ ぎゅっと かぶせて けすと、おなべを せなかに しょって、ふたりに ついて ボリの おうちへ いきました。

ボリは ふとんの なかで スープを ひとさじ のんで、もう ひとさじ のみました。

「うん。じゃがいもの あじ。それから、なみだの あじが ちょっぴり。」

ボリは ふたはいも たいらげました。それから くしゃみを はんぶんだけ しました。『はっくしょん』では なくて、『はっ』。

・

ひが しずむ ころ、イデンは ボリの おうちの だいどころで、のこった スープを あたためました。火の そばは イデンがみて、おたまは ふたりに まかせました。ウソンが おたまを ぐるぐる まわすと、イデンが その てに じぶんの てを そっと かさねました。

「ゆっくり。おなべの そこまで、ぐるっと ひとまわり。」

「はやく しちゃ だめ？」

「スープは くるくる まわしながら まつんだよ。いそぐと そこに こげついちゃう。」

ジソンの ばんに なると、ジソンは とても ゆっくり まわしました。あんまり ゆっくりなので、おたまは ほとんど とまって いました。イデンが みみを ぴくっと うごかしました。

「じょうずだね。きみは エプロンさえ あれば もう ばっちりだ。」

その あいだ、まどの そとで ながい みみが ふたつ、でたり ひっこんだり、また でたり ひっこんだり。それから やっと、タルが はいって きました。

「ぼく…… さっき しらないって いった。その ことばが みみに くっついて、とれないんだ。」

ジソンが つまさきだちを して、タルの みみの なかを のぞきこみました。

「なんにも ついてないよ。」

イデンが タルの ぶんの おわんを もう ひとつ だしました。ところが タルは まどから そとへ とびだして、おかの ほうを むいて、いきを おおきく すいこみました。

「イデンが スープを つくったよ！ ウソンと ジソンが しおを こぼしたよ！ しょっぱいのは じゃがいもが たべたよ！ それから…… ぼく、イデンを しってるよ！」

さいごの ことばは、おかの むこうまで とどくほど おおきな こえでした。タルは それから やっと もどって きて、イデンが だして おいた おわんを りょうてで うけとりました。

つぎの 日の あさ、ふたりが やなぎの 木の したへ いって みると、イデンは おなべを せなかに しょって いました。

「どこ いくの？」

「とおくへ。いって みたい ところが あるんだ。」

「こんど いつ くるの？」

ジソンが エプロンの すそを ぎゅっと つかみました。

「ずっと さきだよ。おしらせは タルに たのんで とどけるね。」

イデンは エプロンを はずして きれいに たたみ、ジソンの うでに のせて くれました。

「これは おいて いくね。だれかが スープを つくる ときに きて。」

すそが くさはらに ずるずる ひきずられました。イデンが ひもを ジソンの こしに にかい まいて、むすんで くれました。

「ポケットも みて。」

ポケットの なかから、あきの たねが ふたつぶ、ころころっと ころがりでて きました。

「どこに うえるの？」

「きみたちが きめて。よく いく ところが いいな。そう したら、めが でるのを いちばん はやく みられるからね。」

イデンは みみを ぴくっと うごかして わらうと、かわに そって ゆっくり あるいて いきました。せなかの おなべが かたん、かたん。その おとが すっかり きこえなく なるまで、ふたりは そこに たって いました。

その 日の ゆうがた、ジソンが えらんだ ところは、きりかぶテーブルの よこでした。まいにち ごはんを たべに くる ところですから。まいばん つきあかりが たまる ところです。

ジソンは ゆびで つちを ちょんちょんと ほって、たねを ひとつぶ すぽんと いれました。のこりの ひとつぶは、エプロンの ポケットに もどしました。

「なまえも よんで あげなきゃ だめ？」

ウソンが きくと、ジソンは かおも あげずに こたえました。

「めが でたら。」

ジソンは つちを りょうてで ぽんぽんと かぶせました。ふとんを かけて あげる ときみたいに、とても やさしく。

ウソンは テーブルに コンイの ちずを ひろげて、きみどりの おうちに ちかい かわべに、やなぎの 木と まるい おなべを かきました。ジソンは おなべから、かわの せんを すうっと ひきました。イデンが あるいて いった かわです。せんは ほそながい かみの はしを こえて、あたらしく つないだ かみ

まで つづきました。それから ビーズクッションの したに もぐって でて きて、すべりだいの したで やっと とまりました。

ビーズクッションの うえで、クマタが めも あけずに ききました。

「ぼく いま、かわ？」

「うん。いちばん ふかい ところ。」

いつつめの にわ

かえりみち

たからばこの しつもん



「また この みち？」

ウソンが ちいさな いしを つまさきで おしました。いしは おちばの うえを ころころ ころがって、あおい ビーズクッションの まえで とまりました。

「ぜんぶ しってる みちなのに。」

にわから あそびばまで、あそびばから かわべまで。ウソンは めを つぶっても いけると おもって いました。ほんとうに つぶって あるいて みた ことも あります。その 日、すべりだ

いの かいだんに おでこを ごつんと ぶつけてからは、めを あけて あるいて いますけれど。

ジソンは ポケットを ひっくりかえしました。きのう いれたいし、おとといれた どんぐりの ぼうし、すなが ひとつかみ。

「これも ぜんぶ みた やつ。」

テーブルの よこの つちも そうでした。イデンの たねを うめてから とおかの あいだ、まいにち のぞいて みたのに、まだ なにも でて きませんでした。

ビーズクッションには、クマタが じぶんの かたちに へこんだ あとの なかに、ぴったり おさまって ねて いました。

「クマタ、きみは たいくつじゃ ないの？」

「ねころんでれば たいくつじゃ ないよ。」

かきねの むこうから、ニョッキの かおが にゅっと はいって きました。からだは ちょっと おくれて ついて きました。

「あの 森の むこうに、はこが あるんだって。あけると なにかが かわるんだって。」

「なんの はこ？」ジソンが かおを ぱっと あげました。

ニョッキも ピオから きいた はなしです。ピオは「おしえてあげる！」と さけんだ とたん、ぱたぱたっと ひくく とんでいって しまったので、その つづきは だれも しりません。

のきしたから、モリが いとを もった まま でて きました。

「はこだって？ それなら まず、ふたが うえに あくのか よこに あくのかを みて、それから……。」

モリが その つづきを はなそうと した とき、ウソンは もう くつを はいて いました。ひだりと みぎを はんたいに して。

ジソンは コンイの ちずを だきかかえました。ほそながい かみを つないで また つないだので、くるくる まいても ジソンの おなかぐらいの ふとさです。

「これも いく。」

「それ ひろげたら、森が ぜんぶ かくれちゃうよ。」

それでも ジソンは はなしませんでした。けっきょく ちずは ウソンの かばんに さしこまれました。にょきっと とびでた ちずの はしは、ウソンの あたまより てのひら ひとつぶん うえ。

かわべの ほうから ざぶんと、ラッコが あがって きました。おなかの うえに いしの かごを のせて。

「どこ いくの？ ぼくも いく。この こたちも つれて いかなくちゃ。」

かごの ひもには、モリが むすんで くれた まんまるの むすびめが、そのまま ついて いました。

みんなで もんの ほうへ あるいて いくと、うしろから こえが しました。

「ぼくも いきたい。」

クマタが ビーズクッションから からだを おこして いました。とても ゆっくり。あたまから、つぎに かた、それから ながい ながい からだ。

（クマタが すっかり おきあがる あいだに、ヌルは にわを はんぶん わたれます。ヌルが じぶんで はかって みたそうです。）

「それ、ねころんだ まま あけられる？」クマタが ききました。

「いって みないと わかんないよ。」ジソンが こたえました。

ビーズクッションには、ほそながい へこみだけが のこりました。ジソンは その へこみを てのひらで ぽんと たたいて あげてから、あとを おいかけました。

森の おくで、みちが わかれました。あしもとには ちゃいろの はっぱが どっさり。

モリは みぎの みちを しって いると いいました。

「こっちだよ。コンイの ちずに この みちが あった。よこに なにか かいて あったんだけど……。」

ウソンは かばんに さした ちずを ふりかえりましたが、やめました。ここで ひろげたら、わかれみちが まるごと かくれて しまいますから。

ニョッキは ひだりの ほうで みずの おとを ききました。ラッコは かごの なかの いしに たずねました。

「きみは どっちが いい？」

いしは へんじを しませんでした。

ウソンの ゆびは みぎ、ジソンの ゆびは まんなか。まんなかには みちが ありませんでした。ひざまで ある くさむらだけ。

「そこは みちじゃ ないよ。」

「みちだよ。」

「ちがうってば。」

「みちだもん！」

ジソンが あしを どんと ふみならしました。くちが とりのくちばしみたいに つんと とがりました。

クマタは みちばたの くさはらに、あおむけに ねころびました。

「はなしが おわったら よんで。」

ウソンは みぎへ いっぽ ふみだしました。ぼくが しってるんだと いう ことばが、したの さきまで でかかって いました。ところが うしろで ジソンが くちを とがらせた まま、ちっとも うごきません。

ウソンは いきかけて、とまりました。

「ジソンの はなしも きいて みよう。」

ジソンは くさむらの まえに しゃがんで、ひらたい いしのしたを ゆびさしました。木の えだで ひいた せんが ふたつ、ひとつの ところで くっついて いました。

「これは やじるしだね。」モリが いいました。「とがっている ほうが、いけって いう ほう。だから…… くさむらの おく。」

「ほらね。みちでしょ。」ジソンが あごを つんと あげました。

「みちじゃ なくて、いけって いう しるしだよ。」

「それが みちだもん。」

ウソンは いう ことが なくて、はなに しわを よせた だけでした。

ごにんが いっせいに クマタを よびました。あんまり おおきな こえだったので、クマタは びっくりして がばっと おきあがりました。きょう これで にかいめです。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

くさむらを かきわけて でると、まるい あきちが ありました。まんなかに 木の はこが ひとつ。ぴかぴかでも なく、かぎも ない、かどが すりへって まるく なった はこです。

「これが たからもの？ ぼくの かごより ちいさいよ。」ラッコが いいました。

ウソンが ふたを もちあげて みました。びくとも しません。ニョッキが はなの さきで おして みても、モリが はこの まわりを ぐるぐる まわっても、おなじでした。

ウソンが くさはらに ごろんと あおむけに なりました。

「おにいちゃん、なに してるの？」

「クマタみたいに みてるの。」

ねころんで みると、せかいが よこに ねて いました。そらは ひだりに、くさは みぎに。そして はこの いちばん した、じめんに つくか つかないかの ところに、ちいさな 木の わっかが みえました。

ウソンが うでを ぐーんと のばしました。てのひら ひとつぶん とどきません。

クマタが その よこに ながながと ねころびました。ねた まま まえあしを のばして、わっかを ひっぱりました。がたん。

はこは ねころんだ ままでも あけられました。いいえ、ねころばないと あけられなかったのです。ふたが よこに すうっと ひらくと、クマタが その ふたを ささえました。

なかには、おりたたんだ かみが いちまい。ラッコが すみずみまで てを いれて みましたが、いしは ひとつも ありませんでした。

ウソンが かみを ひらきました。おもては まっしろでした。

「うらも みて。」クマタが いいました。ねころんで いる クマタには、うらが さきに みえたからです。

モリが かみを ひっくりかえして、ひともじずつ こえに だして よみました。

「ひとつだけ かえられると したら、なにを かえる？」

ジソンが いそいで ポケットを さぐりました。いしが ひとつ、どんぐりの ぼうしが ひとつ。

「これと とりかえっこ する？」

「その とりかえっこじゃ ないよ。」モリが くすっと わらいました。「じぶんの なかの ひとつだけ。せでも、くびでも、しっぽでも。」

あきちが しんと しずかに なりました。

森の うえの そらの まんなか、お日さまの いらっしゃる ほうから、ひかりが ひとすじ おりて きました。ひかりは まるく あつまった ともだちの あたまの うえに、ひとり ひとり おなじように おりました。

ニョッキは じぶんの くびを みおろしました。モリは フードの ひもを いじりました。ラッコは かごを ぎゅっと だきしめました。クマタは ふたを ささえた まま、あくびを しました。

ウソンは、みちを ぜんぶ しって いる おにいちゃんに なりたいと おもいました。わかれみちで いちども まよわない おにいちゃん。

それから、ジソンの かおを みました。

ジソンの ほっぺには つち。やじるしを さがして はらばいに なった ときに ついた つちです。モリの そでにも、クマタの あしの うらにも つち。ラッコの かごの ふちには、かれたくさの たねが ついて いました。

ジソンが つちの ついた りょうてを ぱっと ひろげました。

「ぼく、いまが いいな。」

ウソンの くちの はしが、ひとりでに あがりました。

「この ままでも いい？」

かみに きいて いるのか、とおくに いらっしゃる お日さまに きいて いるのか、ウソンにも よく わかりませんでした。

「みんなで いっしょに きたのも。」ジソンが つけたしました。

かぜが あきちを ひとまわりして、くさの はを なでて いきました。さらり。まるで「うん。」と いう こえのようでした。あたまの うえの ひかりは、よそへ いきませんでした。

ニョッキは ニョッキの ままで、モリは モリの ままでした。ラッコは あいかわらず かごを だいて いて、クマタも あいかわらず ねころびたいと おもって いました。ほんとうは もう ねころんで いましたけれど。

ウソンは かみを、はじめに おって あった とおりに きちんと おって、はこに いれました。

ジソンが はこを しめようと して、てを とめました。

「て、ださなきゃ。」

クマタが ふたの したから あしを だしました。

「て じゃ なくて、あしだよ。」

モリが ぷっと ふきだしました。ラッコも わらって、かごを おとしそうに なりました。

ジソンが ふたを しめました。
ぱたん。

ラッコの ほどけた かご



かえりみちは クマタが えらびました。

「あっちは ねころべる ところが あるよ。」

クマタが ゆびさした ほうは、くる ときに とおった みちでは ありませんでした。ひくい おかを ひとつ こえて いく、かれくさが ふかふかに しきつめられた みちです。

モリが おかの てっぺんを じっと みあげてから いいました。

「あの おかを こえたら、かわべに つながって いる はずだよ。たぶん。」

モリの くちから『たぶん』だなんて！ ニョッキが くびを よこに かしげて わらいました。

ともだちが ならんで あるきました。ラッコは れつの いちばん うしろに くっついたり はなれたり。かごが おもくて、どうしても おくれて しまいます。

（森の おかは、のぼる ときの ほうが おりる ときより ながく なります。のぼって くる ともだちの かおを、ながく みて いたいからだそうです。）

おかを はんぶんほど のぼった ときです。ラッコの あしが、おちばの なかに かくれた 木の ねっこに がつんと ひっかかりました。かごが ぐらっと かたむいて、モリが むすんで くれた まんまるの むすびめが、するするっと ほどけました。

がらがらっ、ころころころ！

いしたちが おかの したへ ころがって いきます。まるい いしは びゅんびゅん、ひらたい いしは ぴょんぴょん、かどの ある いしは なんかいか ころがっては ぴたっ、ぴたっ。

モリが ほどけた ひもの さきを のぞきこみました。

「それはね、木の ねっこ むきの むすびめじゃ なかったんだ。」

ラッコは からっぽの かごを もった まま、たって いました。

「みんな いっちゃった。」

「みんなじゃ ないよ。」

ジソンが、じぶんの あしの こうに きて とまった いしを ひとつ ひろいあげました。

おかの したには クマタが いました。ねころべる ところを みつけるなり、もう そこに ながながと ねて いたのです。ころがって きた いしたちは、クマタの おなかや わきばらに こつん、こつんと ぶつかって、ひとつずつ とまりました。

「ねころんで いるのも やくに たつね。」

クマタは めを つぶった まま いいました。こえが なかなかとくいそうでした。

みんな おかの あちこちに ちらばって、いしを ひろいました。モリが ひろって きたのは、かどが ひとつ かけた ひらたい いしでした。かけた かどには、ももいろの こいし まめつぶが、まだ はんぶんだけ はまって いました。

「かぜあなだ！」ジソンが てを たたきました。

クマタの おなかの うえには、まるくて くろい いしが ちょこんと のって いました。

「それは『まいごの 日』。」ラッコが いいました。

その 日、ラッコは そこに いませんでした。それでも ぜんぶ しって います。ピオが 森じゅうに はなして まわったからです。

ウソンの みみが あかく なりました。

「ぼく、あの 日 ないて ないよ。」

「ないたよ。」ジソンが いいました。

「……ほんの ちょっぴり。」

ウソンが おやゆびと ひとさしゆびの あいだを、つめぐらい あけて みせました。それから いしを ラッコに わたしながら、ピオの こえを まねしました。

「ウソン、ここに いたよー！」

あんまり そっくりなので、みんな おなかを かかえて わらいました。クマタの おなかの うえの ちいさな いしまで、わらいに あわせて ぽんぽん はねました。

「あの 日の みち、ちずに あるよ。」

ジソンが おにいちゃんの かばんから ちずを ひっぱりだしました。ウソンは ちずを クマタの おなかの うえに ひろげました。あの 日の みちは、つちの ものおきの よこに つなげた ポケットの ちずに ありました。がたがたの まるの なかの きいろい はな、『ねっこだけ』、やぶの すきまに ジソンが かいた ちいさな やじるし。

おなかの うえが おもく なった クマタが、かたほうの めを あけました。

「ぼく いま、テーブル？」

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ジソンは くさの あいだから、つるつるした しろい いしを みつけました。ところどころ しろい こなが ついて いました。

「それは『しょっぱりん』。うみから つれて きたんだ。」

ジソンは それを きくなり、したを ぺろっと だして いしを なめました。

「しょっぱい！」

ラッコが おなかを かかえて ころころ ころがりました。かごが からっぽなので、あんしんして ころがれました。

その あいだ ニョッキは、とげの ある やぶの まえに ふせて いました。ほかの ともだちが いしを みっつずつ ひろう あいだ、じっと うごかずに なにかを のぞきこんで いました。

「ニョッキ、なに みてるの？」

「これが いしなのか どんぐりなのか、みて いる ところ。」

ニョッキは いきを じゅっかい するほど もっと みてから、やっと やぶの したへ くびを ぐーんと のばして、それを くわえて きました。つるつるの どんぐり！

「ほらね。ながく みて いると わかるんだよ。」

ジソンが ニョッキの まえあしに だきつきました。

「ニョッキ、のせて。あし いたい。」

「森が おわったら のせて あげる。森には 木の えだが おおすぎるよ。」

つぎの いしで、ちょっとした ことが おきました。ジソンが まるくて でこぼこした いしを もちあげました。

「これは じゃがいも。」

「それは ほんとうは『くもの かけら』なんだけど。」

「じゃがいもだよ。」

「くもの かけらだよ。」

「じゃがいもだってば！」

ジソンが ほっぺを ぷうっと ふくらませて、いしを せなかの うしろに かくしました。

ラッコは まえあしで ほおづえを ついて かんがえました。くもの ことも かんがえたし、じゃがいもの ことも かんがえました。

「じゃあ、くもじゃがいも。」

ジソンの ほっぺから、くうきが ぷしゅーと ぬけました。

「……いいよ。」

いしの なまえが、また ひとつ ながく なりました。

ラッコが かごの なかを のぞきこみました。

「まだ ぜんぶ きて ない。だれかは わからないけど、かごが かるいんだ。」

モリが 木の えだで、おかに せんを すっ すっと ひきました。

「ひとつめ、ますに わける。ふたつめ、ぜんぶ みた ますには 木の えだを さす。みっつめ、せんの うえに かかった いしは……。」

クマタは きいて いる あいだに、いちど ねむって また おきました。それでも みんな ますの とおりに さがしました。ほんとうに あと ふたつ でて きました。ひとつは かれはのしたに、ひとつは ニョッキの あしの ゆびの あいだに。

それでも まだ ひとつ たりません。ラッコは おかの したのほうに むかって、てを ふりました。

「あとで むかえに くるね。」

こんどは かごの ひもを むすびなおす ばんです。モリが てを のばしましたが、ラッコは ひもを ぎゅっと にぎりました。

「ぼくが やって みる。」

ひとまき まいて、とおして、ひっぱりました。むすびめが するっと ぬけて しまいました。もう いちど まいて、こんどは にかい とおしました。むすびめが げんこつぐらいの おおきさに なりました。ラッコは したの さきを ちょっぴり だしました。

ジソンが ラッコの まえに しゃがみました。

「おにいちゃん、むすびめが わらってるみたい。」

ほんとうに、わっかが みっつ がたがたに たれさがった かたちが、わらって いる かおみたいでした。

ウソンは はやく うちに かえりたいと おもって いました。それでも ラッコの となりに すわって、ひもの かたほうの はしを もって あげました。ジソンも はんたいがわの はしを もちました。

「ひっぱって いい？」

「うん！」

みっつの てが いっぺんに ひっぱると、でこぼこの むすびめが できました。モリから みると、どう みても また ほどけそうな むすびめです。モリは ゆびさきで むすびめを いちどなでた だけでした。

「これは『みんなの むすびめ』。」

ラッコは いしを ひとつずつ かごに いれながら、うたを うたいました。

「はいって はいって、きょうは ぼくと いこう。 でてきてでてきて、あしたは きみ おやすみ。」

さんかいめからは ジソンが いっしょに うたいました。ごかいめからは ウソンも。じゅっかいめぐらいには、クマタまで ねころんだ まま はなうたで ついて きました。うたの ことばは ひとつも あって いませんでしたけれど。

ともだちは また おかを のぼりました。ラッコは なんぽか あるく たびに、かごの なかを のぞきました。まだ きて いない いしが ひとつ あるからです。

ジソンの ポケットも ふくらんで いました。いつも ふくらんで いる ポケットなので、だれも のぞいて みませんでした。ジソンも。

ジソンは ラッコの すぐ うしろで おかを のぼりました。あるく たびに、ポケットが かちゃ、かちゃ。

ジソンが さきに はしった みち



おかの てっぺんに たつと、したに みなれた ものが みえました。きみどりの やね、その まえの にわの はしの きりかぶテーブル、あそびばの すべりだい、にわの すみの あおい ビーズクッション。ボリの おうちの だいどころの えんとつからは、しろい ゆげが ほそく のぼって いました。

かぜが おかを のぼって きました。パンの においが まじって いました。

モリが いきを ととのえながら、せつめいを はじめました。

「ここからは みちが ふたつ あるんだ。ひだりは ちょっと きゅうで、みぎは……。」

ジソンが ウソンの てを はなしました。

だれかが よぶ まえでした。「いこう」と いう ことばも、「ジソン、こっちに おいで」と いう ことばも、まだ でて いない うちでした。

ジソンが はしります。

ぼうしの つばが ぴょこぴょこ はねます。ちいさな あしが かれはを ふむ たびに、かさかさ。

ウソンは しばらく ぽかんと たって いました。

ジソンは いつも いちばん うしろに いた 子です。みんなが でかけた あとで やっと まつぼっくりを ひろい、ありの ぎょうれつを のぞきこみ、おにいちゃんの そでを ひっぱって いた 子。その ジソンが、いま いちばん まえに います。

ウソンが ぷっと わらいだしました。そして はしりました。

うしろで モリの せつめいが ぷつんと とぎれました。

「あれ、ジソンは もう きめたんだね！」

ウソンは あしが ながいので、なんぽかで ジソンの すぐ うしろまで おいつきました。てを のばせば ぼうしの ひもに とどくほど ちかくでした。

ウソンは てを のばしませんでした。

いっぽ うしろで、ただ はしりつづけました。わらいが なんども こぼれて、すぐに いきが きれました。

ジソンは いちども ふりかえりませんでした。おにいちゃんが うしろに いる ことを、もう しって いるみたいに。

まえを はしるのは、いつも ウソンの やくめでした。きょうは ウソンの めの まえで、ジソンの ちいさな かかとが かわりばんこに ぴょこぴょこ うごきます。それを みて いるのが、ふしぎと たのしかったのです。

さかみちの おわりで、ジソンが いしに つまずいて、まえに ばたんと ころびました。ウソンが「だいじょうぶ？」と きく まえに、ジソンが さけびました。

「ぼく、ひとりで。」

ジソンは りょうてを じめんに ついて たちあがりました。ひざに ついた つちは はらいも しませんでした。

おかの したで、みちが また わかれました。ジソンは ひだりを むいて、それから みぎを むきました。

「……こっち だったっけ？」

ウソンは ふきだしそうに なりました。どこかで なんども きいた ことばだったからです。

「そう、そっち。」

ジソンは また はしりだしました。おちばの やまを がさっと とおりぬけ、かたほうの めで ウインクする きいろい はなの まえも、そのまま とおりすぎました。

さいごの まがりかどの まえで、ジソンが とまりました。その かどを まがれば、すぐ きみどりの おうちの にわです。

ジソンが ふりかえりました。ウソンが すぐ うしろで ひざに てを ついて、はあはあ いって いました。それより ずっとうしろ、おかの とちゅうに、ともだちが まめつぶぐらいに ちいさく みえました。

「まだ みんな きて ない。」

ジソンは みちばたの ふとい 木の ねっこに、どすんと すわりました。ウソンも その となりに どすん。

おかでは、ラッコが また たちどまって いました。かごを おろして、ひもを いじって います。『みんなの むすびめ』が もう ゆるんで しまったようです。モリが その そばに しゃがんで まって いて、クマタは その よこで ねころんで います。ニョッキは くびを ながーく のばして こっちを みて いましたが、あたまを ふりました。ての かわりに あたまで するあいさつです。

「おにいちゃん、はやく おいでって いおうか？」

まえの ウソンなら、もう りょうてを ぶんぶん ふって いたでしょう。はやく おいで、はやく。

「ラッコ、いま むすびめを むすんでる ところだよ。」

「うん。」

ジソンは あしを ぶらぶら ゆらしました。ウソンは くつのさきで つちを ちょんちょん ほりました。まつのは、はしるより むずかしい ことでした。

＊＊＊

ジソンが 木の えだを ひろって、じめんに えを かきました。ほそながいのを ひとつ、くびが とても ながいのを ひとつ、フードを かぶった まるを ひとつ、かごを かかえた まるを ひとつ。それから ちいさな まるを ふたつ ならべて。

「これは おにいちゃんと ぼく。」

「ぜんぶで ろくにんだね。」

「うん。ここに みんな きたら、ろくにん。」

きりかぶテーブルの ほうから、かねの おとが いっかい なりました。ドゥドゥが ならす ゆうがたの かねです。ジソンの おしりが もぞっと うきあがりました。

「ごはんだ。」

それでも ジソンは たちあがりませんでした。ウソンの おなかが ぐうと なりました。ウソンも たちあがりませんでした。

なんぽか いけば パンが あるのに。はんたいがわには ともだちが いるのに。ウソンは いっそ おかの ほうを むいて すわりなおしました。ジソンも おにいちゃんの まねを して すわりなおしました。

ラッコが かごを もって たちあがるのが みえました。でも また とまりました。クマタが おきないからです。

ウソンは りょうてを ラッパみたいに くちに あてました。はやく おいでと いいかけて、ちがう ことばが とびだしました。

「ぼくたち、ここに いるよー！」

おかの うえで、ニョッキが くびを いちど おおきく ふりました。クマタも やっと、ねころんだ まま まえあしを あげました。

「わかったー！ むすびめ ひとつだけ！」ラッコの こえが かぜに のって とどきました。

「みっつだよ、みっつ！」モリの こえも ついて きました。

ジソンが りょうてで くちを おさえて わらいました。

まって いる あいだに、ジソンが ポケットに てを いれました。きのう いれた いしが でて きました。それから、もう ひとつ でて きました。はいいろの うえに しろい すじが いっぽん はしって いる、てのひらに すっぽり おさまる いしです。

「あれ？ おにいちゃん、ラッコの いし、ここに あった。」

きに いった ものを みると、ジソンの ては ジソンより さきに ポケットへ いきます。

「ラッコが あとで むかえに くるって いってた いしだ。」

「うん。もう むかえに こなくて いいね。」

ジソンは いしを りょうてで ぎゅっと にぎりました。ラッコが きたら すぐ わたせるように。

ひが にしへ すこし かたむきました。まがりかどの みちに、ふたりの かげが ほそながく ねそべりました。

まがりかどに いちばん さいしょに ついたのは ニョッキでした。あしが ながいので、なんぽかで つくからです。つぎはモリと ラッコ。クマタは いちばん さいごに、あくびを しながら あるいて きました。

「さきに いっても よかったのに。」ラッコが いきを はずませながら いいました。

「まってたよ。」

ジソンが てを ひらきました。ラッコの めが まんまるに なりました。

「『おむかえ』だ！ かわべに ともだちが くる まえに、ぼく いつも この いしを さきに だして おくんだ。いって まって いる いしだから、おむかえ。」

ラッコは おむかえを かごの いちばん うえに のせて、ジソンを じっと みつめました。

「きみも きょうは おむかえだね。」

ジソンは なんの ことか わからなくて、ほっぺを かいた だけでした。ほっぺの つちが もっと ひろがりました。

モリが ウソンを みました。

「さっきの『ぼくたち、ここに いるよ』って こえ、おかの うえまで よく きこえたよ。ピオの こえより おおきかった。」

ウソンは ちょっと むねを はりました。はなの あなが ぴくぴく ふくらみました。

クマタは じめんに かかれた むっつの えを みおろしました。ほそながいのが じぶんだと、すぐに わかりました。

「ぼく、こんなに ながい？」

「うん。もっと ながいよ。」

ろくにんで まがりかどを まがりました。ひとりも かけずに。

まず あそびばの すべりだいが みえて きました。ニョッキが すべりだいの よこに ふせると、てっぺんに あごを ちょこんと のせました。

「森、おわったよね？ やくそくどおり のせて あげる。」

ジソンが すべりだいの かいだんを たたたっと のぼりました。てっぺんで ニョッキの くびに またがると、しゅーっ！ くびを すべって せなかまで、せなかから しっぽの さきまで。くさはらに どすんと しりもちを ついても、けらけら わらって います。

「おにいちゃん、せかいで いちばん ながい すべりだい！」

ウソンも かいだんを かけのぼりました。しゅーっ、どすん。

きりかぶテーブルの まわりは、もう わいわい がやがや。テーブルの よこで、ドゥドゥが しょうたいじょうを にまい、あたまの うえで ふって いました。

「きた！ みんな きた？ まだの こ だれ？ ラッコは？ クマタは？」

ジソンが くさはらから ぱっと おきあがって、また はしりだしました。こんどは ウソンも いっぽ まえに でて、ジソンの すぐ となりを はしりました。

「おにいちゃん、どっちが はやい？」

「ふたりとも！」

さきに ゆずる せき



きりかぶテーブルの まわりは、わいわい がやがやでした。ウソンと ジソンが これまでに であった ともだちを、ドゥドゥが みんな よびました。しょうたいじょうを もう ぜんぶ だして おいたのです。いえを しって いる ところには タルが とどけて、いえの わからない おきゃくさんの ぶんは、あの つきよに かぜに あずけて。ひにちの ところには『まんげつの日、ひが かたむいたら』。ウソンと ジソンが はこを さがしに いった 日が、ちょうど その 日でした。

テーブルの かたほう、ひじかけが つるつるに すりへった あの いすは、きょうも あいて いました。その まえには、おおきくて まるい コップが ひとつ。

コップの よこの テーブルの かどには、ヌルが くっついて いました。

「ぼく、あさから ずっと こっちに むかって たんだよ。」

ジソンは まず テーブルの よこの つちを のぞきこみました。あさ でかける ときは つちだけ だったのに、ちいさな ふたばの はっぱが にまい、ひょっこり かおを だして いました。

「おにいちゃん！ ぼくたちが いない あいだに でたよ！」

それから ウソンの かばんから ちずを すぽっと ひきぬきました。ほそながい かみを つないだ ちずは、テーブルを ぜんぶ おおっても たりなくて、くさはらへ、ビーズクッションの したへと ながれおちました。いちばん さいごは、ジソンが ひいた かわの せん、イデンが あるいて いった かわです。

「おきゃくさんたち、ここから くるよ。」

ジソンの ゆびが くりのきの おうちに さわると、アナグマの おばあさんが きました。おばあさんの てには、よこに くぼみの ある コップが ありました。

「ぼくの コップだ！」

「そうとも、おまえさんの コップだ。きょうは ここに すむんだよ。」

ジソンの ゆびが すなはまの ふねに さわると、アルが きました。アルは テーブルに つくなり、いすを ひとつ ゆすってみました。

「あしが いっぽん ぐらぐらだね。」

アルは その あしを すぽっと ぬいて、くさはらに すわりこみ、あたらしい あしを けずりはじめました。

ジソンの ゆびが やまの むこうの いけに さわると、セオンと ちいさな みずどりが きました。木の おわんを ひとつ、ふたりで いっしょに もって。

ジソンの ゆびが おかの うえの かねに さわると、ロアが きました。ちいさな ベルが ちりん、しっぽの さきには おとうとの 子リスが ぶらーん。

ジソンの ゆびが やなぎの 木に さわると、タルが きました。

「イデンから おしらせ！ めが でたら なまえを つけてって！」

その うしろから、ちいさな スカンクが だまって ついて きて、テーブルの いちばん はしの くさはらに、しっぽを おとなしく おろして すわりました。おばあさんの ほかは、あたらしい おきゃくさんたちは みんな、いすより くさはらの ほうが らくだそうです。

ボリが ごはんの おなべの ふたを あけました。コンイは おわんを おく ところを つくろうと、ちずを はしから くるくる

まきました。テーブルの うえには、よるの ちずの すみっこを ひとつだけ のこして おきました。ジソンが まるい かおと まるい コップを かいて おいた すみっこです。

「ごはんに きらきら かけて！」

ボリが のりの こなの きらきらを ぱらぱら かけて あげると、ごはんつぶの あいだが きらきら。ジソンが スプーンを さっと もちあげました。ひとくちめが くちに はいる、すぐまえでした。

がさがさっ。

テーブルの あしの うしろ、くさむらの はしから、まるい かおが ひとつ ひょこっと でて、ひょこっと ひっこみました。

ジソンは スプーンを もった まま、ぴたっと かたまります。

「おにいちゃん。あの こ。」

ジソンの スプーンの さきが、ちずの すみっこを さします。まるい かお、てんが ふたつ、わらって いる せんが いっぽん。

「ぼくが かいた こ。」

くさむらから、まるい かおが また でて きました。ジソンよりも ちいさな タヌキです。めの まわりに くろい もようが あって、しっぽは からだより ふといくらいです。りょうてに

は、くしゃくしゃの かみを いちまい、ぎゅっと にぎって いました。

ドゥドゥが おしゃべりを ぴたっと とめました。

「それ、かぜに あずけた ぼくの しょうたいじょう？」

ドゥドゥは くしゃくしゃの しょうたいじょうを、テーブルの うえに ぴんと ひろげました。よつゆで にじんだ じが、そのまま のこって いました。ドゥドゥは よむ まえに、いつもの ことばから いいました。

「どこで？ いつ？ だれと？ それと、その まえに もう ひとつ！」

それから ゆびで いちぎょうずつ なぞりました。

「きりかぶテーブル。ひが かたむいたら。みんなで。」

いちばん したの ぎょうで、ドゥドゥの ゆびが とまりました。

「おそく きても いいよ。」

タヌキが とても ちいさな こえで いいました。

「おそく きても いいって かいて あったから、おそく きたよ。」

ドゥドゥの はなの あなが ぴくぴく ふくらみました。

「そう！ ぼくが そう かいたんだ！」

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

ところが、すわる いすが ありませんでした。

ウソンが いすを かぞえて みました。ゆびが たりなくて、ジソンの ゆびも、ラッコの ゆびも かりました。あいて いる いすは、あの いす ひとつだけです。あしの ぬけた いすは、アルの よこに ねて います。たって いるのは タヌキ、それと ドゥドゥ。

「ドゥドゥ、きみは？」

「え？ ぼく？ ぼくの いす？ どこ だろう？」

ドゥドゥが めを ぱちくり させました。ともだちの しょうたいじょうは ぜんぶ かいたのに、じぶんの せきは いちども かぞえて いなかったのです。

ウソンが いすから ぴょこんと おりました。いすを ドゥドゥの ほうへ おして あげて、あいて いる あの いすの よこの くさはらに、どすんと すわりました。

「ぼく、くさはらが すき。」

くさはらに すわると、テーブルの かどが ちょうど あごの まえでした。

のこるは タヌキ。ひじかけの すりへった あの いすは コップと いっしょに あいて いましたが、あの いすを もって こようと いう ともだちは いませんでした。

「ひとつ あたらしく つくって あげる。あしたの あさには できるよ。」アルが かなづちを もちあげて みせました。

「あしたじゃ おそすぎるよ。ごはんが さめちゃう。」ラッコが くびを よこに ふりました。

ジソンが いすから するりと すべりおりました。スプーンはまだ てに もった ままです。のこりの かたてで じぶんの いすを うんうん ひっぱって、おにいちゃんの よこの くさはらに おきました。

「ここに すわって。」

タヌキが いすを みあげました。すわる ところは、タヌキのあたまより たかい ところに ありました。

「やまみたいな いす。」ジソンが いいました。

ウソンが ぷはっと ふきだしました。そして、いすの すわるところが、ちょうど じぶんの むねの あたりに ある ことにきが つきました。

「あれ？ これ、テーブルだ。」

ウソンは じぶんの ごはんの おわんを いすの うえに のせました。ジソンも きらきらごはんの おわんを その となりにのせました。ボリが いそいで ちいさな おわんに ごはんを よそって、みっつめの ところに おいて くれました。

「いすに ごはんを のせるの？」ドゥドゥが ききました。

「きょうは テーブルなの。」

タヌキが いすの あしの うしろから、いっぽ でて きました。また いっぽ。それから ウソンと ジソンの あいだの くさはらに、すぽっと はいって すわりました。

「コップ！」ジソンが ちずの すみっこを ゆびさしました。「コップも かいたの。この こに あげる コップ。」

ボリが オーバーオールの ポケットを さぐりました。どんぐりぐらいの ちいさな コップが でて きました。ジソンが そのコップを タヌキの おわんの よこに、きちんと おきました。もちてまで タヌキの ほうに むけて。

それを みて、ニョッキが くさはらに あごを おろしました。ラッコが かごを だきかかえて おりて きて、クマタは ビーズクッションごと ひっぱられて おりて きました。ひっぱったのは ボリでした。モリは あいた いすを ひとつずつ テーブルの うしろへ さげました。あの いすだけは のこして。くさはらは だんだん せまく なりました。

モリが タヌキの まえに しゃがみました。

「ひとつめ、タヌキは みずべで、まえあしを つかって たべものを あらって たべる。ふたつめ、めの まわりの くろい もようが どうして できたかと いうと…… あ、きみの なまえ、まだ きいて なかったね。」

タヌキが くちを もごもご うごかしました。でも、アルのかなづちの おと、タルが「おしらせだよ、おしらせ！」と さわぐ こえ、ピオが「きいた？ ぼく ここ！」と いう こえに、ぜんぶ かきけされて しまいました。

ロアが ちいさな ベルを さっと もちあげました。

ちりん！

みんな びっくりして、くちを ぎゅっと とじました。かなづちも とまり、タルも とまり、ピオも くちばしを ぴたっと とじました。

しずかに なった すきに、タヌキが ジソンの みみに くちを よせて ささやきました。

ジソンが めを まるく して、にっと わらいました。

「なんて？」ウソンが ききました。

「ないしょ。」

ジソンは その なまえを、だれにも おしえませんでした。

タヌキが ちいさな スプーンで ごはんを ひとくち たべました。きらきらごはんです。タヌキの めが まんまるに なりました。

ジソンは そこで やっと、じぶんの スプーンを みおろしました。さっきから もって いた だけの スプーンに、ごはんつぶが そのまま ついて います。

「おにいちゃん、ぼく もう たべて いい？」

よかった、だれも ひとりぼっちじゃなくて



いつのまにか、ひが 森の はしまで おりて きて いました。

パンの かごは からっぽに なり、ごはんの おなべの そこには、きらきらが すこし のこって いるだけでした。それも ジソンが ゆびで ひとつずつ ちょんちょんと つけて たべて いる ところです。

アルは そこで やっと かなづちを おきました。あしが いっぽん ぬけて いた いすが、いまは まっすぐ たって います。

あたらしく はめた あし いっぽんだけ、しろい 木の いろです。アルは なおした いすを、テーブルの むこうがわ、ひじかけの すりへった あの いすと むかいあう ところに、そっと おきました。すわる ともだちは もう いないのに。

「いすは ひとつ あまるくらいが いいんだ。」

アルは それだけ いうと、まえばで 木の えだの さきを かりかり。

ともだちは ひとり、また ひとりと うとうと しはじめました。コンイは くるくる まいた ちずを まくらに して ねころび、セオンは かたあしを おりまげた まま こっくり こっくり。ドゥドゥは ひざに あしたの しょうたいじょうを にまい ひろげた まま、ねむって しまいました。いちまいには、あてなの かわりに まるい かおが かいて あります。ヌルは テーブルの かどで、じぶんの からの なかに すぽんと はいりました。

ラッコは かえる じかんでした。でも きょうは かえらないと いいます。

「うみには あしたの あさ いえば いいよ。うみは ひろいから、わかって くれるよ。」

ラッコは かごの なかの いしたちに、ひとつずつ おやすみの あいさつを しました。ぽちゃりんに、かぜあなに、まいごの 日に、くもじゃがいもに。おむかえだけは かごに いれませ

んでした。あの いすの まえ、おおきくて まるい コップの よこに、そっと おきました。

「きみは きょう ここで ねるんだよ。」

どうして そう するのかは、ラッコも いいませんでした。

テーブルの よこ、ジソンが イデンの たねを うめて おいたところでは、ふたばの はっぱが にまい、かおを だして います。ふたばには まだ なまえが ありません。ジソンが いうには、ちいさすぎて なまえが はいらないそうです。

タヌキだけは めが ぱっちり さめて いました。ウソンと ジソンの あいだに すわって、ふとい しっぽを おなかに くるりと まきつけ、ゆうやけの 森を きょろきょろ。

ジソンが エプロンの ポケットを ごそごそ さぐって、たねを ひとつぶ とりだしました。イデンが おいて いった、ふたつめの たねです。ジソンは その たねを、タヌキの てに ぎゅっと にぎらせて あげました。

「なまえは？」タヌキが とても ちいさな こえで ききました。

「めが でたら。」

タヌキが ウソンの そでを ひっぱりました。それから おむかえが おいて ある コップの ほうを ゆびさして、ささやきました。

「あそこは だれの せき？」

「しらない。」

「じゃあ、どうして あけておくの？」

ジソンが かわりに こたえました。

「ここに いたよ。」

タヌキは しっぽを まきなおしました。ウソンも それ いじょう ききませんでした。

ほう、と とおくで おとが しました。タヌキが しっぽの なかに はなを ぎゅっと うずめました。

「あれは なんの おと？」

タヌキが おおきな こえで はなしたのは、それが はじめてでした。モリの みみが ぴんと たちました。

「ひとつめ、あれは フクロウ。フクロウは よるに おきて、あさに ねるんだ。ふたつめ、ざあーって いうのは かわの おと。みっつめ、ぷうーって いうのは クマタの はないきで、ごかいに いっかい ながく なる。よっつめ、ビーズクッションがしゃかしゃか いうのは、なかに ちいさな つぶが すごく たくさん はいって いるから。いくつ あるかと いうと、いちど かぞえて みようと おもって、はしっこを ほんの すこしだけ あけたら……。」

モリの せつめいは ながく、とても ながく つづきました。でも こんやは、それが ちょうど よかったのです。

タヌキの まぶたが いちど おりて、また あがりました。にど おりて、また あがりました。

ジソンの めも、だんだん とじそうに なって いました。ジソンの てのひらの うえでは、ピオが かたあしを おなかの したに すぽんと しまって、もう ねむって います。

「ぼく ねむくない。」

「うん。」

「ほんとに ねむくない。」

「わかったよ。」

ジソンは ちっとも ねむくない かおで、あくびを さんかいも しました。

モリの はなしは、つぶが ざあーっと こぼれた ところまできました。その とき タヌキは ウソンの ひざに あたまを のせて ねむって いました。ふとい しっぽが、ウソンの あしの こうまで おおって いました。ふわふわ、こちょこちょ。ウソンは あしの ゆびを もぞもぞ させないように、くちびるを ぎゅっと かみました。

「あれ、みんな ねちゃった。まだ はんぶんも はなして いないのに。」

「あした つづき して。」ウソンが ささやきました。

モリの かおが ぱっと あかるく なりました。

＊＊＊

ここで ひとやすみ しても いいですよ

セオンには、ねむる まえに かならず する ことが あります。きょう いっしょに いた ともだちの なまえを、ひとりずつ よ

んで みる ことです。ながい くびを おりたたみながら、とても ちいさな こえで。

「ちいさな みずどり。ウソン。ジソン。モリ。ラッコ……。」

なまえが ひとつ よばれる たびに、はんぶん ねむって いる ジソンが「はい」と こたえました。じぶんの なまえじゃ ないときも。

タヌキの ばんに なると、セオンが ふと とまりました。

「この こは……。」

「ないしょ。」ジソンが めを つぶった まま こたえました。

セオンは くすっと わらうと、「おやすみ、ないしょ」と いって、あたまを はねの したに うずめました。

きみどりの おうちの だいどころから、うたごえが きこえてきました。

「いるかも、いるかも、もう ひとつ いれよう。」

ボリが もうふを どっさり かかえて でて きました。あんなふうに うたって いたので、もうふが ひとつ あまると おもって いました。ところが ひとつずつ かけて あげて いくと、さいごの もうふが ちょうど さいごの ともだちに いきます。ウソンの ひざで ねむって いる、ちいさな タヌキに。

「もう ひとつ いれて よかった。」

ボリは じぶんの ぶんが ない ことにも きづかずに、ビーズクッションの はしに いって すわりました。クマタが めを つ

ぶった まま、じぶんの もうふの はしを もちあげて、ボリの ひざに かけて あげました。

ラッコは くさはらに あおむけに ねころんで、となりで ふせて いる ニョッキの あしの ゆびを いっぽん、ぎゅっと にぎりました。

（ラッコは うみでは、ながされないように ともだちの てを ぎゅっと にぎって ねます。きょうは 森なので、ニョッキの あしの ゆび。）

ぷうー、クマタの はないきの おと。ラッコの かごの なかからは、とても ちいさく、ぐう ぐう。いしが ひとつ、いびきを かいて いました。ウソンは おもわず はないきを かぞえて みました。いち、に、さん、し、ご…… ぷううううー。ほんとうに ごかいめに ながく なります。

ウソンは ねむって いる ともだちも、こころの なかで かぞえて みました。とおを こえると、だれが だれだか わからなく なります。セオンの あしが いっぽんなのか にほんなのかも、わからなく なります。それで ジソンみたいに かぞえる ことに しました。

『ひとつ、ふたつ、みっつ、いっぱい。』

それで じゅうぶんでした。

森の うえで ぶうーん、と ひくい はねの おとが しました。いつも ねて ばかり いた おおきな はねの テントウムシが

、はじめて めを あけました。テントウムシは テーブルの そばの くさはらに、はねを たたんで そっと おりました。

お日さまが 木の あいだから ひくく おりて いらっしゃいました。はんたいがわの そらには、お月さまが もう しろく うかんで いらっしゃいました。

お日さまの ひかりが ひとすじ、ながく のびて きます。からっぽの パンの かごを こえ、ねむって いる ともだちの もうふの うえを こえて、テーブルの かたほうまで。ひじかけの すりへった あの いすの うえで、ひかりが とまります。

はんたいがわからは、お月さまの ひかりが おりて きます。しろい ひかりが、おなじ いすに ふわりと すわります。

オレンジいろの ひかりと しろい ひかりが、おおきくて まるい コップの なかで かさなって、ゆらゆら。コップの よこの おむかえも、くさはらの ふたばの はっぱ にまいも、ふたつの ひかりを いっぺんに あびて います。

ウソンは いきを ひそめました。ビーズクッションの クマタも、かたほうの めを あけて います。クマタは テーブルの まわりを ゆっくり みまわして、ぽつりと いいました。

「みんな ここに いるね。」

クマタの めが、また すうっと とじました。

ウソンは タヌキが おきないように、そうっと からだを かたむけました。すぐ よこの あの いすの ひじかけに てのひらを のせました。

「あっ、あったかい。」

ジソンが めを はんぶん あけました。

「おにいちゃん、あしたも また この みち？」

「うん。また この みち。」

「いいね。」

ジソンは また めを とじました。ねむくないとは、もう いいませんでした。

かたの かたほうが しびれて きます。ひざには タヌキが、わきには ジソンが、ジソンの てのひらには ピオが いるからです。ウソンは それでも、じっと うごきませんでした。

テーブルの よこの くさはらには、まだ すわる ところが のこって います。すこし つめて すわれば、もう ひとりぐらい すわれるくらい。テーブルの むこうがわには、アルが のこして おいた、あたらしい あしの いすも ひとつ あります。

『よかった。だれも ひとりぼっちじゃなくて、よかった。』

おとなの かたへ わたす いちまい

この本のお日さまとお月さまは、
空に浮かぶ太陽と月そのものではありません。
いつも先に来て、席をあたためておいてくださる
天の父母様の心を、
子どもの目に見える姿で描いたものです。
子どもがお日さまに一日のことを話したら、
その話を聞いていてくださる方がだれなのか、
そっといっしょに話してあげてください。

・

あなたは、子どもにどんな人として生きていってほしいですか？

そして今の子どもに、

どんなことばを聞かせてあげたいですか？